
アリアドネの銀弾?【発端】

ariginnda

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アリアドネの銀弾？【発端】

【Nコード】

N5464Y

【作者名】

ariginnnda

【あらすじ】

「発端は・・・『奴ら』との出会いだったんだ・・・」

空手の個人戦で、全国王者を破ったご褒美に、マジカルランドに友里を連れてきた一真。

ただ単に楽しい日で終わるはずのその日に、「ミステリーハウス」で殺人事件が発生した。

その捜査を宇佐美と共にするが、その捜査中に一真の目に黒い影がちらつく・・・。

「アリアドネの銀弾」シリーズ第三弾！長き「序章」が終わりを
告げ、「発端」へ・・・。

「さあ、狩らせてもらおうか。この謎の悪意を・・・！」

STAGE 0

「一真・・・遅いなあ」

仁舞市にある最も大きなテーマパーク、「マジカルランド」での入り口のゲート前で、小野沢友里おのさわゆりは腕時計を眺めて、その後ふうつと細い息を吐いた。

黒にほんの少しこげ茶色がかかった髪型で、後ろ髪から下向けに短いあほ毛が垂れているのが特徴の少女だった。今日はホットパンツに黒色のスパッツを履き、白いノースリーブの服の上に、黄色っぽい半そでの服を着込んでいた。そんな彼女を待たせているという少年は、集合時間から十分も遅れているというのに、一向に来る気配がない。どこかで道草食ってるか、家でゲーム三昧の状態だろう。その後友里は辺りを見渡して、その少年がどこにいるか探した。

すると、向こうから白いTシャツの上に赤いチェックのシャツを着て、ジーンズをはいている少年がポケットに手を突っ込みながらやって来た。癖のある髪型（例えるならば寝癖）に、整った顔立ち、いつもかけている伊達眼鏡が印象的な少年、桐ヶ谷一真きりがやかずまが友里の方へ向いて、その後大きく欠伸をしながら友里の方へ歩み寄ってきた。友里はちよつと口元で笑いを浮かべて、その後笑顔を消して頬を膨らませてぷいっと一真からそっぽを向いた。一真は顔をゆがませて、頭に疑問符を浮かべた。

一真が友里のすぐ近くに寄ってきた。

「どうした？何で怒ってるんだ？」

「怒るも何も、遅い」

「・・・・・・」

一真は黙り込んだ。友里の耳に溜め息が聞こえた。都合が悪くなったり、考えるのも面倒くさいと思ったときに溜め息を吐くのが一真の癖だ。

「悪い・・・」

「へ？」

思いのほかの台詞！？一真が素直に謝った。これはこれで大きな進化の一步だ。

「お前が暴れだす前に来ることができなくて」

「もうッ！」

ビュンッ！と言う風を切る音共に、弾丸並みのスピードを持ったパンチが友里から炸裂した。素直に謝ったと思ったら、まさか毒舌の一つとは思ってもみなかった。

普通なら顔面に直撃して一真の体は中二飛ぶはずだがあるうことが彼は目を閉じたまま首を傾けてそのパンチをかわした。さらに、ピンツと伸びきった友里の腕を一真が掴んで、しかもなかなか離れない。もう一波を防ぐためだった。

しばらくしてから一真はパツと友里に腕を話した。相変わらずやることは憎たらしい。

友里はゆっくりと自分の腕を引き寄せ、頬を膨らませた。しばらくしてから、頬を縮ませて、笑いを浮かべて、一真の腕を掴んだ。しかしやっぱりこれ以上怒ることは出来なかった。今日は怒りたくない。

「行こ、一真！」

「お、おい」

友里は一真を引っ張りながら入り口のゲートの中へ入っていった。

せっかく二人っきりで遊園地に遊びに来たのだから、そんな日ぐらい楽しみたい。

STAGE 1

やばい……。もうそろそろ俺の今回の所持金がピンチだ。それでもジェットコースターはまだだろう？ お化け屋敷まだだろう？ 観覧車まだだろう？ 奇跡と光の城のナイトツアーもまだだろう？

……。数えだしたらキリが無い。しかも、友里の奴……。まだ遊び足りていないようだ。おいおい、冗談じゃねえぞ？ 俺の財産が破綻するわ！

「ねえ一真、次あれ乗ろうよ！」

と指を指したのは「ゴールドスプラッシュコースター」。俗に言う、ジェットコースター。たしか、「コナン」じゃこういう乗りで殺人事件があっただよなあ……。俺とコナンは何かと境遇が似てしまっているからもしかしたらもしかしたらのパターンかもしれない。とか何を思ってたかと言う事を思い浮かべながらも俺の腕は、友里に引かれて連れられていった。もう……。俺の金が死ぬんですか？

「次の方どうぞ！」

女のスタッフの人がニコニコ笑顔でコースターの座席へと導くように手をやった。そのスタッフに俺と友里は導かれるように隣同士になって座った……。いや、正確に言うと友里の強権発動で無理やりそうさせられた。友里曰く、「カップル同士なら金額は少々安くなる」だそうだ。友里がわくわく表情で辺りを見回して、その後その表情を全く変えずに俺のほうを見てきた。

「楽しみだねえ。これって、つい最近できたばかりのアトラクションでしょ？」

「そう……。だっけ？」

そういえばそうだったなあ。これもまた父さん達が働いた血税で仁舞市が総力を挙げて作り出したビッグコースターだ。あろう事が、世界で一番コースが長いだけのジェットコースターが出来上がってしまい、ギネス認定の際には総理大臣までもお出まし、そして全国放映ネットのテレビ番組まで出てきてとんでもない大人気。拳句の果てには製作に使った費用よりも、このアトラクションによって儲けた費用が桁違いな額で超え、このマジカルランドはウツホウホ状態だという。血税で大儲けした一例を持つテーマパークだ。

「ねえ一真・・・」

「ん？」

「手・・・握ってていい？」

「・・・・・・？」

俺が首を傾げると、ジェットコースターの座席の上においてある俺の手に、友里の手が重なった。そして、あろうことかそれを強く握ってきた。

痛たたたた・・・。痛いって！改めて言ってやろう。この小野沢友里という少女は普通の女の子ではない！見た目はともかく、こいつは全国の空手の女王だ。パワーは理屈抜きで想像を絶する。俺だって一発食らっただけであばらが持つていかれたことがある。少なからず、それがいまだにトラウマになっていることは言うまでもないが・・・。

「・・・ッ!？」

なんか視線を感じる・・・。何だろう・・・この冷たい視線は・・・。そう感じつつも、ジェットコースターは発進していく・・・。

「うっ・・・見ていない間に・・・私が見ていない間に・・・!」

少女の体が震えている。腰まで伸びた黒い髪にアホ毛が一本伸び

ていて、身長に至っては一五〇在るか無いかのギリギリのラインの
どう見ても幼児体型。こげ茶色の瞳を持ったその少女は、ジェット
コースターで隣同士に座っている二人の男女を見て齒軋りした。

『エリー？妬いてるのかイ？』

別世界接続端末

腕にはめている携帯端末、PLD (Parallel Link
Devise) の無線から男にしては高い声調の声が聞こえた。

馬鹿口調もついでに……。この声はいつも聞きなれている。それ
が分かったから、エリーの顔が真っ赤に紅潮していく……。

「べ、べべ別にそんな訳無いでしょ！あいつはただ単なる観察対
象で、監視対象で……。馬鹿言わないで！ジュール……」

『そんなに必死にならなくても……。じゃあ何でキミはこんな
ところまでカズマをつけていたんだい？』

ズバツと来る一撃必殺の言葉！出番が早い！予想外のこの一言に
もさすがにエリーも言葉を失う。エリーの体がフルフルと震えた。

「うるさい！黙れ！しゃべるな！」

『ハイハイ。うるさいよネ、ボク。ゴメンネ、ゴメ……。』

ブツンツ！エリーから一方的に無線を切った。

(そういえば何でだろう……)

何で、自分はこんなことをしているのだろう……。エリーはそ
う思っ、俯いて考え込んだ。

「そういえば……」

「ん？何？」

「新一もこんな風に思ってたのかな……」

「何の話？」

「ん？なんでもない……。独り言……」

俺はいつの間にやら独り言を呟いてしまったようだ。ちょっと気
を抜くとすぐ思ったことを独り言として呟いてしまう。悪い癖だな、

俺の。

俺がぼおつとしている間に友里が強く俺の手を握ってきた。だから・・・痛いって。

「き・・・」

「ん？」

何か言ったか？こいつ。と思った瞬間だった。気づいたら頂上に来ていたようだ。

「おお？」

そして、耳にゴオオオオオツ！！という爆音ごとき音ともに、俺の体がとんでもないGに潰されるような感覚に見舞われた。

「きゃあああああああああ！！！」

そして、俺の隣からとんでもなく大きな友里の絶叫が聞こえた。

耳が痛つたい！！理屈抜きで痛い！

しばらく・・・と言ったら嘘になるが、始まって十秒ぐらい経つてから、辺り一面が光の湖に飲まれるようなエフェクトが発生した。しかし・・・。

「きゃあああああああああ！！！」

隣から聞こえる友里に絶叫と、体がGに押しつぶされる感覚、レール上を爆走するコースターによって聞こえる爆音ごときの風の音のせいで、全然何があったのかが分からない。って言うか、詐欺だ・・・これは。何が「光の海に浸かって豪快な世界最長のジェットコースターに乗ろう！」だ。襲ってくるのはエンドレス的に続く気持ち悪い感覚だ。あくまで、俺感覚だが・・・。いつまで続くんだろう・・・なんて事思ってるほどの余裕なんか俺には無かった。とりあえず早く終われと思っていた。

「ツツツツ！！！！！」

絶叫すら上げられない。隣では「きゃあああああああああ！！」とか友里が楽しそうに絶叫を上げていた。俺はできない。体を反らせたせいで、Gによって肺が押しつぶされるような変な感覚のせいだ。呼吸はできるのに、声が出ない。ずっと走り続けて、その後急

に止まったときのあの感覚がちょっと強くなったように感じられる。
にしても、長い！理屈抜きだ！早く終わってくれよ！

ガタガタ・・・とコースターがゴールにたどり着き、最後にプシ
ューッという音共に白煙を上げるという、盛大な演出が現れ、よう
やく完全に停止した。

「うぐぐ・・・楽しかったね」

友里がジェットコースターから降りて背伸びして、俺に向かって
微笑みかけてきた。

「・・・・・・・・・・ああ」

ああ、疲れた。今日一日の中で一番疲れた気がする・・・。期待
はずれだな、これは。スタートしてから三十分と言うジェットコー
スターにしてはとんでもなく長い時間乗車しっ放しだったな。いく
らなんでも長すぎるんだよ・・・。俺としては、あんまり面白くな
かった。もう少しぐらい短くしろよ・・・俺主観だけど。

「ねえ、次どれ行く？」

「まだ遊ぶのかよ」

「そりゃそうじゃなあい。今日は一真の一〇〇％奢りなんだから」
「・・・・・・・・・・」

結いはまるで勝ち誇ったかのような表情を浮かべ腰に手を当て俺
に顔を近づけた。その仕草が以上にム力つく。今日ほど友里のこと
をム力つくと思ったことはない。いくらなんでもやりすぎだ。限度
を弁えてくれよ。俺を殺す気か？こいつ。傍若無人だなあ、今日の
こいつ。まあ、いつも俺はこいつに滅茶苦茶言ってるからその鬱
憤をこの期に晴らしているんだろうな。

俺は腕時計を見た。もう気づけばもうすぐ六時だ。でも、今は六
月の下旬だ。まだまだ充分明るい。

「そうだ！早く行かねえと間に合わねえ。こっちだこっち」

俺はそういつて、友里の手を引いた。今度は全くの逆パターンだ。
「へ、へ？」

友里は俺の行動の意図のわけも分からず俺に手を引かれていた。

そういえばなんだろう・・・この冷たい視線は・・・そろそろ俺のメンタルが持たんぞ？

マジカルランドに一台の車が止まった。漆黒のボディーを持つフエラーリフだ。二〇一一年に発売されたモデルで、当時価格では三二〇〇万円だったやつだ。その車から二人の男が降りてきた。遊園地に男二人というのはなかなか不自然な物だった。しかし、ここには遊びに来たというわけでは無い。その理由は誰にも気づかれてはいけない。悟られてもいけない。サングラスをかけたゴツゴツとしたガタイの男がポケットから携帯を取り出してダイヤルを押した。すぐ横では黒いトレンチコートにハイネックの服を着た、上から下まで黒づくめの服装をしており腰辺りまで伸びているホワイトシルバーのロングヘアー、身長は一九〇を超えているだろう。その男はタバコを噴かせて、自分の車にもたれかかりポケットに手をつっ込んでいた。

「ああ、分かってるな。夜の十二時に例の場所で落ち合おうぜ。・・・ああ、そこは手を抜かんぢやいねえよ。心配すんな。ZINのアニキもご同行だ。俺達はジェットコースターからお前の位置を把握させてもらう。来てなかったら最期だからな。・・・・・・・・ああ、じゃあな。また落ち合おうぜ」

そういつてゴツゴツ体型の男の方は携帯の通話を切り、パタンツと携帯を折りたたんでポケットに突っ込んで、ホワイトシルバーのロングヘアーの男の方へ振り向いた。

「アニキ・・・」

その声と共に白銀のロングヘアーの男は車から離れた。その男のタバコを銜えた口元が吊りあがった。

「ん？」

建物の上から二人の男女を監視しているエリーは何かの気配を感じた。背筋がほんの少し冷たい。寒気が一瞬走った。エリーはその感触を感じ取り、辺りをキョロキョロ見渡した。

『どうしたんだイ？エリー・・・』

「ん？嫌、なんでもない・・・」

エリーはジュールの声に対し、静かに答えた。その後、顔を俯かせ考え込んだ。何故か動悸が止まらない。

（何だろう・・・この感じ、どこかで・・・）

エリーは下を見下ろし、下を見渡した。

そして、見つけた。

黒ずくめの服装をしたホワイトシルバーのロングヘアをした男の姿に目が止まった。

「ッ！」

息が詰まる。体が、必死で逃げろと命令し続けていた。エリーは視線を外し、後ろに倒れこんだ。体が震える・・・。恐怖に精神を支配されていく・・・。

（何・・・で？何で・・・彼がいるの？）

嫌だ・・・。エリーが一番会いたくなかった男だった。何で、こんな所にあの男が？と言うさまざまな感情がドツと流れ込んできた。エリーは恐怖の感情を殺して、もう一度下を見回してみた。

その男の姿は・・・。

「あれ？」

いなかった。

（何だったんだろう・・・幻影かな？）

そう思ったらエリーの動悸がおさまってきた。精神が落ち着いてきた。エリーは後ろにまた倒れこみ頭を抑えた。

（何してるんだろう・・・私。こんな時に・・・。何でこんな時に彼の幻影なんか・・・）

『エリー？どうしたんだい？本当に』

「何でも無い・・・何でも無い、から」

エリーはまた体を起き上がらせてまたマークしていた男女二人に視線を移した。

「ああっ！」

あろう事かその二人は手をつないでいる！エリーはフルフルと体を震わせた。

（何やってんのよ！バー真あ！）

エリーは急いで建物の間をひよいひよいと飛び越えながらその二人の後を追っていた。

STAGE 1（後書き）

例の二人はもちろんあいつらがモデルです。苦情覚悟で書きま
した！

誤字脱字があればいつでもどうぞ！

STAGE 2

俺と友里は息を切らせながらマジカルランドの園内を走り回っていた。俺は片方の手で友里の手を引き、もう一方の手でバランスを保つために使っていた。そのバランスに使っていた腕にはめている腕時計を見た。

（後二分か）

急がなくては。俺は友里の全力スピードを無視して、尚且つ、絶対離さないように強く友里の腕を掴みながら全力疾走した。

「はあ、はあ。か、一真あ。どこ向かってるの？」

「付いてこりゃあ分かるよ！」

「ええ？」

友里は顔をゆがめて必死で俺のスピードについてきた。でも、結局は息切れが激しくなってきた。それだけで、だいぶロスしそうになる。こんなところで立ち止まっているわけにはいかない俺は友里から手を離し、力ずくで背中に乗つけた。

「へ、へ？」

「掴まってるよ？」

俺は友里のOKも待たずに走り出した。

「ちょ、きゃあ！」

おんぶしてるには結構速いスピードだ。まあ、そうだろうな。こいつの体重は……。聞いた事が無い。教えてくれるはずが無い。まあ、こいつも一応は女の子なんだから、あって四十後半ちよつとか、五十ちよつとか。

まあ、言っなければ俺にとっては造作も無い体重と言うことだ。友里の胸の膨らみがやたらと俺の背中に当たるがそこは安定のスルーだ。お得意のスルースキル発動だ！ 気にしたら負けだということぐらい分かる！

「ちよつと……。一真」

「ん？何だよ」

「お・・・下ろして？周りの人の目がちよつと・・・」

「面倒くさいからヤダ」

「えええ・・・」

友里の落胆の声が聞こえると共に、俺の後頭部に友里の吐息が直で当たってきた。

どん位走っただろう。時計を見ると六時ちょうどまで三十秒だった。しかし、もう俺の目当ての広場は見えている。おぶられている友里は俺の目的地の方向を見た。

「もしかして一真。あの広場のこと？」

「まあな」

俺はそれだけを吐き捨て、そのまま走り続けた。

そして、付いたところには後十五秒だ。俺は友里を下ろし、もう一度友里の腕を掴んで、その広場の中心に立った。友里排気を切らせながらも、俺の顔を見てきた。

「ね、ねえここに何があるの？」

「まあ、見てなつて」

俺は腕時計に目を落として、友里の体を俺のほうへ寄せた。「へ、へ？」と言う声が聞こえた気がしたが無視だ無視。

そして、カウントダウンした。

「10・・・9・・・8・・・7・・・6・・・5・・・4・・・3・・・2・・・」

そして、俺は腕時計のを付けている方の腕の一本指を立てて、天にかざした。

「1！」

その瞬間ザァッ！と言う大きな音と共に周りから噴水が噴出した。それが何十に幾重にも噴出し、俺と友里を囲った。噴水の水は太陽の緋色の光を浴びて、水の色までもが緋色に染まりあがり、輝いていた。友里視点では幻想的な光景だろうな。証拠に友里の目が光っている。その幻想的な光景を目の前に笑顔を浮かべて周りを見

渡していた。

「綺麗……。もしかして一真、これを見せるために？」

「まあな。しんどくなっても見る価値はあると思うぞ？」

「うん！」

さすがに俺が何にもしなかったら後々の報復が怖いからな……。来ててもかわすけど……。

「ま、全国の王様を破った程度で、こんなことまでしてやってんだ。有難く受け取れよな！」

俺は胸を張って尊大な言い方をした。……本当はすげえ思ってたけど……。もう逆らえない。

「何よ、えらそうに」

友里は俺の眼をじと目で見てきて、ひじで俺のわき腹をつついた。その後で、俺は笑いを浮かべていつの間にもやら買っていたコーラ二つを懷から取り出して一つを友里に手渡した。

「乾杯しようぜ！」

「うん！」

でもなあ、気づかないよなあ。俺だってハイになっていたから冷静な判断力が欠落していた。

つまり、さつき走り回ったときに中身のコーラに何が起こっていたのか……。

「ぶはあッ！」

「ひゃッ！」

中身からコーラが一気に飛び出してきた。冷静に考えてみればすぐ分かることだが……。考えてみればすぐ分かることのはずだった。お互いはコーラでべたべたになったコーラの顔を見合い、一気に笑いが顔から飛び出してきた。面白いもん……。そりゃ。

ナイトツアーまであと四時間。それまで何しようか……。なんて

こともう分かっている。行く場所は決まっている。

「じゃあ、友里。次はミステリーハウスにでも入るか？」

「ミステリーハウス？」

「ああ。ゴルドスブラッシュコースターと同時期に作られたアトラクションなんだ。そこでは目の錯覚や平衡感覚を利用したトリックがいろいろ積み込まれているんだとよ」

「へえ・・・」

たぶん、友里の気持ちは決まったんだろうなあ・・・。

「行く！行きたい！」

「・・・」

ほらやつぱりな。単純だよなあ、こいつ。催眠術にすんなり引つかかるとか言うタチだよ、こいつ。じゃあ、ミステリーハウスに入ったらどうなるんだろうなあ。案外そつちが楽しみだったりする。

そつちえば・・・冷たい視線がさらに強くなっている気がする・・・。
気が・・・持たんぞ？マジで。

『エ、エリー！？』

エリーの体からどす黒いオーラがめらめらと揺らめいている。ジュールはモニター越しで見ていたが、そのモニター越しでもしっかりと見て取れる。一真が・・・一真が・・・！！

「うぎぎぎぎっ！」

『エリー、落ち着いて？落ち着こうよ。ネ、ネ？』

「落ち着いていられたかつつの！」

『落ち着かない理由がわかんないヨ。エリーはカズマの事なんとも思っていないんだ口？そうカツカしなくても良いんじゃないかな？ただ単にPPAに出された任を全うしているだけなんだ口？じゃあ、落ち着いて。カズマに気づかれたら任務失敗だヨ？』

「・・・」

本日二度目の一撃必殺！怒りも重なってさつきより大きく体が揺れた。

「うるさい！黙れ！喋るな！それ以上言つなあ！」

『シート！シート！声が大きいヨ。気づかれちゃうヨ！』

「あッ！」

エリーは急いで両手で口を押さえた。オーラも一瞬にしてフツと消えた。建物の上からひよっこり顔を出してみると一真がキヨロキヨロと辺りを見回していた。危ない……。そろそろ勘付いてきたのか？しかし、結局は安堵の息を吐いて、そのまま目的地に向かつて歩いていった。怖かったあ……。エリーは胸を押さえて安堵の溜め息を吐いた。

『ほら、言わんこつちゃ無い……。危なかったネ。でも、そろそろ勘付かれるかもヨ？』

「う、うん。気をつける……」

エリーの声が一気にしぼんだ。

「どうしたの？一真」

「ん？いや、なんでもない」

俺の声が危うく裏返るところだった。俺は後ろを目だけで見て、顔を引きつらせた。

い、いまエリーの声が聞こえたような気がする……。何だったんだ？いや、そんなわけが無い。あつてたまるか。俺はエリーにもばれないようにこっそり家を出たはずだ。なのに、勘付かれるなんてこと……。あるわけないか……。

さすがに、挙動不審かな？俺は咳払いを一つして、またポーカーフェイスを出した。

「あ、あれじゃないのか？ミステリーハウスって」

俺が指差した方向に大きく「MYSTERY HOUSE」と

言うロゴが貼られた。大きな洋館がたのアトラクションがあった。ずいぶんと長い行列だ。すごいなあ、始まってまだ間もないのに、もうこれかよ……。待ち時間二時間って……。おいおい。

どうする？もう六時半だぜ？暇潰すとしたら……。

「なあ、友里」

「なに？」

「いつちよ行ってみるか？」

「何に？」

「ゴーストタウン」

「……………」

友里の顔が一気に青ざめてブルブルと体が震えた。予想通りの反応ありがとう。

「い、い行くの？本当に」

「ああ、暇だしな」

「で、でも……………」

「あれって？」

「あれって……………」

友里が顔を青くしながら口をつぐんだ。まあ、気持ちは分かるけど…………俺はなんともないけど、こいつが今思ってることは恐らくとは思ってはいる。けど、こんな、もじもじ状態の友里もなかなか面白い物だ。ちょっと傍観しておこう。

「つまり……………」

「……………」

俺は何も言わずただただ傍観。何かリアクションおこすのだろうか？

「……………」

「……………」

微妙な沈黙感だ。何だか変な気分になる。友里は首をぶんぶん振り、俺のほうに顔を向けてきた。

「か、一真」

「ん？何だ」

「行くけど、条件有り」

「？」

「あのさあ、動きづらいんだけど・・・」

俺は暗闇の中で友里のほうへ向いた。そう、あの恒例のパターンだ。友里は俺の腕にしがみついていた。友里の歩調は明らかに俺の歩調より遅い。見て取れる。だから俺が動きづらいのだ。

「で、でも・・・これが条件だし」

「暇つぶしだろ？たかが。とっとどこからでて、ミステリー行つて、最後のシメはナイトツアーだな」

「一真、まだ残ってる」

「ん？何が？」

「観覧車・・・」

「残ってたっけ？」

「うん」

そういえばそうか・・・。何も全部乗ろうとしなくても・・・。そんな油断していると痛い目合うのは分かる。

ダガンツとでかい音が聞こえ、上からゾンビ型の幽霊セットがボトトツと落ちてきた。もちろん、俺の横の奴の反応は分かっている。耳ガードの準備を・・・。

「きゃああああああああああああああああああああああああああああああああッ！！！！！！」

「どはあ！」

耳ガード無効だ！？友里の悲鳴が直で俺の耳に刺さった。キーンと言う耳鳴りが俺の耳に鳴り響いていた。いってえ。

連れてくるんじゃないかった、こいつを・・・。たぶん、この中じや爆音ごとき友里の悲鳴を延々と聞き続けなければいけないのだろ

う。

耳の中でゴオツと言う耳鳴りが聞こえる。キーンでは無くゴオだ。横では友里が散々叫び散らせていたから、俺の耳にトンでもないダメージが蓄積されていた。痛かった……。本当に。さて、何時だろうか？

「おし、もうそろそろ空いてきたかな？」

「一真？」

友里がまだ涙で赤くなつた顔で俺のほうへ振り向いてきた。

「おし、友里。さつさとミステリーハウス行こうぜ」

「う……。うん」

友里は溜まっていた涙をぬぐって頷いた。まだ怖いのか？俺は友里の頭をぽんぽんと叩いてポケットに手をつ込んで歩き出した。そつえば、冷たい視線がすっかり無くなってしまっているんだが……？

「さ、さすがにあそこだけは……」

エリーはゴーストタウンの建物とは向かい側の建物の屋上で一真と友里を見張っていた。さすがに、あのお化け屋敷を一人では入れない。

『あれ？エリーってオバケ怖かったのカイ？』

「そ……。んなわけないでしょ！私がお化けなんて……」

『じゃあ、尾行すればよかったのに、何でダイ？』

「何でって……」

『何で？』

「何でって……」

そしてエリーは口をつぐんで、顔が赤くした。

『やっぱり怖いんだ』

「怖くなんか・・・!」

『じゃあ、今から一人ではいれば?』

「ひ、一人で!？」

エリーの声が引きつった。何よりの証拠だ。やっぱり・・・。

『エリー、素直になりなさい。っていうか認めなさい』

「・・・はい」

エリーはしゅんつとしよげながら肯定した。まさかこの馬鹿口調に簡単に打ちのめされるとは・・・。

STAGE 3

「うわあ……。見てみて、一真！水が坂を上っていくよ？」

「……………」

「はは、やつぱり。すつげえはまり込んでいる。面白いなあ。こいつのリアクション。」

「ねえねえ何で分かる？一真」

「あ、ああ……。つまり、この床の斜面がそのセットされている仕掛けの斜面を上回っているんだ。逆向きにな」

「へえ」

「俺たちは、バランスを保つため、体を地球の水平面に対して垂直になるうとするんだ。だから、ただただこの水が上り坂を登っていくように見えるんだよ」

「へえ……。何でもしってるねえ、一真は」

「まあ、ちょっと小耳に挟んだ程度だけだな……。ははは」

俺は苦笑いを浮かべながら人差し指で頬を掻いた。俺はまた一つ咳払いをして、素の顔に戻した。

「ほら、んな所で時間食ってたら、ナイトツアー間に合わねえぞ？」

「ん？」

友里はつけていた腕時計を見た。現時間、九時三十分。タイムリミットまであと三十分。

「うわっ！ホントだ！ちゃっちゃと全部見回って早く行こ！奇跡と光の城に！」

今度は俺が振り回されるターンだ。友里は俺の腕を引っ張ってきた。

「うわ！」

いきなりな物で俺の体が前につんのめってしまった。そういえば、次のところって……。

俺はテレビで見た情報を頭の中で回想した。

「うわわわわっ！」

友里が俺の目の前で平衡感覚を失い千鳥足のような状態になった。俺だって、少々危ない。マジでこけそうだ。床は全然動いていないのに、周りの情景が右回りに回っているものだから、俺の頭と、俺の体を感じている情景が合っていない。そのせいで頭の中がごちゃごちゃになつて、千鳥足となつているのだ。しかしなあ……

「うわわわ、か、一真あ！た、助けてえ！」

「……………」

ふらふらふらふら。そんなんでよく空手女王になれたな……。ある意味驚きだ。俺だってあんなに千鳥足になるわけが無い。

「友里、お前それは大袈裟にやつてるのか？それだったらスゲー滑稽だぞ？」

「お、大袈裟じゃないからあ！だから助けてえ！ひゃっ！」

漫画ならずでーんと言う効果音が鳴っているだろう。友里はバランスを保ち続けることができず、後ろからこけた。

俺は溜め息を吐いて、呆れ顔を浮かべた。世話のかかる奴だなあ……。

俺はバランスを保ち続けながら友里に歩み寄った。友里はいまだに立ち上がれずにいる。

「イタタタ……」

友里はいまだに打った部位を抑えていて苦悶の表情を浮かべていた。俺は友里の前に立ち、手を差し伸べた。ようやくバランスを保つコツを掴んだから、余裕で立てる。

「世話のかかる奴だなあ。ほら、早く立てよ」

友里は急の俺の行動にびっくりしてるんだろうか、頬を赤くして俺の目を見つめてきた。あの、友里さん？そんなにじろじろ見なく

ても良いんじゃないか？

しばらくしてから友里は俺が伸ばした手を掴み、俺は友里の手を掴んで引つ張った。何とか友里は立てたそうだが、やっぱりふらつと友里の体がふらついた。俺は掴みっ放しだったから、何とか友里が倒れる前に腕を引つ張って、体を支えてやった。

「か、一真・・・？」

「周りの情景にとらわれるな。この地面が水平だということを意識しろ。そうすればバランスを保てる。体の体感を優先するんだ」

「う、うん・・・」

友里が頷いたと分かると俺は友里の手を放し、友里の様子をじつくりと伺った。

息を吸い込むと、何かが鼻に刺さったような感覚がした。なんだか、鉄のにおいがする。どっかで錆びてるのか？これ。俺はキョロキョロと辺りを見回しそのにおいの根源を探した。

上からか？でも、何で？俺は壁の隙間から上を覗き込んだ。・・・ま、暗いから見つかるわけがないけど・・・。

「うわあ！一真、見てみて！私も立てたよ！」

「そうかい、そりや良かったな。進化の第一歩だ」

残念ながら、俺の意識は友里の喜ぶ顔より、この変な臭いの根源だった。普通じゃあかぐことがないからな。もしかしてのもしかしたら血の臭いだったりして・・・いや、それもありえないか。どっただけ流血するんだよ。

俺は鼻で溜め息を吐きながら友里のほうへ振り向いた。

「おい、進化に浸るのも良いが、早く・・・」

その瞬間だった。

「うわあああああああああああああッ！！！！！」

「ッ！」

「っ！？」

俺も友里もいきなりの男の悲鳴に、一瞬心臓が止まるかと思った。まさか！まさかッ！？

俺はその声のする上のほうへ向かっていった。でも、どこから？

「まさか・・・」

俺は走り出した。まさか・・・まさかつ！俺は駆け出しながらミステリーハウスの中を探し回った。たぶん、スタッフルームの近くか、出口近くに、セツトを管理する場所があるはずだ。そこからこの場所にたどり着けば・・・。

「一真！どこいくの！」

後ろから友里の声が聞こえるが、今は構ってる暇なんか無い。もしかしたらかもしれないのだから・・・。

数ある人の感覚を狂わすセツトもあったが、完全に無視だ。数分もしない間に、出口にたどり着いた。

（ここからか！）

俺の目の中には影に隠れた鉄製の扉があった。ドアノブに手を伸ばした。しかし、ガチャガチャと音が鳴るだけで、ドアが開かない。

「くそつ。手間がかかるなあ！」

俺は懷からピッキングツールを取り出し、鍵穴を覗き込んだ。ついでに腕時計を外して、LEDライトを点けてから、口に咥えて鍵穴を見えるように照らした。影で見えないしな。

俺はツールを鍵穴に差し込んで、起用に鍵穴の奥へ奥へと差し込んでいって、ぐるっとツールをまわしてみた。

すると、ガチャンと言う鍵が開いた音が聞こえた。

（よし・・・）

俺は腕時計を口から外して、ツールを引っこ抜いて、鍵が開いたドアを開けた。そろそろ友里が来るころだろうが、構ってる暇は無い。

早く行かねば・・・。

そして、俺はそこにたどり着いた。そこには男のスタッフらしき

人がのけあがつて恐怖の表情を浮かべているのと、セット上で首が取れて首が無い死体が倒れ、その人の首がごろつと転がっている光景だった。

「一真、どうしたの！」

「来るな！友里！」

俺は友里が来る方向を手を伸ばして友里の動きを制しようとした。しかし、それが仇となってしまったらしい。そんなことすれば友里の性格上、もっと気になってこっちに駆け寄ってくるはず。それを、俺はとめることができなかった。

そして、友里の目の中にも俺が今見ている光景が映っていた。友里は驚きのあまり、眼を大きく見開かせた。ある意味お化け屋敷よりも怖い。

「きゃあああああああああああッ！！」

「見るな！友里！」

友里が恐怖のあまり目をつぶり涙を浮かべていた。そんな顔を俺は覆い隠すように胸の中に抱いた。こいつには、まだあまりにも衝撃過ぎる画だ。俺の胸の中で、ぶるぶると友里が震えているのが分かる。

「早く警察を呼んで！」

「は、はい！」

スタッフである男はすぐに立ち上がっておそらく事務室の方へ駆け出して行ったのだろう。俺はその人の背中を目で追い、その後現場に目を向けながら、友里の背中をぽんぽんと何度も叩いた。

「むごいな・・・」

俺は俺にとつての常套句を呟きながら、生唾を飲み込んだ。

「で？君がたまたまここに遊びに来て、たまたまこのアトラクションに来て、そしてまた、たまたま現場に居合わせた・・・と言う

わけかい？桐ヶ谷君」

俺の目の前では宇佐美淳二警部がじと目で俺の顔を見ながら腰に手を当てていた。

細身の体に、整った目立ち鼻立ち、俺視点では「普通の体型、普通の容姿をした警部さん」だ。

俺はその嫌味風な態度をとる警部を鋭い目つきで睨みながら、後頭部をカリカリと三本指で搔いた。だからといって、警部に喧嘩を売る気も無い。多分俺が負けるからな。

俺は溜め息を一つ吐いて、答えた。

「そうです。全てが全て、一〇〇%たまたまです。事件が探偵を読んでも、探偵が事件を読んでいるのやら・・・。全く・・・」

「君が自分のことで呆れられても、僕はフォローしようがないんだけどねえ・・・。聞くところによると、今日はデートだという噂が立たなくてねえ。勿論友里君とだよ？君は友里君とのデート先でも事件を呼び寄せるなんて・・・。死神体質だね」

「それは警部の勝手な妄想ですね。百歩譲ってそんな日は一生来ないと思いますので。それに、死神体質なんて止めてください。そんなことを言ったら、次死ぬのは警部かもしれませんよ？」

「それはどうかなあ？僕は対人戦ではまず負ける気なんかしないし、君も「恋なんかしない」とか言う気持ちも、五年もすればきつと変わるよ？ま、手綱はしっかり掴んどくんだね。じゃないと逃げられちゃうよ？」

「警部の奥さんみたいですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

すっかり黙り込んだ。俺は心の中で大きくガッツポーズをとった。よし、逆転勝利！

警部は自分の現在の心情をごまかすかのように咳払いをして、現場に目を向けた。横から見れば分かる。メチャクチャ悔しそう・・・。下唇の半分をかみ締めて、顔を少ししかめていた。その表情を見て薄っすらと笑う俺って結構いじわるなんだな。

警部は胸ポケットから警察手帳を取り出し、そこに取っていたメモを読み上げた。

「被害者の名前は塩野渡海^{しおのつかい}さん。二十九歳。マジカルランドのアトラクション、「ミステリーハウス」のスタッフの一人で、前は大観覧車のスタッフだったらしい。しかし、「ゴルドスプラッシュコースター」と同時期に「ミステリーハウス」が完成し、塩野さんは「ミステリーハウス」のスタッフに回されたらしい」

「そうですか。できた当時はメチャクチャ客足があったから、結構楽しかったんじゃないですか？金儲けで言うならうつほうほの状態ですね」

「何だよ・・・そのわけの分からない例の仕方は・・・まあ、そうだったと言うわけだったよ。でもね、桐ヶ谷君。人間は一度幸福を覚えてしまうと、そこからは離れられないんだよ。分かるかい？意味が」

「大体は・・・。その手の類に事件は結構遭遇しますね、俺は」
「そう、そこからだよ。彼を殺すような動機になりそうなことがあったのは。かれは今後の予定で、また違うアトラクションにまわされることになっていたんだ。確か、「海賊JYブランコ」だったみたいだったね」

「人気なしワースト1のアトラクションですね、それ。そりや楽しくないな」

「だろうね。それがきっかけで彼は自暴自棄に陥って、仕事場で乱暴に振舞っていたんだよ。お客さんにもかなり乱暴だったらしいよ」

「そりや嫌われるわな。警部はならないようにお願いします。乱暴は縁の切れですからね」

「君はまずその毒舌暴言症候群を治そうね。じゃないと乱暴しいって言うことは保障できないよ」

「その時は警部の傷害罪の現行犯ですね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

よし、またしても圧勝！所詮警部は格闘ばかりの脳筋ノイキンだったとい
うわけだ。高校生の戯言なんて上手いことかわしていなさなくちゃ
な。

「うおっほん！つづき・・・」

どうみても投げやりだ。なんつつう言い草だ。

「続きの前に一つ聞かせてください」

ずびっ！と手のひらを突き出して警部を制した。

「容疑者は絞れますか？」

「まあね・・・」

警部はぱらぱらと手帳のページをめくり、そのページまで送らせ
た。

STAGE 4

エリーは「ミステリーハウス」向かいの建物の屋上から眺めていた。もちろん、そこが立ち入り禁止となっていることも知っている。なにやら警察が押し入ってきて、立ち入り禁止のテープを入り口に貼り付けていた。

「何だろ・・・何があったの？ジュール」

エリーはPLDの無線に話しかけた。きっとジュールならすでに情報ぐらい掴んでいるはず。

『殺人事件だヨ。カズマ達が遺体を見つけて、あの警部さんと一緒に捜査してる』

「殺人？そう・・・なんだ」

『入りこむ？』

「うーん・・・。ばれたくないし・・・けど、一真だけでそんなことさせたくないし・・・」

『ハイ！早々に結論を求めるネ！』

「現場待機・・・。一真・・・こわいし・・・。怒っただけど・・・」

『・・・相当来てるネ。この前のこと』

「・・・」

エリーは全く否定できない。本当の本当にあのときの一真の怒り用といたら、実際目で見ないと分からないものなのだから・・・。

「一人目は一井和利さん^{いちいかずとし}。この「ミステリーハウス」の経営責任者。動機として挙げられるのは、一昨日にまたお客さんに乱暴な振る舞いをしている塩野さんを注意したところ、言い合いになり、そこはすぐ収束したんだけど、経営が終わった後に塩野さんに殴られ

たらしい」

「大の大人がですか……。フン……」

「何笑っているんだい？」

「想像したら滑稽すぎて……。横っ腹が凄く痛いです。警部、いい笑いのセンスです」

「笑い事にするのかい？探偵失格だよ」

「……」

今のは傷ついた。『あの事件』のせいでその言葉はちょっと余り口にしたくないし、聞きたくも無かった。警部はまた警察手帳に目を落とした。属に言うノーフォローだ。

「つづき……。次の人は池井美音さん。いけいみねさんこの人もこの「ミステリーハウス」で働いているスタッフだよ。この人はちよつとディープかな……」

警部は俺の目の前で顎に手を当てて考え込んだ。ん？ちよつとまづいラインかな？いい子供達にはあんまり聞かせたくないことかな？「続けてください。言わなければ俺が意図してこの事件を迷宮入りします」

「僕を脅すなんて……。いくらなんでもやりすぎだよ、迷宮入りなんて」

「俺を子ども扱いにするからですよ」

「……」

「……」

いつまでも続きを言わない警部に鋭い目線を送った。警部は溜め息を大きく吐いて、また警察手帳に目を落とした。

「つづき……。この人が犯行を行うとすれば動機と思われるのは、塩野さんが彼女の元彼だったらしい。けど、三年前ぐらいに捨てられて、かなり気が荒んでいたらしい」

「で、その復讐かと？」

「多分ね……」

「ふうん……」

俺は警部の相槌を聞いて、口を手で隠すように顎に手を当てて考え込んだ。確かにそれはあり得る・・・かな？人の感情と言う物はちよつとした事で一撃で殺意を芽生えさせてしまうからな。ま、それは池井さんに面向かって話してみなくちゃ分からないけど・・・俺はアイコンタクトで続けるようにと言う目線を送った。警部は分が悪いような表情を浮かべた。何か悪いことでもしたっけ？俺。それでも警部は小さく花のため息を吐いてから頷いて警察手帳に眼を落とした。これが師弟のコミュニケーションの仕方という物だ。目を合わせるだけで何を言いたいのかがすぐに分かる。

「つづき。あと二人だね。次は、音蔵^{おとくらおとや}乙矢さん。まあ、この人もこの「ミステリーハウス」で働いているスタッフの一人だよ。この人は塩野さんの仕事の後輩で、この人は塩野さんに先輩だからといって、彼からいくらか金を巻き上げていたらしい。まあ、ばつさりと云えば、金銭的な問題だね」

「よくあるパターンですね」

俺はそんな短い感想を言つて、息を吐いた。さすがに毒舌を混ぜた感想を言うのは疲れてきたな。しかも今日の警部は調子がよろしいようで、俺の毒舌を軽く受け流すスキルを全開にしまつてくれるらしい。俺としたら面白くないのだが、さつさとこの事件を終わらせたい、という気持ちが俺の中で先走つていた。今日できたら良いんだけどなあ。

「桐ヶ谷君？」

「はい？」

警部が俺の顔を覗き込むように言ってきた。

「いつもの毒舌がなくなったようだね。大人しくなっちゃって」

「疲れました、単純に。全部警部のせいです」

「僕のせい？ひどいよそれは。ま、いいか。じゃあ次でラスト一人」

ほらな。軽く受け流された。っていうか気にせずスルーされた。受け流されてもスルーされても困るんだよなあ。せめて突っ込むか

落胆してくれないと面白くない。・・・ま、必死で返してきても困るだけけど・・・。

「猪唐武雄^{いとうたけお}さん。この人は高校時代のバスケット部の先輩で、結構その時は仲がよかったらしい」

「動機が無いから除外」

「最後まで聞きなさい。この人の場合は、この人の両親の方に問題があるね。実は塩野さんは猪唐さんのご両親に金を貸しているらしい」

「なんで？つてか誰から聞いたんですか？この短時間で」

「もちろん僕の部下が猪唐さん本人から聞いたんだよ。君から通報受けてすぐに向かわせたんだ」

「やっぱりこの警部は凄いよ。行動がとんでもなく早い。つて言うか異常な速さだよ、超能力かよ。それについていく警部の部下もめちゃくちゃ凄い。」

「で、」

この言葉で続けた。

「塩野さんはこの猪唐さんの両親にお金を貸していたらしい。しかも結構な高い金利で」

「いくら？」

「二ヶ月三割。貸してた金額は合計で八十万円だったんだつて。それがもう三年前から」

「じゃあ、計算すると、約二千万ぐらいですね。つて言うか、さつさと返せばいいものを、そんなに膨らむ前に」

「返しても返しても返しきれなかったんじゃないかなあ。もう猪唐さんのご両親は定年で働いていないし、それでもタクシーの運転手とか、コンビニの店員とかで、稼いでいたけど、膨らむ一方。その事実を猪唐さんが知ったのはつい最近。一緒に飲みに行った時、塩野さんが酔いに任せて言った言葉で知ったらしい」

「殺すとしたら、両親のためを思ってたつての仲間を・・・。でもそれを仮定したらどうやって殺したのが・・・」

「そうだよねえ。何か容疑者全員パツと来ないんだよねえ。殺すとしたらの場合の動機が曖昧なんだもん」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺も同感だ。確かに、人を殺しそうな動機がいつぱい浮かんだが、何か一步足りない。本当にそんなことで人を殺してしまうのだろうかと言う感じた。まだ何か足りない。何かが・・・。

「警部！このアトラクションの仕掛けの中からこんな物が」

警部の部下のおじさん鑑識さんが袋の中に入れたピアノ線らしき物を見せてきた。そのピアノ線らしき系には真っ赤な血液が付着していた。たぶん塩野さんのだろう。

「・・・・・・・・？」

俺はそれを覗き込むように目を細めた。なんだ？これ。べったりと付いた塩野さんの血液のほかに薄っすらと点々と十箇所ぐらいに血痕が小さく残っていた。俺は首をかしげて体勢を直して、顎に手を当てて考え込んだ。

「どうしたんだい？桐ヶ谷君。何か変なところでもあるかい？」

「いや・・・何でも」

俺は表情を元に戻して、警部に顔を合わせた。結構無理やり気味だと思うけど・・・。

「どうしたんだい？顔を引きつらせて」

「何でもありませんよ。あの、警部？」

「ん？なんだい？」

「現場見てもいいですか？」

「ん？ああ、いいよ。もちろん」

警部が道をどけるように脇に避けてくれた。って、んな事しなくても普通に通れるけどな。このセット裏は薄暗いが結構広いからぶつかることはほとんど無いだろう。

俺は警部に小さく頭を下げて堂々と現場の部屋に入った。少し薄暗い現場の部屋にはもうあの首無しの死体は警察に回収されているらしく、その死体が転がっていた箇所にはビニールテープでその死体

の形を示していた。

その死体が転がっていた場所の近くにはこの仕掛けがしっかり動いているのかを確認するためのものであるう、肩幅よりほんの少し狭いぐらいの穴開きの覗き窓があった。その覗き窓の右側に比較的多くの血痕がビッシヤリとへばりつくように残っていた。

俺の目が入り口にドアの上ぶちに止まった。

（なんだ？あれ）

セロテープ・・・か？それが肩幅より少し大きいぐらいの間隔で二枚貼り付けられていた。俺は少し考えて、俺の頭の中に何かのイメージが浮かんだ。

（もしかして・・・）

俺はすぐに覗き窓の方へ駆け寄り、縁の辺りを調べた。もちろん、視界が悪いから時計型LEDライトを点けてだ。そして、俺は見つけた。

俺は思わず笑みを浮かべざるを得なかった。

（なるほどな。こうやって殺したわけか）

でも、どうやってこの仕掛けを作ったのかわからない。殺し方は分かったがそんなことができるのか？出来るとしたら俺や警部みたいに運動神経が良くて、体の間接が柔らかい必要がある。

俺は顎に手を当てながら考え込んだ。

（やっぱ、直接顔をあわせて聞いてみるしかないな）

俺は小さく溜め息を吐いて後ろへ振り向いた。そこには容疑者だろうさっきの塩野さんと同じユニフォームを来た三人のスタッフがその現場を呆然と見詰めていた。そして茶色の短いボブカットの髪型をした女の人が膝を付いて泣き崩れた。

俺はそんな光景を横目でやりながら警部の方へ歩み寄った。

「警部、あの人たちは？まさか、容疑者のうちの三人ですか？」

俺は警部の耳にささやくように聞いた。警部は少し目を見開かせてその後俺から視線をそらせてその三人に向けた。

「ああ、そうだよ。彼らが猪唐さんを除く、容疑者の人たちだよ」

俺はその言葉を聴いて小さく何度も頷いた。俺は時計に眼をやった。今日の無いとツアーはあきらめようかなあ。事件が起きたとして中止食らってるだろうからなあ。後で友里になんて言い訳をしようかなあ……。ん？友里？

そういえばあいつはどうしてんだ？現場見て追い払ったけどあいつ今いったいどこにいるんだ？

「どうしたんだい？桐ヶ谷君」

「いや……。友里今どうしてるんだろうかなあって……。さすがにこんな置いてけぼりにしておくわけにもいかないですしね」

俺は苦笑いを浮かべて警部に顔を向けた。そして、その苦笑いをといて目を開けてすぐに入った情景は警部がすごいい嫌味でじと目をしているという光景だった。あ、やばい俺の気づかぬうちに警部のトンでも嫌味スイッチをONにしまったらしい。

「やっぱり桐ヶ谷君でも女の子を思う心があるんだなあってね。」

桐ヶ谷君進化の瞬間だ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

さっき俺も友里に同じことを言ったような気がする……。まあ、さて置き、やっぱり俺は気づかぬ内にとんでもない事をしでかしてしまつたらしい。さてどう打とうか。いつもは後手後手に回って気づいたらとんでもないダメージを追つてしまつているというパターンになつてしまつているのだから、今回は先手を打とう。

「じゃあ警部、俺はちよつと友里の様子を見てきますんで」

と、俺はその現場から走り去つた。後ろから「ちよつと、桐ヶ谷君！」と言う警部の声が聞こえるがそこは安定のスルーだ。気にしてられない。先手を打つたよ、確かに。「エスケープ」と言う形だな。

「？」

そして、俺の目が一瞬止まつた。うずくまつて泣いている人の手の平が一瞬見えた。あれは……。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺はそのさつき見た情景を頭の片隅に置いて、そのままその薄暗い廊下を走り去っていった。

STAGE 5

友里はミステリーハウスの外で警察の人と一緒にいた。さっきの首無しの死体の映像がなかなか頭から離れてくれない。忘れたいの全然忘れられない。真っ赤な鮮血がベツシヤリと部屋の壁に飛び散っている映像が友里の背中に冷たい感覚を走らせる。

(一真・・・一真・・・！)

何で一真はあんなにも平気なのだろうか？あんなバラバラ死体を見て友里の顔を覆い隠せるだけの余裕があつた。何でか分からないでも、今は一真の胸の中に飛び込みたい気分だ。あの時に見たバラバラ死体のせいで、トンでもないトラウマになってしまった。あの時も、一真が友里の頭をすぐに包み込んでくれた。あの時はほんの少しだけ恐怖がぬぐえた。

「友里！」

向こうで友里を呼ぶ声が聞こえた。小さな時から聞きなれた声で。

友里は女の刑事さんに背中とかを時々ポンポンと叩かれながら、慰められていた。ん？表現が変だったかな？なんだか疲れ切って、文章を頭の中で作って解説するのはやり辛いな・・・。思っている以上に全力疾走だったからな。俺は友里のほうへ向いて、「友里！」と大きな声であいつの名前を呼んだ。そして、友里は俺の声に反応して、こっちに振り向いてきた。

「ん？」

なんだか友里の体がわなわなと震えてるような・・・。何でだ？

「一真あ！」

「ッ！」

突然の大きな声にびっくりするわ！てか何でだ？何があつたんだ

！？

「一真あ！」

「ハイッ、ストップ！」

友里が何やら俺の胸に飛び込みそうになってきた。それを友里の頭をグイッと押して上手いことガードできた。友里はあわやバランスを崩しかけて倒れそうになった。ま、そこは何とか持ちこたえてくれたけど。しかも、もしここで倒れこまれてしまったらトンでもないきわどいアングルになってしまうことは間違いないだ。

「うう・・・」

「何でそんなに泣きそうな顔になってるんだ？何かあったか？まさか、またオバケがみえたあ！とか？」

「そんなんじゃないわよ！何だか・・・」

「何だか・・・？」

「・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・」

何だろう・・・。このとんでもなく重苦しくて、気まずい沈黙の時間は・・・。何だかやりづらい雰囲気だ。どうする？どうやってこの空気を紛らわす？

「ああ・・・と。早く捜査に帰んなきゃいけないから・・・、う

ん。話はその後でな」

「か、一真・・・」

「ん？」

「わ、私も、一真と一緒にいる」

「・・・？」

何をおっしゃってるんだ？この少女は。待て待て。って事は、こいつは単純に俺と一緒に居たいだけなのか？どこまで俺の引っ付きたがりなんだよ。こいつは。ここでYESと言って置かなければ、「もう知らない・・・」とか言ってプイッと愛想を尽かされるだけだ。そして、後が怖い・・・。今はなんとしてもそんな事態は避けねばならない。

「わあつたよ。好きにしろよ」

俺は友里から視線を外しながら苦虫を潰したような表情を浮かべながら言った。しょうがないからこうするしかない。俺は溜め息を吐きながらチラツと友里の方へ向いた。ほんの少しだけ笑顔が戻って機嫌も直ってくれたみたいだ。危ない危ない。今度はスイツチを押さなくてすんだようだ。俺も友里の顔を見て口元で笑った。ま、放つとしても付いて来るだろうなと思いながら俺は友里に背を向けた。

「おっと・・・」

振り向いた先に俺の身長を二十センチぐらい超える男が立っていた。下から上まで黒ずくめでホワイトシルバーのロングヘアーが特徴的な男だった。

（GINに似てるな）

本当にあんな奴がこんなところで見れるもんなんだな。それなんだ・・・こいつの目。冷たすぎる。全ての闇を見てきたとか言う目だ。

（・・・・・・？）

何だろう。さっきから右目が微妙にズキズキする。気づいたらドクドクと眼球が鼓動しているようなあの感じだ。

「どけ・・・」

俺の目の前にいる男は俺を左の方へ押し出して自分の通り道を作ってそのまま歩き去っていった。俺は押し出されてあわや倒れるところだった。ま、俺のバランス感覚だって舐められたものじゃないから倒れることは無い。

「？」

バランス・・・感覚。そういえば、あの仕掛けをするにはそれ相應のバランス感覚が要るよな・・・。

「ッ！」

そうだ。バランス感覚がいそうなことを考えろ。あの仕掛けが出来て、運動神経があつて、バランス感覚があつて、あの全体重を支

えられるだけの腕の力がある人。そういえばあの時……。

「ッ！」

俺の頭の中で電撃が走るような感覚が出た。

「そうか……」

もし俺が予測したとおりの状態であつたのなら……。俺は友里をほっぽり出すように走り出した。もちろん、現場に向かつてだ。それ以外に行く場所なんかどこにある？

「ちよつと、一真！どこ行くの！」

「現場に決まつてるだろ！」

「現場あ！？ちよつと、待つてよお！」

後ろから友里の大きな声で俺の制止を促すような声が聞こえたが、今は無視だ。この俺の推測を完全に立証出来得る証拠が消えちまうまでに早く行かなければいけない。タイムリミットも分からない。だつたら一刻も早く行かなければいけない。

「ZZZ……」

『おい、エリー起きろお。ボクが気づかぬ間に何寝てるんだい？』

とわ言われても暇な者だからしょうがない。確かにあの現場に直接乗り込むのが一番得策なのだろうが、そうすれば一真の激怒必至だ。だからミステリーハウスの向かい側の建物の屋上で息をひっそりと潜めて一真がいつ出てくるのかを待つていたのだが、こんなにも何もせず、しかも標的も現れないんじゃないや暇でしょうがない。眠くなるのは……頷ける。ジュールだつてそれぐらいは重々承知だ。

しかし、職務上、ここは起こしてやらねばならない。

『おい、エリー。起きなさい！』

「う……ん？」

『仕事中！』

「・・・・・・・・」

エリーは寝ぼけ顔の目をこすりながら半開きの目をぱちくりさせて辺りの情景を見回して、小さく溜め息をついた。

『おはよう、エリー。仕事中に居眠りなんてするなんてネ』

「う・・・・」

エリーの頬が見る見るうちに紅潮していく。焦ってるなど言っぐらいジュールでも一発で分かる。

「ち、違う！これは違う！これは・・・」

『これは？』

「・・・・・・・・」

こつ言葉に迷っているエリーを見るのはなんだか面白い。こつは静かに静観しておこうとジュールは思った。

「これは・・・」

『・・・・・・・・』

静観静観。ジュールはそう自分の中で言い聞かせながら。エリーの高潮している顔を拝んでいた。向こうからはこちらの表情は分からない。それを言いことに、笑いの表情を浮かべていた。

「これは・・・、えーつと。そうだ」

『ウン』

「ちよつと考え事してただけ！深い深いお前なんかじゃ考えられないくらいふつく雑なこと」

『ナルホド。さすが優等生は違うネ。ボクみたいな情報処理能力と複雑回路電子機器の扱いと情報収集とそれから・・・』

「ストップ！」

ストップが掛かった。さすがに行き過ぎた。

『たった三つぐらいのことしか出来ないボクなんかじゃ考えられないことなんだネ』

「ジュール、あんたちよつと私より頭の回転が速いからって、私をおちよくってるでしょう！馬鹿にしてるでしょッ！」

『まさか。この会話の中のどこにキミを馬鹿にしてるような言動

なんかしてるんだい？それに、ボクはキミに「バカ」なんていった覚えなんか無いよ？」

「それ！その態度！その態度が私をバカにしてるって言うの！」

「今の君の怒鳴り声がとても面白いヨ。カズマ風に言つと「滑稽だ」かな？まさに今のエリーはその通りだね」

「もう！馬鹿バカばか！」

「さて、話戻して、キミは何を考えてたんだい？頭の悪いこの外道たるボクに教えてくれないかな？」

「う・・・それは・・・」

またエリーの顔が火照るように赤くなった。

「それは？」

静観モード、スイッチオン！さてここからが面白い場面だ。しかし、この後まさかの予想外の展開が起きてしまった。

「うるさい！黙れ！喋るなあ！！」

「ん？エリ・・・」

ブツン、と一方的にエリーが通信を切った。あんなにエリーを追及してくるジュールなんか初めて見た。（実際には顔が見えないので見てないことになるが・・・）

でも、考え事をしていたのは確かだ。なかなか一真が出てこない物だから、ちょっと目をつぶって考え事をしていた。

そういえば、何を考えてたんだっけ？一度熟睡してしまうとそれ以前に何を考えていたのが全く思い出せない。でも、ジュールの声が聞こえる前に変な絵を見た。嫌な絵だった。エリーはその絵を思い出すと、首を横に振ってそのイメージを振り払った。

（ま、あんなことが起こる訳無いか・・・）

そうエリーは割り切ったような表情を浮かべて空を見上げた。

起こるわけが無い絵、一真が体中を銃弾によって貫かれてしまい自分達の前から消え去ってしまうなんて変な絵を頭に思い浮かべな

がら……。

「ちょっと、一真。何してるの？」

俺と友里は今アトラクションの中の通路外の溝の中にいた。そこでもこの仕掛けの壁を回転させるためのメインの歯車の力をさらに大きくするためのもう一つの歯車があった。

そう、ここにあの刑事さんが見せてくれたピアノ線があった場所だ。

もし、俺の推論が全て正しければここに痕跡が残っているはず。それが気づいている刑事さんがしっかりと印をつけてくれているはず。

俺は地面をライトで照らしてその痕跡を探した。どこだ、どこにある。俺はそう思いながら上も照らした。そして、見つけた。

俺はいつものあの癖、左手で右目を覆い隠し、人差し指の第二関節で眼鏡のブリッジを押さえた。さて、どう犯人さんを切り崩していこうか。俺は薄っすらと口元で笑いを浮かべた。

（さあ、狩らせてもらおうか。この謎の悪意を……）

STAGE 6

「何なんですか。まだ帰らせてくれないんですか？もう、捜査は終わったと聞きましたよ？」

俺は必死で捜査の容疑者から外れようとする容疑者衆を見つめていた。隣では友里が俺の懷に隠れて、容疑者衆を見つめていた。

必死で言ってくる容疑者衆三人に対して、警部がなだめるように言った。

「ええ、全ての捜査は終わりました。これから、その真相をお話するんだそうです」

「そうですっ？」

三人の中で、ガタイの大きい男、一井和利さんが前に出て、顔をゆがませて警部に迫った。そりゃそうだな。あんな言い方じゃあ、人任せっぽく聞こえるもんな。

「そう、その真相にたどり着いた、この少年の推理をどうか聞いてやってください。高校生探偵の、桐ヶ谷一真君のね」

「……………」

その警部の言葉とともに、容疑者衆三人の目が変わった。いや、変わってしまったというべきか。何言ってるんだよ、この警部は。とうとう警部までもが俺のことを高校生探偵なんて、警察が探偵なんかに頼るなんて、本当はだらしない話なんだけどなあ。まあ、犯人が分かったには変わりないけどな。

俺は後頭部を力リカリと掻きながら、警部たちの前に出た。

「君があ有名な高校生探偵、桐ヶ谷一真」

「うそ……」

一人の長身のひよる体系の人、音蔵乙矢さんと、さつき膝をついて泣いていた女の人、池井美音が絶句した。もうこんな所まで名が知れ渡っていたのか……。落胆したい気分は山々だが、早く真実を解き明かしてやらねばならない。

俺は咳払いを一つした。

「さて、今回の事件は誰もいない部屋で、人が首を吹っ飛ばして殺人を犯したということが、第一発見者の人によって、立証されました」

「待てよ、ってことは、今回の事件は密室殺人、と言うわけか！？」

俺の言葉に噛み付いてきたのは一井さんだ。俺は人差し指を立てて、場を制するような仕草をした。

「そ、各アトラクションの掃除係であつた第一発見者の人は自らで鍵を開けたといっていました。そして、マスターキーを持っているのは、アトラクションの清掃していく掃除係の人たちと、この「マジカルランド」のアトラクション開発責任者、アトラクション整備士だけ。この「マジカルランド」のオーナーでも持っていない。犯行を犯せるのは、このアトラクションの人と、さっきマスターキーを持っていると言った人たちです。しかし、この時点で、マスターキーをもっている人たちは除外してもいいでしょう」

「どういうことだよ！」

本当に男気あふれる人だなあ。俺の言ったことにいちいち噛み付いてきやがるなあ、一井さんは。でも、ここで俺が毒舌暴言で対抗してしまうと推理ショーが泥沼化してしまう。それは避けよう。

「まず第一、マスターキーを持っているのは先に言った人たちだけですが、管理しているのは他でもない、事務所の人です」

「じゃあ、第一発見者はどうするんですか？それに、もう一人の容疑者の人はどうなるんですか？」

これに噛み付いてきたのは池井さんだ。

「もう一人の容疑者、猪唐武雄さんはアリバイがあります。塩野さんが殺されたのは開園時間である午前十時、実は午前十時ごろ猪唐さんは同僚と出張場から帰る途中で、その時間帯は新幹線の席に座って寝込んでいる時間帯でした。帰って来たのは殺人が発覚する一時間前、警部の部下たちが猪唐さんのお宅に捜査を入れに行った

ときには、もう疲れてふらふら、とても犯人にするには無理があります。という訳で、猪唐さんは容疑者から除外。そして、第一発見者である掃除係の人も除外可能です」

「何で？」

これで全員だ。最後は音蔵さんが俺の一言に噛み付いてきた。

「掃除係である第一発見者は、しつかりと掃除用具一式を持っていました。もし、殺人を犯しているのなら、まず一番最初に疑われている第一発見者でいる理由がありません。そもそも、営業時間考えてください。警部の部下の人から聞いたんですが、アトラクションの掃除をするのは、一日二回。まずは殺人が発覚した時間である、午後九時半ごろと、閉園前の時間である午前の二時ごろです。そんな時間で、ふらふらと清掃員の姿で誰かが殺人現場から現れたら、誰かが気づく、と言うより、悲鳴聞こえてすぐに駆け込んだ俺が気づきますよ。あの扉から出て、いちいち鍵をかけるなんてリスキーなんてことは普通しないでしょう。俺がああの扉をピッキングして入っているのですからね。その辺りは確証付きです。と言うことで、第一発見者の人も除外。残るはあなた達ですよ。一井さん……池井さん……。音蔵さん……」

俺は三人の容疑者を順に見た。

「さて、まずこの犯行に行われたトリックをお教えしましょう」俺はそのそのトリックに使ったと思われる、平衡感覚を失わせる仕掛けに近づいた。

「方法は簡単、この仕掛けを回す支柱に、犯行に使われたと思われるピアノ線を引っ掛けて、この覗き窓の傍に塩野さんをおびき寄せるだけです。ほら簡単」

「でも、密室だったんだろ？塩野はなんで鍵を閉める必要がある？」

これは一井さんだ。

「たぶん、犯人がそこに塩野さんが誰にも見られなく無い物を放り込んだんでしょう。証拠に、棒か何かでいろいろな箇所を突付い

た跡がありました。ま、その跡の中には犯人がその棒を使った跡も残っているでしょうね」

そして、俺は念を押すように言った。

「塩野さんの首を吹っ飛ばしたと思われる、ピアノ線を、トリックに使ったと思われるこの仕掛けの回転柱に下から巻き、それをこちら側に引き出すための、棒の跡がね」

「・・・・・・」

容疑者の三人は黙って俺のほうを見ていた。その視線を無視するように俺はその殺人現場から出て行った。

「桐ヶ谷君、どこへ？」

後ろから警部の声が聞こえた。俺は立ち止まらず腕を上げた。それは単純にその部屋にいる人たちを制すると言っただけのメッセージ、と言っことぐらい分かってもらえるだろう。最悪でも警部なら。

「俺はこのトリックを作るだけです。今、みんなの前でこのトリックを作って差し上げますよ。そうしたら、自然と犯人も分かります。何たって、このトリックを作るのは、犯人だけですから」

俺はその部屋にいる人たちに見せないように口元で笑みを浮かべた。

「う・・・・」

エリーはまたあろうことが見張り台として確保した建物の上でうつ伏せで寝ていた。

『エリー・・・・エリー』

エリーのPLDからジュールのエリーを呼ぶ声が聞こえる。しかし、今度は全然起きてくれない。これは起きる気配が無い。こうなったら起きるまで放っておこう。と言っのがジュールが出した結論だった。

しかし、本当はここでおこしたほうが良かった。エリーは今、さ

つき見た夢の続き見ていた。

あの、一真が、銃弾によって打ち抜かれるあの夢を。

——ぐッ！

頭から血を流した一真が銃弾によって打ち抜かれるたびに短い悲鳴を出す。声が聞こえると次々に乾いた銃声が響く。

——ぐ……がッ！

乾いた銃弾が、一真の足を、腕を、腹を貫き、血潮が飛び交う。血潮が飛び交い、それを眺める銃の持ち主が口元でゆがんだ笑みを浮かべる。どこまでも冷たい、笑みを浮かべる。

そして、仰向きに倒れた一真の目は、明確に光を捉えてはいなかった。ただただ、自分に銃口を向けている男を見ているだけだった。そして、その銃口は明らかに一真の心臓を狙っていた。

——じゃあな……名探偵

その瞬間、乾いた銃声が響いた。

「ッ！」

そこで、エリーの目が覚めた。呼吸が整わない。さっき、自分が一真になった気分だった。自分の銃弾が次々と撃ち抜かれていった。そして、何の抵抗できない感じ。相手の威圧によって自分の体が凍りつく感じ。忘れはしない。あの時と同じような感覚は、忘れることが出来ない。

エリーはいつの間にやら白い清純なワンピースの裾から出た自分の腕をさすっていた。熱帯夜の外気を超えるような寒気が、エリーの体の内から出てきて、包み込んでしまった。暑い夏のはずなのに体中から鳥肌が立つなんて、変な感じだ。

「・・・・・・・・」

エリーは腕をぶらん、と下げると考え込むように頭をたらせた。エリーの長い漆黒色の張りのある髪の毛が背中にもたれかかった。自分はその夢で、一真になっていた。まるで、これから先に一真に起きることを告げるかのように。その時、確かに一真を撃ち抜いていった人物は・・・。

「いやッ」

エリーは首を横に大きく振り、頭の中の映像を振り払った。思い出したくない。思い出してしまうと、すぐにそれに呼応するかのうに『彼』が現れてしまいそうで怖い。自分の周りの人たちが、『彼』によって全員消されてしまうのが怖い。

—— S H E L Y・・・

(ッ！)

—— S H E L Y

(ッ！！)

何故か、エリーの頭の中で、『彼』の声がこだまする。

そうだ、夢のときと同じ事を、エリーは経験した。あれがきっかけで、自分の人生は大きく傾いた。

—— S H E L Y・・・！

「いやッ」

エリーは両腕を掛けて目をぎゅっとつぶり、首を横に振った。想像したくも無い。幻聴も聞きたくも無い。あの声を聞くだけで、自分の全てを食い尽くされてしまいそうだった。そう、友里も、ジュールも、PPAの皆も。そして、一真でさえ、食い尽くされてしまいそうだった。しかし、今は『彼』の姿はどこにも無い。今からそんなことがおきるはずが無い。そう思って、自分をちよつと誤魔化してみると、少し気が楽になった。

エリーは堅い瞼を開き、こげ茶色の瞳でただただ地面を見つめた。そうだ、あるわけが無い。よりにもよって、一真があの組織と関わるなんて事……。そう思いながらエリーは暗くなった空を見上

げた。このくらい空をより強く照らすのは、向こうの方にある、西洋式の城型のアトラクションのナイトツアーによって大きく、強く照らされた光だけだった。

「まだかい？桐ヶ谷君」

警部が覗き窓から俺がいる場所を見下げていた。俺がトリックを作り上げてからまだ三分も経っていないって言うのに、気が早いんだから・・・。

俺はそう思いつつも作業の手を止めず、着々とピアノ線を回転柱に巻きつけていった。そのあと、すぐ傍の壁に付いている、小型の懐中電灯をつるす為のフックに、巻きつけたピアノ線を引っ掛けた。さて、ここは終わりだ。後は・・・。

俺は上の覗き窓を見上げた。

「フツ・・・」

うつかりと鼻で小さく、息が抜けるような笑い声を出した。簡単なトリックでよかった。やっぱ「コナン」読んでいてよかったよ。

あれは物理トリックが主だから、どういう仕組みで、どう殺人を犯すのかが理解が出来る。これも、「コナン」を読んだことによって得た、『耐性』と言う物だ。

「警部！」

「ん？なんだい？」

上から覗き込む警部は俺を見下げて声を上げた。その声がこの仕掛けの中でこだまする様に響く。

「そこにゴミがこの仕掛けの中にあつたときに、取り除く為の棒があるはずですよ！まずそれを手にとって下さい」

「ん？」

警部の顔が覗き窓から消えた。たぶん俺が言ったものを探しているのだらう。その後約十五秒ぐらい後に警部の顔と共に何かを

引っ掛ける為の棒が現れた。

「これかい？」

たぶん、警部が取り出した棒を指しているのだろう。勿論、合っている。

「そうです。それで、このフックに引っ掛けたピアノ線を引っ張り出して、その部屋に出しておいてください」

「ん？分かったよ」

と警部は言うなり手をいっぱい引っ張り出して俺が引っ掛けたピアノ線に引っ掛けようとしていた。

「あれ？」

上から警部の疑念の発言が聞こえた。そう、俺の目の前には確かに棒が降りてきた。しかし、それだけだ。俺の目の前で棒が空を切って横に縦に振り子のように揺れているだけだった。

「あれ？届かない？」

警部が無理して腕を伸ばした。いやいや、そんな事したら警部の体が……。

「っッ！」

警部が顔をしかめて顔が引っ込んだ。ほら言わんこっちゃ無い。無理するからだ。俺は小さく溜め息を吐いて上を見上げた。まあ、こうなることは予想していたけど……。

「桐ヶ谷君……僕には無理だよ。ちょっと、腕の筋肉が攣っちゃったよ」

「そうですか、すいません。実は警部」

「ん？」

「実はそれ、確信犯なんです」

「……………」

警部の目が点になった。いきなりの発言にどう対応すればいいのかわからなくなっているようだった。

「へ？」

やっと口を開いた。俺はあくまでも無表情で上から俺を覗き見下

げる警部の顔を見ていた。

「じゃあ、僕がこんなことになるって事は知ってたって事？」

「可能性は高いと思っていました。すいません」

さらっと、とんでもないことを言った俺。警部は大きく溜め息を開きながら俺をじと目で見下ろしていた。

「じゃあ俺がそこに行くまで待っていてください」

俺はそういう残し、トリックの土台となっている場所を後にして、現場に向かっていった。

「大丈夫ですか？ 宇佐美警部」

友里が宇佐美に近寄り、一真のせいで腕を攀らせ、苦悶の表情を浮かべている宇佐美の顔を覗き込んだ。友里の気配を感じるなり、苦悶の表情を消し、笑いを浮かべた。でもやっぱり、痛そう。目がぴくぴくしている。

「大丈夫だよ。桐ヶ谷君の蹴りを貰うよりはマシだから」

「本当にすいません」

もう、頭を下げたい。と言うよりもう下げてしまっている。宇佐美はなだめるような表情を浮かべ、友里の頭を見下げていた。

「いいよ、友里君。君が悪いんじゃない。桐ヶ谷君の犯行意思を読み取れなかった僕が悪いんだよ。後で、報復しとくから」

「・・・・・・・・」

笑いを浮かべながらさらりと怖いことを言った宇佐美。ある意味怖い。友里も一真に対して笑みを浮かべながら脅迫することはたびたびあるが、なんだか上手いこと言い負かされ、はぐらかされる。しかし、今の宇佐美を見たら、さすがの一真も震え上がるだろう。見せてみて一真が本気で震え上がる表情も見てみたいとも思っていた。

「警部、怖いですよ。さらりとそんな事言わないでください。や

り返しますよ」

出入り口のほうからあの毒舌暴言上手な探偵さんの声が聞こえた。どう聞いてもあまり怖がっていないようだった。

俺は警部がとんでもなく怖いことを言っていたのを聞いていたが、さっきそんな事すれば傷害罪だと言っておいたので、あんまり怖くも無かった。やっぱり先に打つ者は布石だよな。

俺は小さく鼻でため息を吐いた警部を横目に、さっき警部が覗いていた覗き窓に近づいていった。

「さて……」

俺はもはや常套句のようだ出だしで、推理の続きを話した。

「さっき警部にもやって貰おうとしたように、犯人はさっき警部が使っていた……」

と、ここで言葉を切り、警部が痛みを感じて放り投げてしまったと思われる棒を拾い上げ、くるりと一回転させた。

「この、ボール状の長い棒を使い、俺がさっき引っ掛けてきたフックに引っ掛けてあるピアノ線をここに引き上げ、持ってきたセロハンテープを、あの入り口の上縁に貼り付けて、メールが電話でここに塩野さん呼び寄せる。その後、塩野さんにセotto裏に塩野さんが見られたくないものがあったという。もちろん、塩野さんは激昂したでしょうね。なんせ、セotto裏なら、さっき俺が仕掛けに行った場所まで行けば良いはずですからね。でも、早く取りたい塩野さんは、何とかしてここからその物を取りたい。そこで、目に付いたのは……」

俺はその後警部が放り投げた、長いボール状の棒に目を向けた。みんなの視線も、その棒に目を向けた。

その瞬間、みんなの頭の中には、思い浮かんだはずだ。どうやって、ここで塩野さんを密室に追いやり、首なしの死体を作りあげら

れてしまったのか・・・。

俺は推理を続けて行つた。

「塩野さんは下に降りるのが勿体無くと感じ、すぐそこにあつたボール状の棒を手に取り、この覗き窓か下を覗き込み、手に持つているボール状の棒で、その塩野さんが見られたくないものを引き上げようとした。もちろん、それも犯人の狙い通り。あらかじめ用意しておいたんですよ」

「待つてくれ！桐ヶ谷君」

ここで俺の推理を止めたのは警部だ。

「僕は届かなかつたけど、もしかしたら塩野さんは届いたのかもしれない！そうなれば彼はどうやって？」

「届きませんよ・・・」

俺は静かにそういうと、警部は顔をゆがめて、首をかしげた。

「あの距離は、ギリギリ届かないんですよ。あそこを覗き込んでもバランス感覚で立ち続けれて、それで尚且つ関節が柔らかい人つて言うのはどういう類だと思えます？」

「そりゃあ、僕みたいに運動神経がいいのなら・・・体操選手・・・かな？そうになると、絞られるけど、この中には・・・」

警部は三人に容疑者を一目した後、俺の方へ向いた。

「いますよ？しっかりと。この中にね」

そうだ。あの時に見たものが幻ではなかったら。犯人は・・・。

「そう、犯人は・・・あんだだよ」

そして、俺は犯人を人差し指で示した。

「池井美音さん」

STAGE 7

暗闇の空間の中でタバコの煙が上空へ舞っていた。そのタバコを吸っている男は壁にもたれかかり、腕を組んで自分の被っている帽子で目を隠していた。上から下まで黒ずくめの男で、ホワイトシルバーのロングヘアーは、その男の背中によって壁と押しつぶされるように広がっていた。

あの時のあの女の顔……。いつもぼうとしていると何故かあの顔が思い浮かんでくる。あの顔……。この組織を裏切り、あるうことが「A」のメンバーと一緒に高飛びをしようとしていたところをこの男はそれを見つけた。まずは「A」の脳天を打ち抜いた。身構えていると言う事を完全に無視して、「A」の頭に風穴を開け、飛び散る脳漿を見て、口元をゆがめて静かに笑った。あの時、あの女の、決意と恐怖に塗りつぶされたあの表情が消えない。睨んではいるが、明らかに目の色は恐怖の色一色だった、あの表情を、何故か壊すことが出来なかった。「A」が残した、最後の「切り札」によつて逃げられた。

「フン………」

そんな考えに老け込んでいる自分を想像してしまうと滑稽に思える。あるう事か、任務中にほかの事を考えてしまっている自分の姿を想像してしまうと、ついつい笑ってしまう。

今は任務中だ。任務中にほかの事を考えるなんて御法度だ。楽しみは後にとつて置いたらいい。

「ZIN^{ジン}のアニキ」

横のほうから自分の事を呼ぶ野太い男の声が聞こえた。ゴツゴツ体系の上から下まで真っ黒のサングラスが印象的な男だった。

「どうだ、WAR^{ウオライ}RAY。あの男は来ていたか」

「いえ、どうやらまだみてえです。もしかしたらあの男、取引すっぽかしてトンズラしたんじゃない」

「いや」

Z I NはすぐにW A R R A Yのマイナス思想を否定した。

「お前も分かっているとおり、あの男は自分の立場が危くなるとあらゆる手段を用い、自らの保身に走る。今回の案件は奴が一役買ったおかげで、安泰にこの件は行く事になった。いかなかった場合の加えられる制裁ぐらい、あの男ぐらい知っているはずだ」

「V O R G A V E Lの奴ですかい。あいつが絡んでいたとなれば、下手に動けないですね、あの男も」

「ああ、だったらオレ達は気長に待ってやれ。奴への最後の饒別だ」

そう言つてZ I Nは暗くなった上空を見上げた。表情は彼が被っている帽子でうかがうことが出来ない。最悪でも、目は見えない。

「そういやあ・・・」

Z I Nの横で、彼の上を見上げる顔を見上げながら、W A R R A Yが口を開いた。

「あの女が組織を裏切りつて逃げ出した日から、六年ですね、アニキ」

「ああ、そうだな」

さつきからずっと考え込んで耽っていた内容だ。わざわざ何を考えていると口にせずとも、自然と読み取る。パートナーを組む上で心強いキヤパシティだ。

「まさか、アニキからこんな長い間逃げおおせるなんて、思つて無かつたですね。一つの山潰しやあ、恐れてのこのこ表に現れると思いきや、他のところに移つていやがつた。まさか、アニキが今考え込んでいるのは、あの女ですかい？」

「ああ、あの時のあの女の顔が離れないんでなあ。殺した奴の顔は忘れられるが、裏切つた奴の顔はどうにも忘れられない。ま、時が来れば向こうから赴いてくるだろうからなあ」

そして、Z I Nの口元が嗜虐的なゆがみ方をした。

「フン、その時は祝いの血潮をあげてやろうじゃないか。あの白

い肌を真っ赤に染め上げる、緋色の花を添えてな」

そうだ、楽しみは後に取っておこう。それだけ、緋色の花は華やかに咲き誇る。

俺の眼前では、犯人であろうと思われる池井が眼を大きく見開かせ、目元と唇を小刻みに震わせて俺の顔を見つめていた。両隣の井さんと音蔵さんは驚愕の表情で隣にいる池井を見ていた。

「み、美音ちゃん・・・本当かい？」

「そんな、そんな事私！？」

池井はしゃべりかけてきた一井さんに必至で公言しようとした。

「いえ、池井さんが犯人で間違い無しですよ」

「じゃあ、証拠はあるんですか！？」

俺の発言に対して反抗するように前に出てきた。

「証拠ですか。証拠なら、あなただけがこの仕掛けができたと言うことにつきます」

「へ？」

「どういう事だい？桐ヶ谷君」

俺の後ろから警部が聞いてきた。

「警部のガチガチ体石で証明されたでしょう、さつき」

「ガ・・・ガチガチッ！？」

「ガチガチでしょう。いしからだひと石体人警部」

「言いすぎだよ！」

「さて、さつき言ったことを言ってあげますよ。大きな証拠になりますからね。さて、池井さん。一つ問います」

俺は警部を無視して池井に向き直り、あくまで冷たい目でみた。

「何でしょうか？」

「あなたは、体操をやっていましたね？」

「なぜ、それを？」

予想だにして無かったかのようなことを聞かれたのだろう、驚愕
いつぱいの表情を浮かべた。

「さつき、友里を迎えに行ったときに、あなたの手のひらを見ま
した。いや、見えたといった方が相応しいでしょう。あなたの手の
ひら側の人差し指から小指の付け根に角質が出来ていました。そこ
に視認で切るほどの角質が出来ているという事は、毎度毎度強い負
担を掛けていたということが分かります。つまり池井さん、あなた
は鉄棒をやってましたね？」

「・・・・・・・・」

「この仕掛けを作るには、俺みたいに運動神経が良く、バランス
感覚がずば抜けて、関節が柔らかくて、このアトラクションの構造
に詳しく、そして、自分の体重を腕一本で支えることが出来、持ち
上げるほどの腕力がある人のみ。それを踏まえると、あなたが必然
的に犯人なんですよ、池井さん」

「待つてください！」

前に踏み出してきたのは、音蔵さんだ。

「ミネちゃんは塩野先輩が殺された時、僕達と一緒にいました。

怪しい行動なんて一度も・・・」

「しなくてもいいんですよ。池井さんは、仕掛けをすればそれで
いい。後は勝手に塩野さんが、このアトラクションを起動させれば、
首がぶっ飛ぶんですからね。見方を大雑把に変えれば、自滅です」

なるかなあ・・・。ならないようなあ・・・。ま、そこは今考え
たところでどうこうできない。

「みたところ、あの壁にかけている時計は開園時間十時にアラーム
がなるそうで、覗き込みながらも、覗き窓の右下にある起動ボ
タンを押せますからね。しかも、塩野さんがこの覗き窓を覗きこん
でいる理由は、絶対に見られたくない物を取り出すため。自分の肩
に、しかも服越しにピアノ線が乗ったなんて気付くはずも無い」
「でも、それだからってミネちゃんが犯人だって証拠には・・・」

そう音蔵さんが必死に弁明をしていたところに、出入り口から警部の部下の人が、一枚の紙と、ポリ袋に入れたピアノ線を持ってきた。

「警部！」

「何だい？」

「桐ヶ谷君の言うとおりでした。ピアノ線に塩野さんの血液のルミノール反応のほかに、五個の血痕からもルミノール反応が検出されました！しかも、それが池井さんの血液型と一致しました。それと、これが池井さんの鞆から・・・」

警部は手を伸ばし、部下の人が差し出してきた用紙を取り出した。

「これは・・・」

それに目を通した瞬間、警部は神妙な顔つきになり、隅々まで眼を通して、俺に手渡してきた。何で一般人である俺に手渡したのかは分からないが、とりあえず受け取ろう。

俺は警部からその用紙を受け取り、一目した。そして、目がその紙から離れない。こいつは・・・。そして、俺は口元でゆっくりと微笑んだ。

「なるほど。これが、塩野さんが見られたくないものだったのか・・・」

それは、借用書だった。嫌、正確に言えば偽の借用書だろう。よく出来ている。そこに書かれていた人の名字は、「猪唐」と書かれていた。つまり、これは容疑者の一人だった、猪唐武雄さんの母親の借用書。どうやら、正確な手続きはせず、このトイチ以上の利子で貸していたのか。これじゃあ、れっきとした違法だ。そう、もしこれが誰かに知られれば、逮捕物だ。

「さて、証拠がさらに二つで、合計三つ。さあ、池井さん。あなたの言い分をお聞かせください」

池井は一向に口を堅くつぐんだまま黙り込んでいた。

「実音ちゃん？」

一井さんが池井の顔を覗き込む様に話しかけると、堅かった池井

の口がふつと緩んだ。

「どこで気付いたんですか？」

たぶん、俺に聞いているのだろう。俺は鼻で小さく息を吐き、口を開いた。

「俺がさっき言った、推論じゃあ、あなたを犯人に仕立て上げるのは難しい。けど、他の従業員の話によると、あなたは今日いつもより早く九時ぐらいにここに来て、このアトラクションの裏から何も持っておらず、清掃員の服を着た女性が出てきたと言っていました。あそこに入れるのはマスターキーを持っている人が、このアトラクションのスタッフだけだと判断できます。でも、マスターキーを持っている人は先の理由で容疑者から除外。つまり、犯人はあなただけだということになるんですよ」

俺がそういうと、池井は力を抜くように息を静かに吐き、何か吹っ切れたような表情を浮かべ、尚下を向いて俯いていた。

「そう、君の言う通り。塩野君は私が殺しました」

俺は数回小さく頷き、息を吸った。

「差し支えなければ、動機をお話できますか？予想はしてませんが、確証性が無いんで」

「はい。刑事さんが知っている通り、私は塩野君と三年間交際していて、別れています」

「ああ・・・そういえば塩野の奴が凄惨に実音ちゃんをふったんだっけ？」

一井さんが池井の顔を覗き込むように聞いた。

「はい。でも、それだけが動機なんかじゃないんです・・・」

「へ？」

後ろで音蔵さんが顔をゆがませて疑問の顔を浮かべた。警部の顔だって、目元がぴくつと動いた。ちよつとイレギュラーだったな。

女心はやっぱり分らない。（展開もちよつと速いな・・・）

「彼は私と別れた後、他の人とまた付き合い始めて、でもそれだけじゃ別に殺そうなんて思いませんでした。けど、彼はその後これ

見よがしにその彼女とのツーショットを見せつけてきて、その後もお前とは違つてとかを口癖に私に文句を言ってきて、それがエスカレートし始めて、それで・・・」

「殺したんですか。今日に至つて」

俺は彼女を見下げて静かに言つた。あくまでも冷たい口調で。

「はい。ここは、塩野君と私が付き合い始めるときに、彼に告白された場所なんです。だから、ここで始まったのだから、ここで終わらそうと思つて。それに、これ以上塩野君が何かを隠し通そうと苦しんでいる姿を、見たくも無かつたんです」

「つまり、塩野さんを殺したのは、憎しみもあるけど、愛もあつてこそ、だつたんですか。殺人こそが、自分の苦しみを消化するための手段であり、塩野さんを苦しみから解放してやる方法でもあつた、と考えたわけですね」

俺が何度も小さく頷き、かつてともいえる解釈を述べた後、鼻で小さく溜め息を吐いた。池井は膝を突き、両手で自分の顔を覆い隠し、すすり泣いた。

「すいません。本当にすいません・・・」

泣き声に混ざつて池井のその「すいません」という声が何度も俺の耳の中で響いた。苦しみから解放させるための殺人・・・か。

正直言つて、反吐が出る。それを表現するがごとく、俺は池井から目をそらし、舌打ちをした。あいつも、こんな事が動機で人を何人も殺しまくつていた。前の俺じゃあ共感するだろうが、今の俺は共感するどころか、軽蔑に値する。殺人はどんなことがあつても、理由には変えられない、最低な行為だ。

警部は泣きじゃくる池井の背中を何度も叩き、顔を覗き込んだ。

「君はまだ若い。君が望み続ければ、罪は償える。生きて罪を償おう」

「はい・・・」

警部にそう言われて池井は立ち上がり、警部とその部下達に連れられるよその場から去つていった。

時変わって、今はもう日を超えて午前一時だ。高校生が一晩一緒に過ごしてしまった！普通はアダルティックな展開だが、さっきまで事件の調査だったんだ、しょうがない。俺はそう割り切って、エリーに対する言い訳を考えなくてはいけなかった。さて、どうするだろう……。俺がそうぼんやりと考え込んでいると、後ろで友里の歩みが止まったことを感じた。

「？」

俺はすぐに立ち止まり、友里の方へ振り向いた。

「どうした？」

ほぼ棒読みだけど、俺は口を開いた。

「ねえ、一真」

「ん？」

「私が苦しんで、もうどうしようもない時、一真ならどうする？ 池井さんは殺人で、何とかしてたけど、一真もそうする？」

「するわけが無い。反吐が出る」

分かりきっているだろ。何があっても人を殺す理由には変えられない。

「俺なら他の方策を探す。人を殺すなんて事、サブにも入れられない選択肢と思ってる。俺はあの人には共感できない」

俺がそういうと、友里は力が抜けたように小さく息を吐き、俺に微笑みかけてきた。

「そっか、良かった」

「ん？」

「私だけがかなって思ってたから。どんなことがあっても人を殺す理由には変えられない。あの時も、一真はそう言ってたしね」

「……………」

あの時か。そう言えば、何度も呟いてたな。「どんな事があって

も、人を殺す理由には変えられない」って。

よく覚えてるな、そんな事。俺が思ってる以上に俺の言葉ってこいつに影響ありなのかなあ・・・。

俺は少々首をかしげると、視界の傍らにゴツゴツ体型の男が走り行く影が見えた。もちろん逃しもしなかった。さっき、ホワイトシルバーのロングヘアーの真っ黒い服装をしていた男とぶつかりそうになったが、その男も同じようにしたから上まで真っ黒かった。なんだか、このパターンは似ているような気がする。それに、逃してはいけないような気がする。新一もこう思ったのだろうか・・・。

俺はその男が消えた暗闇を目で追った。

「どうしたの？一真」

横から友里が俺の顔を覗き込んで、俺の視線を追って、暗闇を一瞥した。

「何かあったの？」

「いや、なんでもない」

俺は小さく息を吐いて、友里に向き直った。

「友里、先に帰っててくれ」

「へ？」

「ちよつと、忘れ物してさあ。取ってくるから」

もちろん嘘だ。あんまりこいつには悟られたくないからだ。

「へ？でも・・・」

友里が自分の胸を抑えて俯いた。そんな友里に対して、肩をポンと手を友里の肩に置き、一回だけウィンクした。・・・無表情だけだ。

「大丈夫だって、お前なら。襲われてもお得意の空手で返り討ちに出来るだろ？それに、何もどっかに消えちまうわけじゃないから・・・な？」

「う・・・うん」

友里は小さく俯き、納得してくれた。これで、何があっても齒切れがいいな。

俺はそつと友里の肩から手を放し、バックして離れていった。そのまま、俺は友里に背を向け、走り去っていった。

けど、俺はその時知らなかった、この選択肢は決定的に間違ってしまったということ。

『エリー、終わったヨ。事件』

またしてもうたた寝してしまっているエリーを起こすべく、ジュールはエリーを無線越しにかかりかけた。もちろん、大音量で。

「ふにゃ？」

エリーは目をばしばしさせて、目を何度もごしごしとこすった。

「終わったの？ジュール」

寝ぼけ声で言ったエリーの声は、猫をイメージさせてしまう。これにエリーが猫耳装着なんて事になれば完璧だ。

『ウン、終わったネ』

「分かった」

そうすると、エリーは「うぎぎ・・・」と声を出しながら、背伸びをして、立ち上がった。空は漆黒の闇に包まれ、一面を黒くしていた。しかし、下は遊園地の光によって明るく照らされ、しっかりと見える。そう、一真が友里の肩に手を置き、何かをやっている場面だっけもちろん丸見えだ。

「！！」

ままま・・・まさか！？エリーは顎に手を当て、ひっそりと覗き込み、口をがくがくと震わせた。

しかし、期待に反して、一真はそつと方から手を放し、ゆっくりと友里からはなれ、そのまま彼女に背を向けて、走り去っていった。「？どうしたんだろ」

気になったエリーはそう呟き、一真が向かった方向へと追跡するために、建物の間をひよいひよいと飛び越え、一真を陰ながら追跡して行った。

STAGE 8

俺はさっき俺達の前を走りすぎていった、ゴツゴツ体型の男を追って、人ごみを掻き分けて狭い道に入っていった。

ここまで来てしまえば、アトラクションやお店が集まっている光は届かず、暗くてまともに前ですら分らない。唯一つ、月明かりがこの道を照らしているだけだ。

しばらくその道を走っていると、人が二人会合しているのが見えた。その内の一人がさっきのゴツゴツ体型の男で、もう一人がはげ頭のタル体型で、濃い赤色のスーツを着ている。

俺は新一がしていたように陰に隠れてその二人の様子を伺って、二人の会話に聞き耳を立てていた。

タル体型の男が（以下「タル」）がゴツゴツ体型の男（以下「ゴツゴツ」）の前に銀色のアタッシュケースを差し出した。よくドラマで大量の金が入っているという演出に使われているあれだ。ゴツゴツはポケットに手を突っ込みながら、偉ぶっている。どうやらあの男の方がタルよりも上のようなのだ。

「ここに、これでいいだろ？」

とタルが空けたアタッシュケースの中には、無数のファイルと、大量の金額が入っていた。多分析が十位あるぐらいの金額だ。俺はそれに目を細めてそれを息を殺して静観した。

「へ、よくやって来たじゃねえか。ほらよ」

と、ゴツゴツがポケットからUSBアダプタと、マイクロカードが入ったポリ袋が取り出され、それをタルに放り投げた。彼は、それを慌てて受け取ろうとして、しばらくの間あたふたとして取りそこないそうになり、落としそうになったとき何とかキャッチした。

（なんだ・・・あれ。どっかの社長さんか？さしずめ会社内ではれたくない物でも入ってるのか？そして、それがバレて、それを弱みに握られ、大金となんかの情報と引き換えに、そのデータの入っ

たファイルを受け取るって言うことだったのか・・・)

けど、これは逃してはいけない。俺はポケットに手を突っ込み、携帯を掴んで・・・・・・・・・・。

構わず後ろにバックキックした。

その瞬間、「ぐっ!？」という小さな男のくぐもり声が聞こえ、ザッザッと二歩ぐらい草むらを後ずさる足音が聞こえ、カランツと金属製の何かが転がり落ちる音が聞こえた。俺は携帯を掴んでいた手を放し、ポケットから手を出して思いっきり蹴飛ばした人物を見た。

「お前・・・」

その人物は俺に見覚えがあった。下から上まで黒ずくめの服を着て、黒い帽子を被る、ホワイトシルバーのロングヘアーをした男。さっき、ぶつかりそうになった男だった。そして、さっきから右目がうずくような感触がある。

その男は体を真っ直ぐにして立ち上がり、口元で嗜虐的な笑みを浮かべた。その笑みにほんの少し寒気を感じてしまったのは言うまでも無い。冷たすぎる笑みだ。

「ッ!」

後ろで、ゴツゴツが俺達の感づいて、俺の背後に立った。見たところ挟み撃ちにされたという状況だ。

「まさか、俺の気配に感づいていたとはな」

「ああ、五感は常に研ぎ澄ませている状態だからな。少しの足音でも感づく」

「フンッ、なるほどな。『不規則すぎる変換』アンリミテッドを使って俺の気配を消したつもりだったが、まさか足音で気づくとは、こりゃあ少々調整の必要だな」

「不規則すぎる変換？」
アンリィトローデ

何だ、それ。俺は目を細めて、その男が言った言葉に疑問を持った。そんな言葉なんて、この世界には……。いや、もしかしたら……。

俺は荒い息を吐きながらその男の冷たい目を見つめていた。

（ヤバイ……。こいつ、向こう側の人間だ）

俺が息を呑むと、後ろのゴツゴツが前に踏み出すのが聞こえた。

「アニキ、こいつは……」

「気にするなウオライ。ただのネズミだ。ここで消しておけば何の問題も無い」

俺は後ろと前を交互に見やり、最後にホワイトシルバーのロングヘアーをした男の目を見やった。

（相手は俺が向こう側に関わっていることをまだ分かっていない。だって、境界は発動させないはず。発動させたら現実側リアルの人間は殺せねえからな。単純な格闘なら相手できる）

俺は右拳を握り、後ろの気配に注意を払いながら目の前の男を睨みつけた。すると、目の前のホワイトシルバーのロングヘアーをした男は黒いトレンチコートのうちポケットからサイレンサー付きの拳銃を取り出し、俺の体に照準を向けて引き金を何のためらいもなしに引いた。

サイレンサーによって抑えられた銃声が俺の耳に入った瞬間俺の目の中に回転しながら飛んでくる銃弾が視認で来た。

俺の目は銃弾を見切ることが出来る。俺はすかさず右にかわし、左手の五指をそろえてピンツと立てて、ホワイトシルバーのロングヘアーをした男の顔にめがけて突き出した。

「フン……」

そして、顔を傾けてかわされた。でも、計算内の範囲だった。俺は左足を踏み込んで右足で相手の顔にめがけてハイキックをした。しかし、その相手は左手を自分の顔の左横にやり、そのキックを防ぎ、銃を地面に落として俺のみぞおちに向かってフックを仕掛けて

きた。

「クッ！」

俺は防がれた右足を強く押し出して飛びのき、パンチをかわせた。すると、後ろからパシュッ！という音が聞こえた。その音が聞こえて一秒もしない間に俺は右側にしゃがんだ。すると、目の前の男の地面が爆ぜた。どうやら、後ろからゴツゴツが俺にめがけて射撃したようだ。後ろを向いてみると、ゴツゴツが持つ銃から煙が出ていた。ゴツゴツは予想外の光景に口元をゆがませて銃を少し下ろした。

「アニキ、こいつ・・・」

「ああ、どうやらこいつは銃弾を五感で感じ取り、それをかわすなんて曲芸じみたことが出来るようだな。おもしろい・・・。ウォライ、下がってろ」

「あれをやるんですかい、アニキ」

「ああ・・・」

すると、目の前のホワイトシルバーのロングヘアーをした男は冷たすぎる目を俺に向け、口元をゆがませ、笑みを浮かべた。

すると、その男は銃口を俺に向けた。そして、引き金を・・・。

（ッ！？）

俺の視界の中で血潮が吹いたのが感じ取れた。そして、肩に力が入らない。

「グッ！」

（何が起こった！？何が！？）

俺の思考では到底考えようも無かった。そして、急激に口に言いようも無い痛みが俺の体を襲い、俺の思考を根こそぎ奪っていった。俺は肩をもう一方の手で押さえ、そこから出てくる血を押さえた。

しかし、そうしてしまつては銃弾を避けることが出来ない。分かりきっていることだ。

銃声と銃弾が飛んでくるタイミングが全然合っていない。俺に銃声が聞こえる前には俺の体には銃弾によって貫かれたり、銃声だけが先走りして、銃声が聞こえなくなつたときに銃弾が俺の体を貫いて

いった。そして、足に当たったとき、俺の体はガクツと少し下がり、バランスが崩れた。

その隙を突くように、ホワイトシルバーのロングヘアをした男は次々と引き金を引き、俺の体を買いていった。

しばらくすると、乾いた銃声と、銃弾が飛んでくるタイミングが合ってきた。いつもの俺ならかわせる。しかし、銃弾によって体を貫かれ続け、体の血が足りていない今、意識は朦朧として、五感の感覚が鈍ってきた。

俺の体は乾いた銃声と共に次々と貫かれ、俺の体はその銃弾が被弾した直後の衝撃によって、何歩も後ろに追いやられ、そして、銃弾が俺の右肺を貫いたときに、俺は仰向けに倒れこんだ。俺ではもう体を支えることが出来なくなっていたからだ。肺が一個やられたせいで呼吸をするたびに血の塊が俺の口から出てこようとする。しかし、俺が仰向けに倒れているせいでその塊は俺の喉に留まり、俺の喉の気道を塞いでしまっている。

ホワイトシルバーのロングヘアをした男と、ゴツゴツは俺の前に立ち、俺を見下げた。

どっちも笑みを浮かべているが、俺が何よりも釘付けにされたのはホワイトシルバーのロングヘアをした男の方だった。あの冷たすぎる笑いはこれまで何人も人間を殺してきたという笑いだっただ。

「お前が俺に一撃をかませたことはほめてやる。そして、あのアトラクションの事件を解決してくれたのも感謝している。あれだけのサツの前じゃあ、取引もまともに出来なかったからなあ」

そして、俺が見ている男の方が俺の方へ銃口を向けた。

「お前のその整った顔立ちはしっかりと綺麗に残しておいてやるよ」

そして、引き金に触れ、口元での笑いが大きくなった。

「じゃあな・・・名探偵」

「どこに行っただろ」

エリーは建物の屋上を飛び越えながら、一真が消えた方向に向かい、探し続けていた。でも、やっぱり見つからない。なにせ、下は暗闇だ。園内とは違う。

「んん……。ねえ、ジュール。分かった？一真の場所」

『キミから八時の方向すぐ下にいるネ。ずっと立ち止まってる』
「そうなの？」

エリーはPLEDの無線から顔を離し、自分の体から八時の方向へ走り、建物の陰に隠れながら下を見下ろした。

「あ、あれ」

エリーの目線の先には仰向きに倒れている一真の姿があった。寝ているのか？それにしても、不自然だ。転んだにしても、不自然にもほどがある。エリーはもう少し目を凝らし、一真を見下ろした。一真の下に何かがある。草むらのほかに、何かが、一真の背中に敷かれている。あれは……。

（まさか！）

エリーの頭の中に悪い直感が働きかけた。

「一真！」

エリーはすかさず、建物から飛び降りた。かなり高い建物だから、普通飛び降りればお陀仏、飛び降り自殺になる。しかし、エリーの体にある性質カクストロフの力を制御すれば、着地することは容易だった。

エリーは、自分の体の中の性質カクストロフの力を足に集約させ、足の方が頭よりも重くした。そして、着地の瞬間、纏わせた性質カクストロフを爆発させて、それをクッションにさせて無事着地した。

「一真！」

エリーは慌てて一真に駆け寄った。数馬の体の近くに来ると、ピチャッと言う何か液体を踏む音がした。間違いなくそれは、一真の

血だった。一真の体は自身の体から流れ出てきた血によって浸られ、仰向けに倒れていた。

彼の体は銃弾らしき者で体中を貫かれ、そこら中に銃弾によって出来た穴が出来上がっていた。しかも、そのうちの一つは、左胸を貫いていた。

（そんな・・・いや！）

これじゃあ、夢の通りだ。このままじゃあ、一真は死んでしまう。自分達の前から消えてしまう。エリーはしゃがみこみ、何度も体をゆすった。

「一真！一真！一真あ！」

しかし、何度ゆすつても起きる気配がない。血を失いすぎる。エリーは一真の手を握った。

「冷たい・・・」

エリーの胸のうちから何か良く分からない感情が込み上がってきた。自分の目元が熱い。

「いや、嫌だ、一真。死んじやだめ！」

その必死の問いかけに対しても一真は答えない。

どうすればいい。今救急車を呼んだとしても、着いた頃には完全に死んでしまう。どうやれば一真を救える。

エリーは涙をこらえながら一真の顔を見つめた。そして、咄嗟に動いた。一真のズボンのポケット全部を探った。

「あつた！」

一真の来ているシャツのポケットに何かがある。多分、彼のPLDだ。

エリーはすかさずそのポケットに手をつ突っ込んで、そのPLDに触れた。しかし、軽率な行動だった。「ッ！！」

指先が触れた瞬間、自分のその指先が焼きつかれるような痛みが走った。そうだ。あのときだって経験済みだった。彼のPLDを調べるときに、自分の手のひらが焼きつかれ、焦げてしまっていたと言っことを。

でも・・・。

エリーは再び彼のポケットに手を突っ込み、PLDを鷲づかみした。その瞬間、自分の手に激痛が伴った。しかし、これに一々反応してたら一真が死んでしまう。エリーはあの時と同じようにその痛みをこらえて、ポケットから引き出し、自分の手が激痛によって動かなくなる前に、一真の腕に彼のPLDを巻きつけ、装着した。

「ジュール！私と一真をそっちに送って！」

『へ？何・・・』

「早く！一真が死んじゃう！」

『わ、分かったネ』

そうジュールが言っていると、無線の向こうでカタカタと何かのコードを打っている音が聞こえた。

（早く、早く！）

エリーは一真の冷え切った手を握りながら、祈り続けた。

『よし、状況も把握したネ。今すぐこっちに送るね。一真の手を握って』

「うん」

『じゃあ、ちょっと気持ち悪くなるネ』

ジュールがそういうと、エリーの視界がブラックアウトを起こした。とんでもない車酔いと同じような感覚がエリーを襲った。

俺の意識は泥沼の中に浸っているような感覚だった。動こうにも動けない。目を開けようにもあけない。俺の全ての五感が消失してしまっているような感覚だった。呼吸ですら、何かに任せて酸素と二酸化炭素を入れ替えさせられているような感覚だ。

そして、先に戻ってきたのは嗅覚だった。消毒液の匂いが鼻に突き刺さる。その後に戻ってきたのは痛覚だ。自分の両肺が大きなダメージを負い、息を吸うたびに胸が痛くなる。しかも、何かが俺の

腹の上につかかっている。

そして、ようやく視覚が戻り、周りが見えるようになった。見たところ、どこかの病院だろう。

（助かったのか・・・俺は）

そして、俺が気を失うほんの少し前のことが俺の頭の中でフラッシュバックして映像が浮かんだ。

——じゃあな・・・名探偵

俺はその言葉を、あの男の冷たすぎる目と笑いを思い出し、目を大きく開いて、自分の心臓が激しく打つのを感じ取った。

俺は口元につけられている酸素マスクを取り外し、上半身を起こそうとしたが、力を入れると体の節々が痛む。それに、何かが俺の腹の上につかているのに起き上がれる筈がない。

俺はちよつと枕に頭を寝転がせた後、息を吐き出して首を起き上がらせて、その俺の重石になっている正体を見た。

漆黒の張りのあるその人物の腰辺りまで伸びるロングヘア。頭のとっぺんから生えるアホ毛。整った顔立ちに、透き通るような白い肌の少女だった。そう、俺が知っている少女だった。

「エリー・・・」

俺はぼやける意識の中で、呟いた。

（こいつ、俺に掛かりつきりだったのか）

そう思うと、俺は笑みをこぼし、エリーの頭頂部を毛並みに沿って撫でてみた。

「うん？」

エリーはその感触に反応するかのように、目を開けて、俺の顔を目が半開きの状態で見つめた。俺がほんの少し笑みを浮かべるとエリーの目が見開いた。明らかなる驚きの表情だ。そして、その後は

目に涙を一杯に浮かべてしゃくりあげてきた。

「一真あ！」

「おっと・・・」

俺は顔面めがけて飛び込んできたエリーの顔を軽く押しやり、撃墜させた。

「いっち！」

エリーは後ろからこけて、尻餅をついた。

「いったー・・・」

そして、エリーは俺の満足そうな顔を見るなり、しかめっ面になって立ち上がった。

「何するのよう！」

「不審者が俺に飛び込んで来たと思ったから、つい反射的に」
恩もへつたくれも感じていなさそうな発言したせいで、エリーが頬を膨らませてさらに強く俺をにらんで来た。おお、怖い怖い。

「せっかく心配してあげてたのに！誰があそこから、むぐっ！」

エリーは何かを言いそうになって自分の両手で自分の口を塞いだ。しかし俺の耳は逃さない。さっき「あそこから」と言ったな。という事は・・・。

「お前か！俺に後ろから冷たい視線投げていたのは！イテテテテ・・・」

秘密の暴露だ。俺はガバツ！と起き上がり、エリーの威圧を跳ね除けるぐらい大声で怒鳴った。その瞬間、俺の胸の辺りが苦しくなつてしかも、体中が悲鳴を上げんばかりに激痛が走った。

あれ？そういえば俺の眼鏡は？

あったところで俺の行動に何の支障がきたされないけど。あれ伊達眼鏡だし・・・。（実のところ、俺の視力は両目共に2.5だったりする・・・）

俺は辺りを見回し、伊達眼鏡を探した。ま、すぐそこにあった台に乗っけてあつてすぐに見つかったけど・・・。

俺はそれを掴んで、黒縁の伊達眼鏡を掛けた。

すると、この病室の扉が開いて、誰かが入ってきた。男の人で、金髪のショートヘアーで、目の色が水色のアメリカ人っぽい人。イケメンの部類に入りそうな人物のその人は俺の顔を見るなり、明るい笑顔を振りまいて、手の平をひらひらと振った。

「ハァーイ！カズマ。元気にしてたカーイ？エリーと恋人ごっこなんかして、夫婦円満カーイ？」

「ジュール！」

エリーが顔を赤くして怒鳴った。

（ん？ジュール？あれ・・・あれ？）

状況が飲み込めない。何でジュールが？っていうか、こいつがジュールか？

「あれ？カズマ、案外びっくりしたカーイ？そつかあ、カズマはボクの顔知らなかったもんネ。改めてはじめまして、桐ヶ谷一真くん。ボクはジュール・フォール。まあ、略してジュールって言われてるんだけどネ」

「・・・・・・」

うつわあ。声と見た目のギャップが激しすぎて頭が覚醒わずか数秒で混乱してくる。俺はその混乱を振り払うかのように頭を横に振り、息を整えた。

「それもあるけど・・・なんでお前が、こんな所にいるんだよ」

「ン？逆の立場ネ。キミが、こっち側に着たんだヨ、カズマ」

「・・・・・・ん？」

俺の頭の中の思考回路が全てやきつくされてしまったかと思わせるように、一瞬頭の中がリセットされてしまった。数秒で戻った後、一度空っぽになった頭の中でいろいろと考え込んだ。

「待て待て。じゃあ俺がいるここは『仮想^{ゲーム}』側の世界なのか？」

「ンン・・・・。『仮想^{ゲーム}』側の世界というのはあんまりふさわしくないネ。エリーがそんな変なことを吹き込んだに違いないけど・・・」

「ジュールのバカア！」

後ろでエリーが顔を真っ赤にして怒鳴っているのが見えた。ジュールは大きく頷いて手でその怒鳴り声を押さえた。

「まあ、言うなればキミは『他次元^{たじげん}』、つまり『パラレルワールド』にやってきたという訳ネ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

元から俺の日常はエリーとあった日から狂ってるっていうこと自体は把握していたけど・・・。

狂いすぎるだろ。これは・・・。

STAGE 9

「で、カズマ。キミは一体どれだけのことをエリーから聞いたんだイ？」

「へ？そりゃあ、カタストロフ性質の事とか、他次元同士がつながってしまってる事とか、ジャンク零れ物の事とか……。結構いろいろなことだと思う」

「フーン、じゃあとりあえず言ってみてヨ」

「ああ……。」

俺はうなずいて、とりあえずエリーから聞いたことを口にしていた。カタストロフ性質は全てで風・林・火・山・雷・陰の六つで、全ての人々はそれのいずれか一つを宿していること。『リアル現実』と『ゲーム仮想』……。いや、他次元がつながり、その次元では本来存在しないものが存在してしまっているということ。PPAや、リンカーのこと。このPLDの事も全て聞いた通りに言った。すると……。

「ぶ……。プハハハハハッハハッ！」

いきなり笑い転げられた……。いや、何も変なこと言った覚えがないんだけど……。

俺は苦笑いを浮かべながら、心の中で突っ込んだ。しかし、ジュールは笑い転げてバタバタと手足を動かして大爆笑している。

うつわあ……。デカイ体がこんなド派手に地面に転がって爆笑しているという光景はある意味滑稽だ。

「ジュール!!」

エリーが顔を真っ赤にして、怒鳴りつけた。その瞬間、ちよつとずつではあるがジュールの笑い声がどんどん小さくなっていった。それでも笑いは続く。

「ハハハ……。イヤア、キミの事じゃないヨ、カズマ。エリーの教え方って……。プク……。」

「ジュール!!!」

更に大きく怒鳴った。そろそろ、聴覚も大分戻ってきたようだが、

エリーのこの怒鳴り声の大音量のせいで、もうこれ以上回復しそうになくなってしまいそうだ。

「エリー、教えるときはしっかり細かく正確に教えなきゃ。じゃないと、後でとばっちりが飛んできちゃうヨ。さて、カズマ。キミから聞きたいことは山々だけど、まずはキミの間違った知識を塗り替える必要があるネ。まず第一、性質は六つしか存在しないというのは、エリーの嘘っぱちダ。多分、エリーが説明めんどくさがって、そこら辺を端折ったんだろうネ」

ジュールのその言葉の瞬間、はっと顔を硬直させ、頬を膨らませた。

「もう！ジュールのバカ！馬鹿バカばかあー！」

そういうと、エリーは掛け布団越しに俺の脚に倒れこみ、グツダリとなだれ込んだ。グツタリを通りこして、グツダリだ。

あのう・・・そこも結構ダメージ来てるんですけど・・・。

俺は少々顔をしかめ、痛みをなるべく顔に出さないようにして、鼻で小さく溜息を吐いた。

「どういう意味だ？ジュール。それって、例外とかあるのか？特異性質に」
オース

俺のその食い込むような質問の仕方にジュールは少々、体を後ろに倒れこむようにさせて、腕を組んで考え込むようになしぐさをした。

「ウーン、例外ネエ・・・。余りそういう風に表現するのはよくないネ」

「例外じゃないにしろ、エリーだって特異性質なんだろ？俺から聞いたら、お前はエリーは別にいて当然のタイプだって言ってるように聞こえるぞ？こいつだって珍しいじゃないか」
フオース

その言葉とともに、ジュールは困ったような表情を浮かべ、後頭部をポリポリと掻いた。

「ウーン・・・確かに、それは言えてるね。エリーは通常の特異性質じゃない。彼女は二つ三つどころか、風・林・火・山・雷・陰のこの六つのタイプの性質を使えるネ。いわば彼女は、「全六」の
カタストロフ
ぜんむ

カラストロフ

性質ネ。でも、今ボクが話しているのは、そんな根本的なことじゃない。もっと・・・ウーン、大雑把な範囲で、その六つの性質カラストロフについて的事なんだヨ、カズマ」

「どういう意味だ？」

カラストロフ

「つまり、このエリーの性質も、結局はそのうちの六つのうちの一つということなんだ。属性は全部で六つ。彼女は単純に、その六つだけを使い分けることができるんだヨ。そしてキミは、フォース特異性質をその多数の属性を併せ持つ物の事を言っていると思っている、違うカイ？」

「あ、ああ」

こいつ、こんなへらへらしていたり、脳天お気楽者だと思ったら、たった一だけを話したのに、そこから七か八ぐらいを一気に読みとってきた。思っている以上にジュールというやつは切れ者みたいだ。これは油断していたら、一気にその弱みに付け込んでくるタイプだ。ジュールはパチンツと指を鳴らし、その際で立てていた人差指で俺を指さした。

「それこそがエリーがキミに吹き込んでしまった間違った偏見ネ」その瞬間、俺の脚にうつ伏せているエリーの体がぴくつと蠢いた。多分怒りのサインだ。誰かがここで抑えてやらねば爆発してしまう。「エリー」

俺がエリーの名前を呼ぶと同時に彼女の体がピタリと止まった。あのう・・・まだ俺何も言っていないんですが？しかも、俺の脚のあたりがぼうつと熱くなってきた。ほんのりとエリーの体熱が俺の脚を包む。

「で？それはどういう意味だよ。違っているのか？」

「イヤ、五十パーセントはあっている。でも、そのほかの五十パーセントは完全に間違っている」

「？」

俺は首をかしげた。

「ということは例外が存在するのか？」

その瞬間、ジュールはフフンツと笑いだした。俺また何かおかしいこと言ったのか？

「カズマ、特異^{フオース}性質に例外は存在しないヨ。っていうかも特異^{フオース}性質^{リス}事態が例外そのもの。例外に例外なんて存在しないネ。ウン、でもカズマが今気になっている例外というものは、確かに存在するでも、その例外というものは決してどれの型に当てはまらない、全くの規格外の性質サ。そしてその「型」というのが、性質^{カクストロフ}の属性は必ず六つしか存在しない、というパターンサ。でも、そのどれでも無くても、しかもそれに奇異な力が宿っていたら？それこそがまさに規格外、全次元のパワーバランスが狂いかねないぐらいの規格外のレベルサ。そして、そのお墨付きの規格外が、キミだったことサ。カズマ」

ジュールはあくまでも表情は崩さず、ただし、ほんの少しシリアスを含めて、声を低くして俺に告げた。

「お、俺？」

俺の完全にポーカーフェイスではいられなくなった。自分の存在がそんな特別な存在だとは、思ってもいなかった。

確かに俺はあの時エリーに「お前は存在していないのかもしれない」と言われたことがあるが、あの時はポーカーフェイスを貫けた理由としては簡単。単純に俺が認識されてなかったからだという解釈だったからだ。いわば、単純な機械のほうの誤作動。大して特別でも何でもない。俺は単純に見過ごされてしまっていたということだ。しかし、特別だと言ってしまわれば話は別になってしまう。特別ではないから、先の解釈が理解できて、筋道が通る。しかし、特別だと言われてしまえば話は別だ。俺は俺の存在を疑ってしまう。

俺は右手で頭を押さえ、がりがりと頭を掻き毟った。

「結構パニクッテいるネ。けど、ここに桐ヶ谷一真は確かに存在している。じゃないと、キミがあの二体を回収しているはずがない。そうだろ？単純にキミは他と特別すぎているだけ。そう思ったほう

「が気が楽でしょ」

俺はジュールから目を離し、なんども小さく首を縦に振った。

「ああ・・・確かに楽になってきた。じゃあ、教えてくれよ」

俺はストレートに聞いた。

「俺の性質は何なんだ？」

するとその問いかけに、ジュールは口をぽかんと大きく開けて、息を吐きだした。

「聞いてくるということはわかってたけど、そんなストレートに聞いてくなんてネ。ウン、だったら教えてあげるよ」

そして、ジュールは背筋を伸ばし、俺を見下げてから、エリーが座っていた椅子に腰かけて、前のめりになった。

「確証はないけど、キミ、桐ヶ谷一真の宿した性質は、『天』だよ。英語に直すと、Hevenだネ。まさに天の意思だネ。相手が使ってくる技全ては我が生み出したものが如く、全てを投影し、コピーして見せる。まさに、相手の努力全てを侮辱してしまう、性質ネ」

「ジュール！！」

俺の脚にうつ伏せていたエリーがガバツ！と起き上がり、思いっきり怒鳴りつけた、しかも、起き上った時の衝撃で、俺の脚にダメージが・・・完治するかなあ。

「そんな言い方ないでしょ！！」

「まあまあ、エリー。単なる比喻だヨ。カレだって、なりたくてなった性質じゃないんだ。それぐらいキミだって理解の範囲だ口？」

真正面からジュールに言い負かされたエリーは、シュンとしよげて顔をうつ向かせた。まあ、確かに俺がなりたくてなった性質じゃないからな。ジュールの言うことには一理ある。

「で、俺が持っている特性が技の投影だったら、他もあるのか？」

「ウン？まあ、あるっちゃあるヨ。たとえば、ボクの性質は『山』だから、大地の振動を足を通して読みとることができるので、『火』の性質は多少の高熱の物でも触れることができる」

ん？今何て言った？多少の高熱のものなら触れる？

「待て待て、じゃあエリーの猫舌は何なんだ？こいつは確かに全六の性質カタストロフを使えるけど、本質は『火』なんだろう？お前が言っていることと矛盾してるぞ？こいつ」

と、ズビシツと横目にエリーに指さした。指さされたエリーは「むっ」とくぐもり声をあげて仰け反ったが、そのリアクションの追及についてはここはスルーだ。

ジュールは俺の問いかけに対して、笑いの表情を浮かべ「理解しました」とかいうしぐさを見せた。

「ああ・・・彼女は例外。彼女の中に「全六」の性質カタストロフが宿ってしまっているせいで、それぞれの特性を打ち消してしまっているんだ。だから、彼女には実質的に特性は存在しない。今こういう状態の時の彼女は、見た目がかわいいだけの女の子だよ」

「だけって何よ！」

俺の横で大声で怒鳴るエリーに手の平を向けてジュールはうなずいてエリーを制した。制したところで俺に降りかかる耳のダメージはどうしようもない。もう勘弁してほしい・・・。

「で、これでキミが持っていた誤解の一つが解けたわけだ」

「まあな」

確かに、俺は今までエリーみたいにたくさん種類の性質カタストロフを持っているやつを特異性質フォースだと思っていた。だって、そのことに関しては全く説明しなかった。「私みたいな例外」っていう風にしかいってなかったからな。てつきりそう思ってたぜ。それにしても・・・。

俺はじと目でエリーの顔を見た。

なんでそういう情報は言わなかったのかなあ。つか、端折ったんだ？こいつ。

エリーにそんな心をアイコンタクトで伝えと、「むっ」としかめっ面になり、少々頬を膨らませた。普通の男なら悩殺だなこりゃ。耐性あつてよかった。

「で？」

「ン？」

ジュールは目を大きく見開き、「何を聞いているんだい？」みたいな表情を作った。いやいや……。

「他にもあるのか？」

「何が？」

惚けているのか、マジで分かっていないのか分からない。

「俺が誤解していること」

「その前に……」

「その前に？」

俺は生唾を飲み込んでジュールの次の言葉を待った。何やらえやいの知れないことを言い出してしまうのかもしれない。そのために心の準備をしておかねば……。

「キミを襲ったヤツの特徴、覚えてる範囲でいいから教えてくれないかい？」

「？」

拍子抜けだった。何やらトンでもない御発言をしてしまうのかと思いきや、平凡じみた言葉だった。当然と言えば、当然のような質問だった。

「何を驚いているんだい？ボクは特といった関係を持ったヒト以外に情報をあげたら、何か見返りをもらうタイプなんだヨ。用はバランサーネ、バランサー」

「……」

何がバランサーだ。このまま行くと俺ばかりが得してしまう。自分に利益を被らない、バランサーもどきだ。

俺は口を尖がらせながら小さく首を何回も縦に振って、ジュールから目はずした。

「ああ……」

そして、俺はあの男の表情を思い出した。冷たく、どこまでも冷たく、どこまでも黒く塗りつぶされていたようなあの男の笑みを。

「下から上まで真っ黒の服装をした男二人組みだった」

俺は語り始めた。

「へ？」

今、なんていった？下から上まで真っ黒の服装をした男二人組み？何か得て知れない物がエリーの胸のうちからこみ上げてきた。背中ここに感じていなかった悪寒が走った。しかし、一真はそんなエリーを脇目もくれず、自分を襲った人物の特徴を語っていた。

「一人はゴツゴツ体系の男で、黒い帽子を被ってサングラスをかけてた。身長は遠くだからあんまり分からなかったけど、たぶん俺と同じぐらいの身長だと思う」

そう、もう一人が問題だ。一真はあの男の顔は一生忘れることが出来ない。あの男から出てくる冷たい圧力は余りにも異常だった。

そして、エリーにとっても問題だ。すでに、その一人目の男の特徴が述べられていただけで、自分の心臓が激しく波打っているのが分かる。止めようにもどうしようとも止まらない。そうだ・・・そいつがいると言うことは、彼もいるはずだ。

「もう一人は細身の男で、俺よりも十五センチぐらい高い身長だった。年齢は分からなかったけど、声からして、たぶん三十から五十の間ぐらい。ホワイトシルバーのロングヘアーに、白目の肌色。黒いトレンチの下に灰色のハイネックの服を着てた。そして、冷たすぎる目だった」

その瞬間、エリーの中で何かが壊れる音がした。物理的な物ではなく、内面的な何かが粉々に砕かれた。震えが止まらない・・・。エリーは震えるその両手で自分の体を包み込んだ。それでも震えが止まらない。エリーは白いワンピースの上に着込んだ赤い半そでシヤツの両腕のすそを引っかくようにつかみ、必至で止めようとした。恐怖のせいで瞳孔が開ききり、呼吸が荒くなる。

「エリー？」

一真はそんな様子のエリーを疑問がり、首をかしげながら彼女の名前を呼んだ。しかし、いつも入るその少年の声は今は入らない。恐怖によって塗りつぶされた感覚が、その声と耳のつながりを断ち切ってしまったている。

（いたんだ・・・やっぱり・・・いたんだ！）

あの時観たのは幻覚ではなかった。そこに、彼はいた。

—— S H E L Y・・・

あのと時の声が、再び耳の中でよみがえる。

—— S H E L Y！

彼が耳の中で自分のことを呼び、銃口を、明確たる「死」を、悪魔の笑いを浮かべながら向けた。

「はあ・・・はあ・・・」

動悸が激しくなり、しっかりとした呼吸が出来ない。しっかりと息を吸う事が出来ない。エリーの手がぶるぶると痙攣を始めた。意識が自分の体から切り離されるような感覚を感じながら、エリーはばたつとうつぶせに一真の体に倒れこんだ。

「エリー！」

彼女を呼ぶジュールと一真の声が響いた。ジュールの手が、エリーの体をゆする。しかし、荒い呼吸をしているエリーは一向に顔を上げない。体がビクビクと痙攣して、まるでゲームで「痺れ」状態になってしまったかのように動かない。

「過呼吸だな・・・」

一真の静かな、そして心配しているのか少々弱々しい声が聞こえた。何故か恐怖の中でそんな一真の声をエリーは聞き取れた。ようやく耳に出来た一真の声を聞いて、エリーの心はほんの少し緩んだ。しかし、それと同時に、彼の、あの時の顔が、頭の中でフラッシュバックする。一真の声を塗りつぶしてしまう。真っ黒に染め上げてしまう。

全てが、消されてしまう。

「駄目だな」

俺は溜め息混じりに、あたりをキョロキョロ見渡した。理由は分からないが、単純な過呼吸だ。こういうときの処方方は初歩中の初歩だ。

「ジュール、何か袋ないか？紙袋・・・てか、この世界にあるかな」

俺が最後呟き気味に言うとジュールは俺が寝転がっているベッドの下にあるビニール袋らしきものを取り出した。

「まあ、キミの世界ではコレをビニール袋って言うだネ？」

「ああ・・・」

若干引いた。どこまで調べたんだろう、俺達側の世界のこと。

俺はポーカーフェイスを貫きながら何度も小さく首を小さく縦に振った。

「じゃあ、それをエリーの口元に当てながら・・・ああ、どっかで横にしてやってくれ」

「OK、分かったネ」

ジュールはエリーの上半身を起こし、苦悶の表情を浮かべながら目を閉じている彼女の口元にそのビニール袋もどきを当て、そして・・・。

「ん？」

一瞬訳の分からなくなった。あろう事か、ジュールはエリーを俺がねっころがっていたベッドの開いているスペースに横にした・・・。

「何やってるんだ？」

「ナニって、キミに言われたとおり、こっしたんだよ。ちょうどここに手ごろなスペースがあったからネ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

阿呆か、こいつは。どこかの頭のギア一個がショート起こしてる

奴なのか？こいつは。たぶん一番あつてはいけないシチュエーションだよ、これ。

確かにこいつは少女体型だ。はっきり言って胸は小さいし、チビだ。しかし、こいつは一応俺と同年齢だ。それかそれ以下かもしれない。（たぶん・・・）

言わずとも分かるだろうが、いろいろといけないシチュエーションをこいつはものの数秒で作り上げてしまった。

改めてジュールと言う者は恐ろしい奴だと思った。焦燥感をあおられるようなシーンを、たったの一撃でギャグシーンに変えてしまった。イレギュラーな奴なんだよ、つまり。雰囲気をぶち壊す事が大得意ないわばムードブレイカーだったのだ。

俺は大きく溜め息を吐きながら、ジュールの方へ向き直った。

「でもビックリしたヨ、キミには。左胸に確かに傷があつたのに、銃弾らしき物は心臓横スレスレ、何とか繋ぎとめたみたいだね。いったい何をしたんだイ？」

「ああ・・・」

そういえば何かやったな。そういえば・・・。

「あの男が銃弾を打つ前にほんの少し体をずらせて心臓から狙いを外させた。バレルの可能性はあつたけど、あの時は一か八かの賭けだったからね」

そして、俺はその賭けに勝ったというわけだ。さ、次は俺からの質問だ。とは言えども、俺が誤解している物は他にあるようだが、それよりも別のことが気になったから聞いておこう。

「なあ、ジュール」

「ナンダイ？」

「何でエリーは俺が言った男の言葉でこんな状態になったんだ？」
俺の質問があまりにも予想外だったのか、ジュールはいつもの笑顔を一瞬にして消し去り、俺の目を細くして見つめてきて、その後、肩を落しながら目を閉じて大きく溜め息を吐いた。

「そうだね。カレに遭ってるんだもんネ。しょうがないっか・・・」

「ジュールはそう呟き気味に言うと、体を前に乗り出した。」

「キミを襲った二人組みの男、キミが言ったゴツゴツ体型の男は、あの組織で「WARRAY」と呼ばれている。^{ウオライ}「W」の称号を持つ、「WARRAY」だよ。そもそも、キミを襲った男二人組みはある組織に入っていて、カノジヨが言うには、その組織ではそれぞれ「A」「Z」までの二十六のアルファベットでコードネームが振り分けられているネ」

「ちよつと待て。彼女つて、誰のことなんだ？」

「誰つて・・・この子だよ」

と、ジュールは俺の横で倒れているエリーの腕を叩いた。もしかして・・・。

「エリー？」

ちよつと事態が余りよろしくない事だと思った。まさか、こいつもあいつらの仲間だったって言うことか？

「そもそも、彼女がキミに名乗った名前、「エリー」って言うのは本名じゃないんだ」

「へ？」

本名じゃない？じゃあ、なんだったんだ？あの時に言った、こいつは・・・。

「彼女はもともと組織に入っていた頃に「S」の称号を貰い受けて、「SHELY」^{シェリー}って言われてたらしい。けど、エリーは何の理由か分からないけど、組織を裏切った。そして、あの組織から抜けたさい、彼女が最初に立ち寄った場所で、「エリー」と、ただ名乗ったんだ」

「ただ名乗った？どういうことだ？」

聞いてばかりの俺にジュールは呆れたのか、大きく溜め息を吐いた。いや、ここまで来て知りたくもないなんていう奴は変人レベルだ。・・・俺主観だけど。

「言うなれば・・・」

ジュールは答えてくれた。

「彼女には、自分の「本名」って言う物の記憶がないんだヨ」

STAGE 10

俺は病室の窓から外を眺めていた。外はすっかりの闇の黒であり、街灯だけが下を照らしていた。ここがパラレルワールドなんだと言ふことにいまいち実感がわかない。すっかりと下見をしなければ、そういう実感は出来ないだろう。見た目だけならば俺らの町と変わらない普通の普段着に着替えたので、見た目は何も問題は無いのだろうが、俺としては結構ダメージが残っている。しかし、足を打ち抜かれたというのに、それによって生じた骨折があんまり感じられない。たぶん、この世界にある超科学とやらによって、骨を接着したのだろう。

ほら、この時点で俺達側の世界ではありえないだろ？ま、おかげで見てもればなんとも無いが、痛みだけが残ってしまっていると言ふ奇異な状態になってしまっているのだが。今ではまだ、歩くことはままならないだろう。

俺は吹き続ける風に当たりながら鼻で小さく息を吐いた。俺の吐いた小さな息は風によってさらわれて消えてしまう。

—— 彼女には、自分の「本名」って言う物の記憶がないんだヨ

（本名を覚えてない・・・か）

どんな実感なんだろうな。自分が何者か全然分からない。でも、それ以外のことがたくさん自分の頭の中に入っていく。それがどんな違和感なのか、俺でも想像ができない。恐らく、想像を絶するほどの違和感なのだろう。俺は目をつぶり、ジュールの言った言葉を思い返した。

「本名を覚えてない・・・だと？」

「ウン、それだけじゃない。自分の両親のこととか、組織に入る前の自分の過去とか、そう言う事丸々ネ」

俺は横で呼吸を落ち着かせてぐつりと寝込んでいるエリーの寝顔を見つめた。とはいえども呼吸のテンポは結局速くまだ薄っすらと汗を掻いている。たぶん、俺が見た男達の夢を見てしまっているのだろう。

「なあ、ジュール」

「ン？」

「こいつのツンデレ性質って、そんな苦しみから自分を紛らわすためだつて言うのか？」

「本人に聞きなよ」

「そうだな」

そうだ、俺はこいつの「素」を知る必要があるのかもしれない。

「こいつをこんなにしてしまう様な奴だったのか？あの二人組みは」

「ウオライは多分そんなでも怖いんじゃないんだと思う。たぶん、もう一人の方だネ」

あのホワイトシルバーのロングヘアの男の事か。確かに、あの男の目やら、雰囲気が異常だった。今まで何人の人間を殺してきた、そんな目だ。冷たすぎる目だった。

俺がその男のことを思い出している時に、構わずジュールは続けた。

「その男のコードネームは、ZジンIN。『Z』の称号を持つ、あの組織の幹部だヨ。カタストロフ性質も全くの謎。エリーから聞いたんだけど、その男は何人の数の人を殺してきたみたいだよ。もしかしたら彼自身、殺した人間の顔何か覚えてないだろうネ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ああ・・・やっぱりあの雰囲気は、GINそのものだっただな。今改めて実感した。新一が、GINのことをどんな風に思っていたのか。やっぱり、俺はどうあっても新一にはかなわないな。

「エリー・・・」

俺はエリーの顔をもう一度見やった。こんな小さな体で、そんなでかい重荷を背負わされていたのか。

「でも、何でエリーがジンの事をこんなにも恐れるなんて、何があつたんだ？」

「知らないヨ。本人に聞いてみれば？」

「・・・」

そうだな。それが一番手っ取り早い。けど・・・。

「けど、聞かない方がいいよな」

「そうだね。ボクもそういう風に思ってた。だから聞かない」

「ああ・・・」

そうだ。知りたいなら、エリーがいつか自分から言ってくれることを待ってやろう。それが一番だ。

「・・・」

俺はそんなことを回想しながら、片足を引きずりながらエリーが寝転がっている場所の横に立った。もう呼吸はだいぶ落ち着いて、気持ちよさそうな寝顔を作って、すうーすうーと寝息を立てていた。本来は俺が逆の立場なんだが、エリーが受けた苦しみを考えれば、俺がこういうポジションに立っているほうが正しいのだ。

俺はエリーの張りのある長い漆黒色に染まった髪の毛の流れに沿って、頭をなでて、その後、彼女のほんのりと赤みを帯びた頬を撫でてみた。

（六年・・・か）

そう、ジュールはエリーが組織から抜け出してきたのはちょうど

六年前だといっていた。こいつの苦しみはもう六年も続いていたと言
うわけだ。俺とエリーが抱える痛みの種類は似ている。しかし、こ
いつは六年。俺はたった一年だ。格が違いすぎるし、スケールも違
う。

（そういえば・・・）

俺がジンに出会ったとき、右目がうずいていたような気がした。
あの時はたまたまそのタイミングでうずいていた、としか思ってい
なかった。けど、改めて考え直したらあまりにもタイミングが出来
すぎている。バラエティ番組でキャストがヤラセされているような
あんな感じた。右目はエリーがいつていた紋章が浮かび上がってい
た場所。もしかしたら、俺の性質とジンの性質は何らかの共鳴を起
こしているのだろうか。もし、そうであるならばジンの性質も特殊
性質^{1ス}って言う事になる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

いや、でもここまでしか分からないな。俺がすぐに分かった事な
んだ。ジュールだって、ジンの性質は謎だって言ってたしな。

「エリー・・・」

そうだ、俺はこいつに守られていると言うのなら、俺はエリーを
守る。・・・・・・・・いや、俺は監視されてるだけか。

鼻に消毒の匂いが突き刺さる。それがエリーの目覚め一発目で感
じた感覚だ。エリーは薄っすらと目を開けて、目に入る光を感じな
がらゆっくりと呼吸した。

（何があっただっけ・・・昨日）

エリーが寝起きの頭でそんな思考をめぐらせた。

——SHELLY！

「！」

今ので一発で目が覚めた。自分の耳の中で響くジンの声の残響。

。昨日からだ。一真が、ジンと遭遇して襲われたと言い、その後・・・

エリーは激しい動悸を何とか押さえ、自分の覚醒した頭を動かして、その昨日のことを思い出した。

エリーはいつの間にかやら寝ている間に掛けられていた白い掛け布団を掴んで自分からどかせ、上半身を起き上がらせた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

その後、その白い掛け布団を持ち上げ、しばらくそれを眺めた。ようやく、昨日のことを全て思い出せた。一真と友里の二人っきりのデートを陰から尾行して、そして、体中を銃弾によって打ち抜かれた一真とともに、自分達側の世界に帰ってきた。

そして・・・・・・・・・・。

（そっか・・・。私、あの後過呼吸起こして倒れたんだ・・・）
そしてエリーはベッドの上に寝転がった。そのあと、「はあ」と小さく溜め息を吐いた。

（何でだろう・・・。なんで私、彼のことを思い出すと、変になるんだろう。しばらく出てきてないと思ってたのに）

覚醒したての頭の中で考え込んだ。

とは言えども、そんなことの原因なんて当に分かりきっている。分かりきっているのに考え込んでしまう。しかし、それを否定できない。

彼が・・・ジンのことが純粹に「怖い」からだ。ここにいるメンバーは知らない。ジンの本当の恐ろしさを。彼の前では、どんな人でも殺され、そこにいたという痕跡すら残してくれない。

そう、一真も、いつかそんな事になる。

残念だが、そのイメージしか、エリーの頭の中で浮かばなかった。これ以上、一真を彼らの組織に関わらせない方がいい。しっかりと一真の性格を把握したとは限らない。だが、だからと言って一真がこの組織の存在を知って、この組織のことを深く勘ぐらないという事の保証なんてものはどこにも無い。

「あれ？」

今頃気付いた。ここに居なくてはいけない、一真がこの病室にいない。入院する際に着ている寝巻きがすぐそこにある椅子の上に丁寧にたたんで置かれていた。

（ま、骨も接着してあるし、そこら辺歩かせても大丈夫か・・・）そんなことを思いつつエリーはベッドから立ち上がって、下に置いてあったサンダルを履いて病室を出て行った。

もちろん、どこかで足引きずってほつつき歩いているババカズマ一真を探すために決まっている。

「どこだ、ここ」

出てわずか数分して、道に迷った、迷子の迷子の一真君である。

俺にはあまりにも計算しなさ過ぎた。携帯はおろか、GPS機能も使えないことをすっかり忘れていた。おまけにPLDはジュールに面手してもらっているため所持していない。ジュールいわく、エリーや他の人たちが触ったら大火傷するのは嚴重なプロテクトが掛かっているという可能性があるらしい。まだしっかりとした契約すらしていない俺が手を放すと誰かに悪用されてしまうという可能性があるからなのだろう、というのがジュールの見解だ。ちなみに、もう戦闘データは取られているので、正規の契約するのはそう遠くないだろう、という事も、ジュールの見解だ。

じゃあ、そのメンテが終わるまで町ふらふらしておこう、と思ったのが運のつき。受け取ろうと思っても帰り道が全く分からない。

——メンテ終わるまでどこにも行かないよう二！

と忠告されたのに、全く言うことを聞かなかった悪い子の俺。どうする？

PLDが無いんじゃあ、ジュールとも連絡が取れない。これぞ、正真正銘の迷子だ。聞いたところ

回りは日本語のようだから、聞いていけばいつかたどり着けるものだが、何せ相手はパラレルワールドの人間、聞くことに気が引けるのもこの実^{じつ}……。

しかし、ここでパニックッてしまえば余計帰り道が遠くなってしまう。

だから落ち着いて、さまよっていればいつかたどり着く。そう信じておこう。

たとえるなら東京の中央あたりに似ているこの町は、非常に熱い。もはやヒートアイランドだ。パラレルワールドと聞いて、ほぼ全部が相違点だと思ったが、そうでもない。逆にほぼ全部が同じ点だ。見たところ服装のセンスは俺達側の世界と何もかわらない。

そんなことを考えながらぼつと歩いているうちに、いつの間にやら裏通りに入ってしまったっているようだった。さっきまでの情景とは違い、光が行き届きにくいようだ。薄暗い道が真っ直ぐに続いていた。

「ま、探検するにはいい場所かな」

そう呟きながら俺は真っ直ぐに歩みを進め、暗闇に入ってしまった。いざとなったら格闘で蹴散らすまでだからな。

しかし、わずか数歩歩いて入って行った後だろう、周りのガン睨む視線がそろそろ気になってきたようだ。その人たちが着る服はおんぼろの継ぎ接ぎだったり、オカルトマニアかと思わせるような服装を着ていた。そう、俺の服装はその中では余りにもおしゃれすぎたのだ。

そう思った瞬間、人間の惨めな一面を見る羽目になった。

「ボウヤ、こんなところで迷子になったのかい？ かわいそうに」

「！」
ちよつとびつくりした。いきなり俺の目の前にオカルトマニア風の服を着た七十超えぐらいのばあさんが現れたもんだから仕方が無いよな。ちよつと引いた。

俺は後ずさりすると、後ろの気配にも気付いた。

振り向いてみると、筋肉ムキムキのスキンヘッドをした俺の身長を三十センチぐらい超えている大男が立っていた。

それを決起に俺の周りにはほとんどこの通りの住民が集まってくる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺はここでも自分を取り乱さず、冷静に周りの人数を数えた。

（・・・・・・・・・・三・・・・・）

そのペースで数えてみると、俺の周りに集まった群れの人数は合計で八人。どこぞのゲームの無茶振りかというぐらいの人数だった。

「あつ」

そういえば忘れてた。俺、右足が思うように動かないんだった。

すっかり忘れてた！桐ヶ谷一真、最大のピンチ！どうする？

そうこうとグズグズしている間にも周りの人間達は俺に一歩一歩と歩み寄ってくる。片足が動かないんじゃあ、俺のお得意のジークンドー截拳道を存分に発揮できない。さすがの俺でも利き足でもない左足のみでステップを踏みながら戦うなんて牛若丸じみた曲芸は出来ない。まさにピンチピンチピンチだ。

おとなしくボコられるか、それとも牛若丸のまねをするか……。そう決めあぐねていたときに、集団の隙間から一人の人影が見えた。

「お前達、そこで何してる？」

そう、俺が聞きなれている少女の声だった。

集団の目が俺から一気にそっちに向いた。

漆黒の腰辺りまで伸びているロングヘアーに、頭頂部から生えているアホ毛が特徴的な少女が、今この降臨したかのように、ずっしりとそこに立っていた。

「エリー？」

俺がその名を呼ぶと同時に、ゴツイ体型の男がエリーにのっしのっしと近づいていった。

「小娘、何者だ？」

その男がドスの効いた声でエリーを威嚇すると、エリーは飄々とした態度で懷からPLDを取り出してこれ見よがしに軽くそれを振った。

「PPAだけど、何かある？」

その一言で十分といわせるほどに、俺の回りにいた人たちはおずおずと後ずさり、エリーと俺の間の道を作った。

その出来上がった道をエリーはずしずしと歩いて俺に近づき、呆れ顔を浮かべながら俺の手首を掴み、その通りを抜け出すためのルートを早歩きで通り過ぎていった。・・・俺の脚のダメージなんか全く気にしていない様子で。

「おい、エリー右足が痛いからそんな早く歩くなつて」

当にあの通りを過ぎたというのに、俺の腕を一向に離そうとしない。歩き方からして不機嫌極まりないようだ。

「エリー！」

俺のその怒鳴り声と共に、エリーはピタッと立ち止まって俺の手を放した後、バツと俺の方へ振り向いて腰に手を当てて、俺に顔を近づけた。

「もう！どこ行つてんのよ！ジュールはどこにも行くなつて言われてたでしょ！ジュールったら、「カズマは？カズマはどこに居るんだい！」つてうるさいったらありやしないんだから！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

すまん、ジュール。俺がお前の言うことを素直に聞いていないばかりに……。心配してくれてたんだな。あいつ……。帰ったら謝ろう、マジで。

「もう……。しかもよりによって夜半の通りに入っていくなんて、その好奇心、まるでガキそのものね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ツンとするような態度をとり、完全にそっぽを向いてしまったエリー。

いつもの俺なら何か言い返すだろうが。今のエリーのその言葉はまさに正論真つ当だ。反対意見なんかどこにも無い。

しかし……。

「いくらなんでも言い過ぎだろ、それは」

言い過ぎだ。これも真つ当な事だ。さて、ここから俺とエリーの口喧嘩がヒートアップする！

エリーは険しい顔を俺に向け、まるで猛犬その物になったような表情になった。

「言い過ぎつて何よ！別に言い過ぎじゃないでしょ！だいたい、ジュールの言うことを素直に聞かないからあんな事になるんでしょが！」

「ああ、そうだな。起きて二時間も待つて「カズマ、もうちよいまつてててネ」等と言われてしまったらそりゃあ、ジツとしてられないだろう？俺は人間そんな上手く出来ていないんだ」

「だからって、度があるでしょう！毎回毎回人に迷惑掛けてばかりして！」

「迷惑？確かに今回は迷惑を掛けた。だが、いつも迷惑掛けてるのはお前達だろ？」

「はあ？」

「この数週間の間、だれが零れ物ジャンクを回収したと思ってるんだ？」

「今回のことは借りの内の一つだ。昨日のことと合計したら、これでお互いはお互いで貸し借りにしなくなった。俺が働いた分、しっかりと働いてもらわねば困る。ギブ&テイクだよ、いわば」

「……………」

すっかりと口をつぐんでしまったエリー。さあ、どう返してくる？激昂ツンデレ少女？

「もう！一真のバカ！馬鹿バカばかあ！！」

「悪いが、この口喧嘩は俺の大逆転勝利だ」

「くう・・・こしゃくな」

俺の目の前で悔しさ一杯の涙を浮かべ、握りこぶしを握りワナワナと震えているエリーを見て、ついつい噴出しそうになった。

「ハイ、これ」

P P Aの本部に戻ってこれた（エリーは悔しさで地団駄を踏みながらジュールの研究室から退場）俺は、ジュールから黒色のP L Dを手渡された。ジュールが素手で触っている物だから、彼が言っていたプロテクトといわれる物は無事に外れたのだろう。

俺は手渡されたP L Dを眺めた。以前と変わらない漆黒のP L Dからはキラリと光る光沢が見えた。

「まずは、そのP L Dに掛けられていたプロテクトの解除は無事に完了したネ。それと、キミのP L Dの中に、リンカー、及びP P Aのライセンスデータも入れておいたネ」

「ライセンス？なんでだ？」

「ま、念のためだよ。それがあると、キミはパラレルワールド間を自由に行き来することが出来る。もちろん、ボクを通してネ。それに、威圧にもなるし」

「そうか・・・」

そうだったな。そういえばさつきエリーが自分が、P P Aだといったら、あの集団もかなり恐れおののいていたな。

ああいう状況が成り立ってしまった時に役に立つのだろう。

「ありがとう、ジュール」

「イヤア、何もやってないヨ？やるべきことをしただけだヨ」

「フンッ」

俺はうつすらと笑いを浮かべ、背を向けた。

（やるべきことだからやるだけ・・・か）

それは義務であり、自己的ではなく、命令的に……。やりたいからやるのではない。やらなければいけないという強迫概念によって動かされ、とりあえずやっている。

どこぞの誰かさんにそっくりだな。

そんな事を思いながら、研究室^{ラボ}から出ると……。

「うわお！」

まさかエリーがこんな入り口のすぐ傍で今か今かと俺が出てくるところを「待ってました」とか言う姿勢で、待っていたとは思ってもしなかった。

「むふふう」

何か満足げな笑顔を浮かべて俺の目を見ている。

……。なんだ？何かあつてはいけないことが起きてしまったのか？

「一真、PPAになつたんだって？」

「ん？」

ああ、そういえばライセンス取得したんだっけ？……。あれ。

「ギブ&テイク」

エリーが満足げにそういった。その瞬間、俺の背中からトンでもない量の冷や汗が流れ出し、背筋を凍らせた。

「これで、ギブ&テイクは成立しないよね、か・ず・ま」

「……………」

エリーは天子のような笑顔を浮かべながら首を傾け、いかにも自らが淑女であるかのようにアピールしながら、勝利宣言した。

ゴクツと生唾を飲み込んだ。やばい……。あの戦いはまだ終わっていないかったと言うのか？今日はこれにて、ジ・エンドって言うわけか？

「これで貸し一返還ね？一真」

「……………」

くっそお、運に負けた。落胆しかないぞ？これ。解せないが、こは負けを素直に認めよう。エリーの強い運も立ててな。

「わかった。で、俺の借りはどうやって返せればいい？」

「もう・・・」

そして、彼女は言った。

「これ以上私達に関わらないで・・・」

ただ、静かに、ジュールが聞いているかもしれないと言うこんなところで、エリーは、静かに言った。

STAGE 11

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺の頭上に原始爆弾でも投下されてしまったのか？頭が凄い衝撃を受けたような感覚に見舞われ、頭がぐらついた。いきなりの言葉でも、爆弾発言にもほどがあるだろう。

「何だよ、いきなり」

「そのままの意味。一真はこれ以上私達と関わっちゃいけない」簡単にそう単純に答えて来るエリーの真意が全く見えなかった。じゃあ、その真意をここまで引きずり出すまでだ。

「何でかが分からない。お前の言葉には必然的に^{ホワイ}whyが抜けている。理由なしでは引き下がることが出来ない。俺は入り込みすぎたんだ」

「とにかく、もうこの他次元間で起きていることに首突っ込まないで。邪魔だから」

「邪魔・・・ねえ」

何とかwhyを聞きだすことが出来たが、それが果たして真意かどうかが問題だ。理由が「邪魔だから」というだけが理由じゃないかもしれない。もっと他にあるはずだ。もう少し勘くぐってみよう。

「邪魔って言うことって、何があったわけ？」

「さっきのこととか、一真がジンに襲われて、私に迷惑掛けたこととか・・・・・・・・」

あれ？まさか・・・。

「もう！とにかく関わらないで！！」

怒鳴った。呆れたよ、本当に。こいつのお得意スキル、「お話強制終了」だよ。エリーは狂犬地味で、歯をむき出しにしてまさにイライラしているという風な雰囲気を出して睨んだ。そこは・・・まあ、あんまり触れないでおこう。これ以上触れたらエリーがマジギレして爆発するに決まっている。それに今まで俺がこいつを無視し

てきた分のイライラもあるのだろうから、その威力と要ったら半端な威力ではないと思う。

俺は鼻で小さく溜め息を吐きながら後頭部をがりがり搔いた。

「でもなあ、お前が言うように俺も一応PPAに入っちまったんだし、関わるなっっていわれてもどうしようもないだろう？もう十分深く入り込みまってるし・・・」

もはや言い訳と言えるような言い分をした俺をエリーは「往生際が悪い」とか呟きながらそっぽを向いた。言葉だけを聴いてみれば、呆れたと言うような感じだが、エリーの手を見てみれば分かる。

右手で軽く握りこぶしを作って、それが小刻みに震えていた。それで俺は確信した。

（こいつ・・・）

なんだかんだ毒ばっかり吐くものかと思ったら、こいつは俺を単純に自分がかつていた組織のことを勘ぐって欲しくないからだった。

エリーはさっき俺のことを「好奇心はがきその物」と言っていた。その俺の好奇心がこれ以上この事件に関わることであいつらのことを深く追求してしまいかねないと思い、エリーは早めにその芽を摘もうとしたわけだ。自分が恐れているジンと言う男と関わらせたくなくて、俺を無理やりこの世界から突き放そうとしたわけだ。

「納得いくと思うか？んなもんで」

それで「はい、了解」なんぞいえるほど、この桐ヶ谷一真は上手く素直な人間に出来てないんだよ。

「悪いが、俺はここまで関わっちまった以上、どうしようもない今後のことでどうするか決めたい」

「でも！」

エリーがバツと振り向き、自分の胸に手を当てた。そんな表情してたのか。あまりにも咄嗟に見せた表情は内面的なものを写す、という物はこういうことか。心配してくれていたのか、こいつ。目尻が下がって涙をこらえていると言うのが分かった。

そんな表情を見ても尚、俺は続けた。

「エリー、力の無い奴が力を求めないことは愚かしいことなんだ。けど・・・力のある奴が力を振るわないっていうことはもつと愚かしいことなんだ。だから、俺はここから抜ける気は無い。せつかく手に入れた力なんだ。俺はやらなければいけないんだ。俺は愚かしいことなんて事にはなりたくないからな」

「一真・・・」

エリーは俺の名前を呼ぶだけで、その後口を尖がらせて頬を赤らめて俯いた。その後は全くの無口。堅く口を閉ざしてしまった。俺はエリーを通り過ぎ際にエリーの肩をポンと叩いた。

「ジュールから聞いたぞ。お前、あの組織に入ってたみたいだな」

「へ!？」

エリーはハツと顔を上げ、俺の目を見上げた。知られたくないことが知られ、自分から離れていってしまうと言う恐れを抱いているかのような目だった。

そんな表情を見て、俺は薄っすらと笑いを浮かべた。

「お前、見かけによらずタフじゃないよな。」

いつ俺達があ組織に消されてしまうのかが分からない。だから恐くてしょうがない。しかもそれが自分のせいだとしたら・・・。自分がその組織のメンバーだったと言うことがばれたら、みんな離れていってしまうかもしれない。だから恐い、てか？」

「・・・」

エリーは涙をこらえながら、俯いてただ沈黙を守り続けていた。

「お前は友里そっくりだ。いつも何かに恐がっているくせにそれを周りに知られたくないから、いつも明るく振舞ったり、時にはデカイ態度を取ったりする。苦しいなら苦しいって言えばいいのにな。できる範囲なら協力なんていくらでもしてやれるのにな」

その言葉と同時に。エリーが俺から背を向けて顔の辺りをゴシゴシとぬぐった。

「??」

俺は首を傾け、その謎の行動に対して疑問符を浮かべた。何して

るんだ？こいつ。

その後、エリーは俺の方へ振り向いて、口を「へ」の字の形にして、いかにも睨んでいるかのような表情で俺の目を見つめてきた。

「何でかい事言ってるのよ！それで自分がかっこいいと思ってるわけ！？あんたなんか協力してもらわなかったって、私だけでやることは出来るっつーの！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

お、みんなが知ってるエリーに戻った。なんだか吹っ切れたのかな・・・・・・・・？ま、戻りすぎで、変な方向に言っただけだし無ければいいけど・・。

その後エリーは俺にほんの少し微笑みかけながら背を向けてすたすたと歩き去っていった。

そして、急転直下如く、事件は起きた。

このPPAの本部の廊下内でたましいアラートが鳴った。こんなときでも何故か冷静になれる俺は異常なのだろうか。いや、待ってたのかもしれない。どうやら俺はいつか久しぶりに力を振るう日を待っていたのかもしれない。戦いたくないと言う自分の本能がいつの間にやら「たまにだったら戦いたい」と言う本能に挿げ替えられてしまったらしい。

・・・・って言うか、これが敵の出現だということだという決まりではないけどな。

俺とエリーが天井のアラートを鳴らしているスピーカーを見上げると、研究室からジュールラボが走り出てきた。明らかに焦燥感一杯の表情だ。

「エリー、カズマ。零れ物ジャンクが三体と、大量の鉄くず（イリーガル）がどうやらこの街に襲ってきたみたいだよ。気まぐれだから仕方が

無いけど、カズマも、協力して欲してくれないかな？」

俺はエリーとジュールには分からないように、口元で薄っすらと笑いを浮かべた。

「ああ、分かった。協力は惜しまない」

あれ？そういえばさっき知らない語句が入ってたような・・・。

「なあ、鉄くず（イリーガル）ってなんだ？」

その俺の発言に対して、ジュールはキョトンとしたような表情を浮かべ、じと目でエリーを見つめて溜め息を吐いた。見つめられたエリーは顔をゆがませて、額汗を浮かべた。

「鉄くず（イリーガル）って言うのは、零れ物ジャンクの出来損ないっ手言うのが相応しいかな？」

「零れ物ジャンクの出来損ない？って、つまりゲームで言うとステージの上にいるエネミーのことか？」

「ん？まあ、そういうことネ」

ジュールは顔に疑問符を浮かべながらも頷いた。つまりそういうことなのだろう。ならば、話は早い。リンクすれば俺の運動能力は極端に高くなる。

そう考えたら・・・。

「じゃあ、そいつらを片っ端から片付けて、零れ物ジャンクを・・・て
そういえば俺の右足って・・・。

「カズマ」

「ん？」

「キミの右足・・・そろそろ痛みもなくなってるはずだよ」

「へ？」

その言葉と共に俺はジンによって打ち抜かれ、骨折していた足を浮かし、その後、足をトンツと落としてみた。

「あ、ホントだ」

思わず声が出た。凄い回復力だ。いったい俺が寝て歩き回っている間に何があったのかが分からない。そんな疑問一杯の顔を浮かべているのが分かったのか、ジュールがそんな俺の疑問に答えた。

「キミの中にある性質を高速で体中を回して、キミの回復力を急激に早めていたんだよ」

カタストロフ

「性質を回す？」

カタストロフ

「ウン。そもそも性質って言うのは血液みたいに体中を循環して回り続けているんだヨ。その中には生命、自然、超常エネルギーを体内に宿し、キミを回復させたのは生命エネルギー」。

カタストロフ

性質の回転率によって、それぞれのエネルギーが急激に上がる。

ま、無理やり回転率上げてる状態だったから、かなりリスクな行動だったけど……。ま、保険はいくらでも掛けてたからネ。いまは完全に回復したから、もう通常通りだと思うけど……」

「そう……か」

もしそうだとしたらかなり便利な体になっているんだな、俺の体は。

「よし、行こうか……」

もう心にエンジンが掛かったな。そうと決まれば、本当に片っ端から切り倒せば言いだけか……。

俺が駆け出すと、後ろでエリーが「ジュール、行って来る」という声が聞こえて、その後しばらくしてからエリーが俺の後を走って走ってくる足音がした。

「頼んだヨ、カズマ。エリーのこと」

ジュールだって分かっていた。エリーは見かけによらずあんまりタフではないことを。だから、一人にしてはいけない。孤独にさせてしまうと、エリーはまたジンのことを思い出す。そんなことになったら、今度こそエリーは壊れてしまいかもしれない。

だから……。

「頼んだヨ……カズマ」

もう一度同じ言葉を呟いた。

外に出てみると、地響きが鳴り響き、所々で黒煙が上がっている状態だった。まさに、襲撃を受けていると言う状態だった。

「何でだ？何で境界を張らない！？」
バドックス

「そうだ。境界を張ればこんなにも被害は出ていないはずだ。」

「この次元上自体が境界の膜に覆われているから、発動しようにも発動できないの。境界の上に境界は張れない。それに似たもどきの物を張ることは出来るけど、技の衝撃に耐えられないし、すぐに割れちゃう」

「そうか・・・」

「それに、ここは他次元間の影響をもっとも強く受けてるから、いつ襲撃を受けるかわからない。だからいつでもリンクできるようにしてるの。被害が大きくなる前にね」

「そうだったのか。じゃあ、ここにいる全員って・・・」
バドックス

「そ、一応リンカーって事になってる。PLDがあれば境界内を自由に行き来できるし、どさくさにまぎれて戦闘の間を逃げられるしね」

「時間が止まって、影響を受けないんじゃないのか？」

「動かないだけ、ダメージはしっかりと受けるし、破壊や真つ二つすることもできる。あの狼形の零れ物のときは一真が誰もいないところに引き込んでくれたから誰も死なずにすんだ」

「そうか・・・そういえばあの時は雨が降りかけていてしかも人はほとんど歩いていなかった。あの女の子から離れていたんだ。工事現場のあたりは誰もいなかった。だからエリーはあんな容赦なしに戦っていたのか。」

しかし、あの時もし人が周りにいたのなら、こいつは少々手加減して戦っていたって言うことか。じゃないと、周りの人間まで危害が及ぶ。ノーガードのところを斬撃が加わればとんでもないことに

なることはまず間違いない。動けなければいけない。

「そうか・・・ここに居る人たちみんなは動けるから逃げられる。つまり、思いつきり戦えるって言うことか」

「そういうこと」

エリーと俺は笑いを浮かべながら互いの表情を見詰め合った。

俺は懐にしまいこんでいたPLDを取り出した。それを腕に当てると、PLDからバンドが出現し、俺の腕に巻きついた。

「片っ端から片してやるよ」

俺はPLDのレバーを引いた。

——Link START

俺の頭の中でリンクしたときのあの機械音声が聞こえた。右目にもたぶん紋章が浮かんでいるはずだ。

俺がリンクしたとき、隣でエリーが呟いた。

——CODE WIND

エリーの体が風に纏われ、エリーの髪の色が空色に変化し、瞳の色もこげ茶色から髪の色と同色になった。この力が、エリーの代名詞その物だ。

その後、エリーは俺の方へ振り向いたと思ったら、俺にウィンクを投げかけた。

ん？何かたくらんでるのか？

「じゃあ、お先に」

「??」

その瞬間、エリーが被害が出ている方向に目を向けると、ブワッ！と強い突風が出てきたと思ったら、気付いたらエリーがいない！？

「あれ？どこ行った？」

ああ・・・そういえばエリーが風のコードを宣言すると、スピード特化型になるんだっけ？いつも「火」しか使わないから忘れていた。

って、言ってる場合か！

あいつ一人にさせても大丈夫なのか！？援護射撃ぐらいしてやらなければいけない。さっきエリーが向かっていった方向に行けば会えるはずだ。ジャンプであの建物の上に建てるかな。

見たところその建物は二十メートルぐらいの大きさ。あの時飛んだ高さは多分三十メートルちょっと。じゃあ、余裕で飛び乗れる。

俺は両足に力をいれ、高く飛び上がった。通常では到底考えられないジャンプを、リンクすれば可能になる。

ゴウッ！と言う音と共に俺の体が宙を飛んだ。屋上のフェンスを余裕で飛び越え、屋上の上に立てた。

「あそこか・・・」

俺が見た先の黒煙は、風に巻かれるようになびいていた。きつとあそこでエリーが鉄くず（イリーガル）相手に暴れまわっているはずだ。

あの暴れ様から観て尋常じゃないな・・・。周りホントに人いないのか？いたら大変だぞ？

（大惨事になる前に早く行こう）

そう思ったとき、俺のPLDから声が聞こえた。

『カズマ』

「ジュールか」

何のようなんだろう。あいつらを片っ端から片付ければいいはずなんだが・・・。

「何だよ」

『カズマ、エリーを一人にしないでくれ』

「ん？」

って言うか、もうあいつ一人でいったんだけど・・・。

『今のエリーは凄く不安定なんだ。表向きはあんなでも、多分一人ぼっちにさせてしまつとまた陣のことを思い出してしまうかもしれない。だから、一緒にいてやつてくれないカイ？カズマ』

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

言われなくても分かっていることだ。あいつはまだ不安定だ。一人にさせてはいけないことぐらい、十分に分かっている。

「分かつたよ・・・。エリーからは離れないよ」

『助かるネ』

ジュールと俺の回線はそれで途切れた。エリーは多分あそこで戦っている。ガラスの心になっている彼女は今も尚あそこで戦っている。

（エリー・・・）

俺はほんの小さく呟いた後、フェンスを飛び越え、建物の間を軽く飛び越え、そのエリーが暴れている場所に近づいていった。

——S H E L Y・・・！

「クッ！」

まただ。こんな鉄くず（イリーガル）に囲まれていると言うときにジンの声がエリーの耳の中で響いた。体を凍りつかせ締め上げてしまふ。

一人になると、ジンのあのときの冷たい声が聞こえる。それだけで、動きが鈍ってくる。

（何で？何で？何で、あの組織は私を逃してくれないの？何で、彼はいつまでも私の中にいるの？）

——S H E L Y・・・

——S H E L Y・・・

—— S H E L Y !

「くっ！うあああああ！」

だめだった。どれだけ一真が強い表情を見せても、どれだけ一真が
いい言葉を言っても、どれもジンによって塗りつぶされてしまう。
あの冷たい声、冷たい笑いが一真を食い尽くす。

（嫌、嫌、嫌アア！）

風が、周りの鉄くず（イリーガル）を巻き込み、切り裂き、バラ
バラにしていた。完全な性質の暴走だ。

もしかしたらこうしている間にも、ジンが現れて、自分を殺すか
もしれない。一真を殺すかもしれない。あの凶殺者は狙った標的は
殺すまで追い続ける。

だから、早く来て欲しい。

毒舌家で、皮肉屋の探偵気取りのあの馬鹿に会いたい。

あつて、安心させて欲しい。

（一真・・・一真・・・一真・・・一真！！）

「一真ああああ！！」

エリーはその少年の名前を叫んだ。いて貰わないとおかしくなっ
てしまいそうだ。ジンのイメージを、彼は打ち消してくれる。だか
ら、叫んだ。すると、エリーの髪の毛の色が赤色に変わった。目の
色も空色から赤色に変化し、何も宣言した覚えもないのに、勝手に
自分の体内の属性が「火」に変わった。

じぶんの本質の性質、カタストロフ「火」が発動した。

「エリー・・・」

さつき、俺を呼んだのか？あいつは。だつたら相当やばい。あの
あいつがそれだけピンチって事だ。零れ物ジャンクか、それともっと違う
奴か・・・。

「ッ！」

俺の目の前にある黒煙から、火の渦が発生し、煙を食らい尽くしていつていた。たぶん、エリーが「火」のコードを使ったんだ。しかもあの炎の暴れっぷりからして、もう半暴走状態。

「ジュール、あれはまさか」

『ウン、エリーが暴走してる。多分、ジンを思い出しているんだろネ。カズマ、早くエリーの傍に！』

「ああ・・・」

俺は建物の間を飛翔して、飛び越え、確かにその黒煙が上がっている場所に近づいていた。

（チツ、世話の焼ける！）

俺はそう毒づきながらも、エリーがいる場所に近づいていった。

動悸が激しい。息が苦しい。頭が真っ白になる。そんな感覚の中で、エリーの性質は暴走カストロフしていた。火を撒き散らし、周りの建物を破壊してしまっていた。ジンにあそこにいた事がばれたかもしれない、そして、彼が殺し損ねた一真諸共全員を抹殺しに来るかもしれない。そんな感情を暴走によって表していた。

（一真、どこ。一真、どこ！）

何故か分からない。何故、こんなに自分が一真にこだわるのか。全然分からない。存在していないかもしれない少年、桐ヶ谷一真をエリーは求めていた。傍にいて欲しい。じゃないと壊れる。

「エリー！」

その声と共に、エリーの手が握られた。よく聞き覚えのある少年の声。今一番会いたかった少年の声だった。

「一真・・・」

エリーがそう口になると、動機がどんどん静まっていく。バクバクとした心臓の鼓動がどんどん、トクン、トクンという小さな鼓動に収まり、気が沈んで落ち着いてくる。

エリーは涙をこらえるように口の形を「へ」の字に変え、怒鳴った。

「馬鹿！遅い！」

「遅いつて・・・お前が速かつただけだろう。いきなりコードウインドとか使つて颯爽さつそうと俺の目の前から消えてるし・・・。勝手に突っ込んで勝手に暴走して勝手に泣いてるんじゃないやねえぞ。世話の焼ける・・・」

最後にほんの少しエリーを毒づいた一真。やっぱり本物の一真だ。何も心配する必要なんかない。一真はここに存在している。

そう確信したエリーは一真から顔を背けて口元で薄っすらと笑いを浮かべた。

（こんなに大きくなってたんだ。一真の存在って・・・）

ほんの少し一緒にいただけなのに、一真の存在が大きくなっている事を、初めて実感できた。

（たく・・・世話掛かったあ・・・）

あんなに暴走しているとは思っていなかった。おかげで周りの建物の半分がどつかにぶっ飛んでいるという、あんまり笑えない状態となっていた。

とは言えども・・・。

（こいつら、どこから沸いてきてるんだ？）

多分エリーが暴れた分、かなりの数の鉄くず（イリーガル）は減っているのだろう。しかし、それを差し引いても、まだ周りに三桁単位の数の鉄くず（イリーガル）が湧いて出てきていた。人型の口ポットだったり、モンスターみたいな奴だったり、いかにもゲームではエネミーの役を買っていると言う奴らばかりだ。

「一真」

「ああ・・・」

「私の背中、任せるから」

「そうだな」

俺とエリーは互いを背中合わせに立ち、大量の鉄くず（イリーガル）の前に構えた。

「代わりに・・・」

「なに？」

「俺の背中はお前に任せっからな。これでギブ＆テイクだろ？」

「調子のいい事言つて」

そのエリーの声からは微かに力強さと、信頼という感情が滲んでいた。

今のこいつなら大丈夫だ。俺の背中をませられるな。

ノイズが集まるようなエフェクト共に、俺の右手に交互に白と黒の微かな光^{波動}を放ち、表裏^{ひょうり}がそろったような黒い刃紋を持つおれの腰辺りまでの長さのある銘無し^{ひょうり}の片手剣が握られた。

CODE CRIMSON

エリーの呟き声が聞こえた。コードクリムゾン。エリーが今まさに本気を出す時に宣言するコードだ。クリムゾン、即ち紅、「紅焰^{こうえん}」だ。

俺の後ろで炎が上がった。炎がエリーの体を包み込む。エリーの紅蓮色の染まった髪の毛の周りにパチパチと火の粉が飛び散る。体内から漏れ出すほどの性質^{カクストロフ}の量。ある意味、俺より潜在能力性は高いかもしれない。俺は口元で笑みを浮かべながら、目の前百八十度の鉄くず（イリーガル）どもを見据えた。

波打つ黒い刃紋に俺の顔が鏡のように映る。

その瞬間、周りの鉄くず（イリーガル）が俺とエリーに飛び掛かってきた。

「ッ！！」

俺は短い覇気と共に、剣を振った。まずはやるべきことは一番近い敵を切り捨てることだ。俺が降った剣の中腹がちょうどモンスタ―型のイリーガルを無造作に切り捨て、横に二つに分けさせた。すると、零れ物ジャンクと同じように切断面が青く光っており、そこからひびが入ったような、感じで青い光が鉄くず（イリーガル）の体を駆け巡った。

飛んだ上半身は地面に叩きつけられた時に、残った下半身は地面に倒れこんだとき、それぞれはバキリッ！！という大きな破砕音と共にバラバラに砕け散り、その後上空に飛び交った粒子は数秒もしない内に消滅した。

しかし、敵は次々とやってくる。

ソニックブレイドは単発だからいつせいに倒せてもせいぜい五、六体。ヘイトフレイムとダイヤモンドソニックは発動してから発射まで時間がかかる。実際、エリーは使っていない。目の前の敵を一体一体順番に自分の持っている太刀で切り倒していつている。

「クソ、エリー。何か技ないのか？」

「はあ？」

「技だよ！技！この周りの奴を一気に一掃出来るとっておきの技！」

「まさか、一真！コピーしようつての！？」

「それ以外何がある！一気に片して、早く零れ物ジャンクも片すんだよ！今回は三体！もしかしたら他の奴もその二体と戦っているかも知れない！それかまだどっかの鉄くず（イリーガル）の相手してる途中かもしれないんだぞ！だったら俺達がやることは、手っ取り早くこいつらを片すことだ。だから、エリー！何か使ってくれ！」

俺とエリーは周りから襲い来るイリーガルを切り倒していきながら、その合間を縫って言葉を交わした。こっただけ倒していつてもまだどっかから湧いて出てきてやがる。

エリーは目の前の敵を切り倒して、少々考え込むように下を向い

た。何か心当たりがありそうだ。

「あるっちゃあるけど・・・」

「・・・・・・」

「一真も巻き込むかもしれない！だから使えない！」

「・・・・・・」

エリーは必死でこんな騒がしい状況の中で、俺に意思を伝えていくような表情出して、そう言った。

俺も巻き込む・・・か。そう考えたらかなりの威力でかなりの広範囲なのだろう。確かにそうだったら、俺も向こう行きだ。だが・・・。

「けど、こんだけの数をとっと片付けるには、俺とエリーがデカイ範囲の技を使う必要がある！」

それでも、エリーはただ目の前の敵を見据え、それでもチラツと俺を見やった。本当にしていいかもよっているのだろう。こいつに使ってもらわなければ、俺だって生きていけない。生きていける自身が無い。どうせ死ぬのなら、生きる可能性があるほうを選ぶんだ。

「大丈夫だ！エリー。タイミングさえ分かれば俺はお前の攻撃をかわせる！だから、使っんだ！」

俺は敵を切り倒すどさくさのタイミングの中で叫んだ。しばらくすると、敵の軍団の攻撃が止み、にらみ合いの状態になった。

「一真・・・」

エリーは俺のさっきのその言葉に俺の顔を横目で見やり、その後下に俯いて目を閉じた。

「分かった。だったら信じる。一真のこと」

そして、エリーは俺のほうに振り向き、俺の目を強い目で見つめた。赤い瞳の奥にある炎がかすかに視認できる。

「私が発動するタイミングを言うから、高く飛び上がって」

「ああ・・・了解」

俺は口元で笑いを浮かべ、目の前の敵を見据えた。今俺のやるべきことは、エリーの技を発動させること。その発動している間はや

っぱり極端にノーガードになる。俺はそのエリーを守らなければいけない。

エリーは俺の後ろで、ふうと息を吐き、目をつぶった。エリーの持つ太刀に帯びる紅蓮の焰が小さく、激しく燃え上がる。たぶん、あの焰のサイズがほとんど大きくなっていくのだろう。

俺はそのエリーの姿をチラッと見やりながら、周りの俺とエリーを襲ってくる敵を叩き切っていた。

そのうちに、俺の背後が熱くなる。燃え尽きてしまいそうなくらい熱い。背後を覗いてみると、エリーが持つ太刀に帯びた炎がいつの間にか大きくなりそれが十字を作っていた。

「一真！飛んで！」

「フ・・・」

俺は口元で笑みを浮かべ、両足に力を入れて、飛び上がった。俺の体は一気に三十メートルちよつと飛び上がり、エリーの体が小さく見えた。もちろん、エリーが発動する技も見逃さない。俺の右目で見た技はコピーして、俺の技として扱うことが出来る。エリーの握った太刀から放たれる十字型の紅蓮の焰が振るわれる。

——クリムゾンクロス

俺の頭に確かに聞こえた、その技名。俺はその技を確かに視認した。

十字型に紅蓮の焰はエリーの周りの鉄くず（イリーガル）をなぎ倒し、直撃を受けた敵の体に、紅蓮色の炎が燃え移り、それが体を喰らい尽くす。

二十メートル上の俺の耳にも聞こえた。炎が消えず、苦しみもだえる鉄くず（イリーガル）たちの断末魔のような悲鳴が。口や理屈では到底説明できない。

しかし、その断末魔に心が動かされない。人が殺される時、その断末魔を聞くなり、俺の心は大きく動かされるのだろう。たとえば、殺人犯でもだ。しかし、相手は人外、鉄くず（イリーガル）だ。たくさんの人たちが恐怖し、それを追い込み殺す。しかも相手は人間の法とかそんなの無視だ。だったら、押さえ込むしかない……のだろうか。今はあんまり迷いたくないし、考えたくない。

俺の体が地面に着地した。二十メートルも高くから足で着地した。その衝撃でたぶん足が持つてかれるだろうが、リンクしているからそういうことは起きない。スタンツと静かに着地して周りを見渡した。

「すげえな……」

俺の周りにいた敵の大半数が一気に根こそぎ消えている。あの一撃で、あれだけの敵を一気に倒したって言うことだ。

じゃあ、今度は俺の番だ。

その瞬間、俺の意識が体から切り離された。

—— クリムゾンクロス

俺の頭はそう言った。その言葉にエリーが気づき、はっと俺のほうへ振り向いた。俺の持つ片手剣から紅蓮の炎が発生し、それが激しく、しばらくしてから大きくなりそれが十字型になった。俺の体はエリーと同じように、目の前百八十度に存在する敵全てをなぎ倒して、かすった敵には、炎が残り体を食い尽くした。断末魔、叫び声、もだえ声が聞こえる。敵の叫び声が消えるたびにバキリッ！！という破碎音が聞こえ、青い粒子が上空を舞い、そして消えていく。俺の意識がようやく体に戻った。手足の自由を実感しながら、俺の握る片手剣を眺めた。さっき出てきた紅蓮の焰は完全に消えうせ、また、白と黒の小さい光が交互に刀身を輝かせていた。

便利な能力だ。戦えば戦うほど強くなっていくタイプの性質なんだよな。カタストロフ「天」の性質は。

俺はエリーのほうへ振り向き、口元でうつすらと笑いを浮かべながら、さっきのエリーと同じようにウィンクを浮かべた。

エリーは俺の表情を読み取り、頬を赤く紅潮させる。あれ？変なスイッチ入れたかな？

そんな変なスイッチが入ったであろうエリー本人は俺からぶいっとそっぽを向き、俺の背後の敵の方向を見た。さっきの俺の一撃で俺の目の前の敵の数はホントに微々たる物だ。もう、わざわざクリムゾンクロスを放つまでも無い。ソニックブレイドを連続使用していつて、片していくのが一番セーフティで確実だ。ま、エリーの方向に居る敵はまだ結構居るからまたクリムゾンクロスを放つかもしれないから、エリーからは離れなければいけないしな。

「もうちょいだな、エリー」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「エリー？」

「ふへ？・・・う、うん」

俺はエリーと背中合わせだから表情が分からない。けど、なんか集中を欠いているようだった。死ぬ気か？こいつ。なんだかこいつが集中を欠くなんて珍しいな。

なんだか体が熱い。動悸が激しくなる。しかしエリーはまだこの感覚に浸っていたかった。言葉でだけで言うところのジンのことを思い出した時と同じような感覚のはずだ。しかし、一真のあの顔を見たときに出た動悸は何だか違う。人が違うだけでこんなにも違うのか、とも思った。ほんのりと体が熱い。

その感覚に浸りながら、エリーは目の前の敵に集中した。今実感できた。今時分の背中には、一真が居る。一真が居る限り、自分の

背中は大丈夫。そう実感できた。一真も同じ事思っているはずだ。エリーが背中に居る限り、背中は大丈夫だって言うこと。ようやくエリーも会いたかったパートナーに会えたと思えた。

（居たよ、ANCHI。あなた以外でも私の背中を任せられるパートナーが）

エリーはあの時の男の顔を浮かべながら、自分の握る太刀を構えた。彼が付けてくれた「銀焰^{ぎんえん}」と言う銘を受けた太刀を・・・。

——ソニックブレイド

俺の体は超高速で最後の鉄くず（イリーガル）の合間をつめ、逆手で持っている高速振動をしている片手剣でいつきに真つ二つにした。

これで俺サイドに居る敵は全部片付けたはずだ。
さて、エリーのほうは・・・。

と思って俺は最後の敵の破砕すら見送らず、エリーの方へ振り向いてみると、案の定、エリーのほうも全部片付けたようだ。イリーガルが消えた後なのだろう、残り火が微かに残って、エリーはそこに君臨しているかのように立っていた。

エリーはそんな状況の中で俺のほうへ振り向き、ツンとした表情を浮かべていた。

「やるじゃん・・・」

俺がそういうとエリーは表情をほころばせ、笑いを浮かべた。

「そっちこそ」

俺はエリーの横に立ち、そのエリーが残した残り火を見据えた。

これで、最後は零れ物^{ジャンク}だけだ。早く片付けて事件を収束してやるう。

俺はPLDに目を落とした。そういえば、どうやって通信するんだろう。そう思ってたところにエリーが俺の横でPLDに何かの操作をした。

「ジュール、零れ物^{ジャンク}どこ？」

『ウン、キミたちの位置から八時の方向三百メートルぐらいに一体いる。そのほかのジャンクや鉄くず（イリーガル）他のメンバーで当てたから、キミたちはさっき言った零れ物^{ジャンク}を回収してきて』

「うん、わかった」

そう言ってエリーは俺に目配せをした。どうやら建物飛び越え、まっすぐに突っ込むつもりだ。

『じゃあ、頼んだヨ。仲良し夫婦さん？』

「ば・・・ばかあああ！！！」

エリーのその怒鳴り声が俺の耳の中でゴウン、ゴウンと響いた。

STAGE 12

「あれか・・・」

二十代ぐらいの一人の男が、「浮力」を発生させ、下にいる伊達眼鏡をかけている少年とアホ毛をはやしたロングヘアーの少女を見下げていた。緑色を貴重とした軍服を着込み、白い髪形、赤い瞳に左頬に三角形の赤いペイントが貼られていた。

さつき、あの少年は技をコピーした。

さつき、あの少女は自らの属性を変えた。

その男は知っている。あの特徴的な性質を・・・カタストロフ。どうやら、ここを襲ったのは正解だったようだ。その男は指につけている無線機を口に近づけた。

ミッションターゲット「任務標的、確認したぞ。どうする、撤退するか」

その男はそう呟き気味更新すると、耳につけたマイクから聞こえた。大人の女の声だ。

『いや、そのまま続けてくれ。それだけじゃあ、あんまり情報が足りないんでねえ。それに不安な芽は出来るだけ多く摘み取ったほうがいいだろう』

その答えに、男は鼻で笑った。どうやら、気が合っているようだ。

「フン、賢明な判断。愚者には「死」、あるのみか・・・」

『外れくじならねえ』

向こうはなにやら笑っているようだが、男のほうは相変わらずのポーカーフェイスを貫いていた。

「任務続行する」

冷たい声でかえし、そのまま男は通信を切断した。

まだだ・・・。まだ、時期が早い。

「天」と「全六」。どちらも、大切なキーピースだ。失いはしないだろう。

「見つけた」

「うん」

俺とエリーは建物の間を飛び越え飛び越えていき、ようやく標的ターゲットとなる零れ物ジャンクを見つけた。ただ純粋に「花」を意識させるような形状をして、両腕が太いツタとなっていた。みたところ、性質カクストロフで言うなら「林」だろうか。いや、アステス・フェンリルや、イラビツト・チルドリオンの例を考えれば、零れ物ジャンクには性質カクストロフという物は存在しないのだろう。実際、コピーできた技はどれも六個には当てはまりそうに無い。どうやら、あいつもゲームで登場するボスキャラだそうだ。俺のことは何でか知られているが……。

俺とエリーはその待ち受けているかのように君臨している零れ物ジャンクの前に立った。

そして、俺はその零れ物ジャンクの名前を言った。

「【ノルマンデ・ラフレシア】……か」

俺のその声に反応するように、ラフレシアが「フフン」と鼻で笑った。表情は分からないが……。

「あらあら、男と女の子二人で私の甘い蜜の香りに釣られたのお？」

相変わらずナルシスト性は変わらないようだ。ゲームで出ている性格は実際の性格だってことだったのか……。あの二体もそんなだったよな。

「じゃあ、その蜜、無くなるまで吸わせていただこうか。お前の魂を狩りつつした後でな」

「あらあら、実に乱暴な男の子ね。大丈夫、死に行く時にしっかりと吸わせたあげますわ。ただし、あなたが死に行く時に……」

「……………」

俺はまっすぐとラフレシアを見据えた。

その瞬間だった。戦闘の火蓋が切られたのは。急なタイミングだった。俺の下の地面が急に盛り上がりだした。この乗りは……！

「こつちだ！」

「へ？ひゃっ……！」

横に立っているエリーを抱き寄せ、後ろを向いて大きくジャンプしてラフレシアから離れた。すると、俺達が立っていた場所から先端が細く尖ったツタがズオッ！と言う音を立ててコンクリート質の地面を突き破って、勢いよく伸びてきた。

もし、俺がああの地面の盛り上がり^{かかし}に気付いていなかったらどうなっていたか……。恐らく、二個の出来すぎる案山子が出来上がったしまっていただろう。

俺はそのビュンビュンと振るわれるツタを呼吸を荒げながら見やっていた。心臓の動きがとても早い。ホントに危機一髪だ。

「か……一真？」

「ん？」

エリーの震えているような声が聞こえた。そうだ、こいつも助けるために俺はこいつをあるう事か抱き寄せるところまでしてしまっているんだった。エリーの小さな胸が俺の体に直で当たっているが、その時はさすがに気付かなかった。エリーの小刻みに揺れる唇と、脛が俺の目に入ってばかりだったからな。

頬をほんのりと赤く染め上げてエリーを見つめるには今の状況では相応しくない。

「悪い……」

俺は腕の拘束を解き、エリーを解放した。解放されたエリーは俺からはなれ、そして、ほんの少しよろめいた。このシーン、大丈夫か？戦闘中に。変だぞ？明らかに。

エリーは気を落ち着かせれたのか、真摯なまなざしでラフレシアを見つめた。

「でも、どうやって。あいつ、攻撃動作なんか」

「いや……」

エリーが思っていたその疑問を俺は打ち消した。エリーは俺のほうへ顔を向け、顔で「何で？」とか言う表情を浮かべた。俺はその疑問に答えるように顎をしゃくって、俺がさっきまで見ていた場所をさししめた。エリーはその指し示した場所に注目した。

「わかるだろ。あいつの足、地面にあんな上手く突き刺さってるだろ」

「そつか。あんなところから・・・じゃあ、ここって!？」

「ああ・・・。ここは一応あいつのフィールドって言うことだ。どこからでも不意打ちが可能ってことだな」

俺のその緊迫した声色を聞いて、ラフレシアが笑った。

「ソフフフ、その通りよ。ここ全体は私のテリトリー。私の甘い蜜の香りに誘われやってきた獲物は全て、私の餌その物。あなた達はそれにまんまとかかったんですわ。さあ、あなた達からは、「悲鳴」と言う甘くて、ほんの少し苦い、極上の蜜をお渡し上げますわ」その瞬間、俺の横の地面からまたツタが生え、俺の体を横殴りに払いのけようとした。

「グッ！」

さすがに攻撃が地面の中から出てくるんじゃあ、俺の五感なんかアテに出来ない。頼れるのは俺の反射神経のみ。聴覚と視覚に身を任せ、聴覚と視覚を超える。俺はエリーみたいなデカイ大技があるわけじゃない。だからと言って何度もエリーの技をコピーするためには彼女に何度も発動させてなんかいられない。わざわざ彼女にタイムラグを作るようなまねはさせない。

俺は横殴りに来るツタを剣の側面で受け止め、ガードしたが、思いの他、威力が高い。ガイーンッ!と何かが弾けるような音がしたと思ったら、俺の剣を持つ腕が弾き飛ばされ、俺の体の体勢が完全に崩れた。明らかなノーガード状態だ。

「一真!!」

エリーが襲い来るツタを手に持っている太刀で払いのけているところに俺の方へ振り向いた。だが、そんなことをしては完全なノーガ

ード状態だ。

「ほらほらお嬢ちゃん。愛しの彼の心配なんかしてたら、あなたのみが危ないわよお！」

ラフレシアのその言葉と同時にだった。エリーを襲い続けていたツタがエリーを俺とは逆方向に吹っ飛ばした。あいつは確かに俺なんかよりも戦闘のエキスパートだ。だが、五感の感覚だけはどうかと言ったら、俺よりもわずかに劣っている。

「きゃああ！」

エリーの叫び声が俺の耳に入ったと同時にだった。今度は俺の体が真横から飛んできたツタによってトン絵もないパワーで吹っ飛ばされた。バゴンッ！という音が俺の耳の中で響き、体の側面から全体に掛けて強い衝撃が俺の体を襲った。

「ぐああー！」

こういう攻撃のダメージを抑える技術は確かに俺は持っている。しかし、それを差し引いても俺の体にかかるダメージは普通じゃない。リンクしてなかったら体の内臓がシャッフルされてそうだ。

俺の体は何バウンドかして、その後ごろごろと地面を転がった。意識が薄っすらと遠のいていく。だが、こんなところで意識を飛ばしたら俺は格好の的だ。俺がこんな所でくたばれば、またエリーを一人にしてしまう。ジュールに言われたことが遂行できなくなる。

「グッ！」

俺は途切れそうな意識を必死で繋ぎながらフラフラと立ち上がった。

「生きてるか・・・エリー」

「くつつ・・・」

エリーのくぐもり声が聞こえたと思ったらエリーはうつ伏せに倒れていた自分の体を腕の力で起き上がらせ、よろめいた。あいつもかなりもろに食らったみたいだな。エリーは息を切らせ、俺のほうへ顔を向け、口元で笑いかけた。

「あんな程度じゃ死なないわよ・・・私は」

「だよな」

やっぱり鍛えるところは鍛えてるんだな、こいつ。俺は苦笑いを浮かべ、エリーの防御力の高さに戦慄する。これじゃあ、あいつと喧嘩したら俺はあいつを止めることも出来ず、一方的なフルボッコだ。エリーは落とした自分の太刀を拾い上げ、ラフレシアに向かつて構えた。アニメにすればジャキツと言う効果音でも鳴っているだろう。

「あらあら……。まだ物足りないのかしら。あの方には、無駄な殺生は控えると言われているというのに……」

「あの方？」

「多分……」

エリーは俺の疑問に答えるように言った。

「あの組織のボスかもしれない……」

「……」

あの組織……。つまり、Z I Nが所属する組織。エリーが裏切った組織の事だろう。

「そのボスって言うのは、荒っぽい奴だな。こんな大々的に襲ってくるなんて」

「知らない。私、あの組織のボスにあった事無いもん」

「？」

「あの組織のボスは、まさに影のような存在。組織内でボスに会ってそうなのは……」

「Z I Nだけ……か」

「そう。たぶんこの零れ物ジャンクはジンを通して命令されてる」

「そうか……」

もし、そうならば……。俺は、エリーはもうすでに奴らの照準サイトの中……。か。いや、可能性はゼロではないが、単純に探りを入れてきたという可能性もある。

もし、後者の場合なら、この零れ物ジャンクに絶対負けるわけに行かない。負けて俺とエリーが倒れれば、こいつにここに裏切り者と、殺しそ

こないがいると報告される。そうならば、周りの人たちにも危害が加わるかもしれない。

俺は気を引き締めて、ギリツと齒軋りして、剣を掴む手に力を込めた。だが、どうする……。こいつをどうやってここで倒す。どうやればいい……。こいつを地面から引き剥がすのが一番いいはずだ。だが……。

そう思ってる矢先だった。エリーは真っ直ぐに突っ込んでいった。ってか、あいつは猪か!?

「ンフフフ……まさかお嬢ちゃんから来るとはね。いいですわ……。じっくり味わいなさい……!」

すると、エリーを追うように、地面が隆起していつていた。悪い予感だ!

「エリー! 後ろだ!」

その瞬間だった。バガンツ! 大きな音を立てて日本の太いツタが飛び出し、エリーに向かってその尖った先端を突き刺そうとした。

(まずい!)

俺が愕然とするような表情を浮かべた、その瞬間、エリーの眩きが聞こえた。

.....

先端が尖ったツタはエリーを貫いた。赤い髪をしたエリーの顔が口を大きく開けて、突然の攻撃に驚いたような表情を浮かべていた。

「ああッ……!」

最悪だ。目の前であいつがやられるなんて思っても無かった。体を貫かれたエリーは口を大きく開けて、目を大きく開けて苦悶の表情を浮かべていた。苦しみの悲鳴すら上げられない。

「ンフフフ。さあ、言ってるっしょい。永久の死出の旅へ」

「お前・・・！」

「さあ、後はあなただけですわ。いらっしやい。あなたもすぐにこのこと同じ場所に送って差し上げますわ」

「お前ええ！」

俺の体全体の毛が逆立ち、怒りが外にあふれ出ていた。だが、すぐに失せた。なぜなら・・・。

「ああああ！！！」

ラフレシアが突然叫んだ。ラフレシアの後ろに何かがいる。いや、誰かがいる。その証拠に、ラフレシアの背中から、無数の青い粒子が飛び交い、クックリ形の双剣が、ラフレシアの体を背中から貫いていた。そうだ・・・。

「なに絶望してるのよ、一真」

彼女は、ラフレシアの背後で、俺に向かって笑いかけてくれた。

「エリー、生きてたのか！？」

「当たり前でしょ。こんな奴の攻撃なんか、すぐに読めたわよ」
そう言っ、エリーは両手に握る、双剣を引き抜き、足でラフレシアの体を蹴飛ばし、うつ伏せに倒した。今のエリーはいつもやってる風や火をイメージする物じゃなかった。

髪の毛はいつもよりも黒く、漆黒に染まり、白目の部分は真っ黒に染まり、紅焰のように赤かった瞳は鮮血のように真っ赤で、その中心の黒い部分が際立っていた。

そして、さっきラフレシアが貫いた物は、バシュウッ！と音を立てて、黒い影となって消え去った。

（影・・・じゃあ、さっき呟いたのは）

俺はもう一度エリーが呟いたアノ言葉を思い出した。

——コ・・・シャ・・・

——コード・・・ドウ

——CODE SHADOW

そうか・・・あいつは攻撃を食らう瞬間、自分の属性を「陰」属性に変えたのか。「陰」、即ち「影」だ。さっき使ったのは、さしずめ、影分身と言ったところか。なんて便利な属性だ。フェイクするのに特化した属性だったのか。

「エリー・・・」

俺がそう彼女の名前を呼ぶと、エリーは微笑みながら、元の黒い髪の毛で、こげ茶色の瞳に戻った。白目の部分も戻ってきている。終わりだ。これで・・・。

俺はそう思いながらラフレシアを見下げた。体を貫かれ、抉られた傷口からは青い粒子が上空に飛び交っていつていた。

・・・あれ。

なんだろう。一瞬にして俺の緩んでいた気が締まっていた。俺はその感情を殺しながら、エリーを見つめた。そのエリー本人も同じだった。何かを感じた。何か物足りない。このパターンの中で何かが欠けている。

俺とエリー。多分、同じ事を思っていた。

— CODE FLAME —

エリーの体を炎が包み込み、そして、弾けた。その中からは赤い髪の毛に、炎のような赤い瞳をしたエリーが、わずかな装飾が施されているバスターソードを片手に握っていた。緊張の沈黙が訪れる。何かが起きる。まだ、何かが起きていないという感じが俺とエリーを襲っていた。そして、起きてしまった。

俺とエリーに挟まれているラフレシアはまるで機械仕掛けのようにガタガタと立ち上がり、しばらくダランと両手を下げていた、と

思ったら、突然大きく手を広げ、天を仰いだ。

「ゲウ・・・アアアアアアッ！！！！」

それは、獣の雄叫びに近い物だった。その雄叫びが上がった瞬間、突然ラフレシアの周りの地面がゴガツ！と言う音を立てて崩れ去り、大きく回転するように無数の太いツタが生えてきた。

「ぐあっ！」

「きやああっ！！」

その太いツタはまるで俺とエリーを拒絶するかのように弾き飛ばし、その後ブワツ！大きな風が巻き起こった。そのまま回りの建物を巻き込んでその建築物のコンクリートやら瓦礫やらを取り込んで、ラフレシアの方へと集めていった。

厄介かもしれない。これはある意味。

ほんの三十秒もしない内に、瓦礫が集まって形成された物はやがて鎧となり、ラフレシアの体を包み込んでいった。

パツと見サイズからしたら、だいたい五メートルぐらい。どこぞの大ボス様かと思わせるぐらいのサイズだった。

セカンドバトルだ・・・これが。

俺がそう思った瞬間だった。ラフレシアを中心に大きな亀裂が何本も入った。

「ゲギガアアアッ！！」

ラフレシアが叫んだ瞬間、その刹那。俺とエリーの体の回りに何本もの太いツタが現れた。逃げ道のないように、俺とエリーを取り囲んだ。

「やつべえ・・・」

こんなこと、ゲーム内じゃあ一度もして来なかった。けど、何されるかぐらい、見当がついた。

俺の周りにあるツタがグググッ・・・としなる音がした。そう、逃げ道がなく、どうしようもないこの状況で、そんな事されたら、俺の身がどうなるかなんて想像したくなかった。

「——ッッ！！」

バターンツと言う音を立て、無数のツタの強烈な叩き^{はた}によって俺の体が押しつぶされた。息が一口气につまり、一瞬呼吸が停止する。叫び声すら出ないまま、俺の口から少量に血が飛び出てきた。ある意味首を絞められるより、タチが悪い。多分肋骨が持ってかれたかもしれない。これが肺に刺さらなければいい。だが、裕著してなんかいられない。俺の攻撃は止んだが、エリーが問題だった。

「ぐ・・・がッ！」

エリーの両腕が大きく広げられるように持ち上げられ、一本の太い奴から生える枝のような細いツタが手首を縛り、ギリギリとエリーの首を締め付けていた。エリーは眉をゆがませ、苦しそうな表情を浮かべていた。あのまま行けば、エリーが窒息でくたばるか、首の骨が折れてそのままくたばるか、どっちかだ。

何か手があるとしたら、こいつを手っ取り早く倒すか・・・いや、こんなにも何重に鎧があるんじゃあ戦いのど素人の俺がソロで戦ってもだいたい時間がかってしまう。やるとしたら・・・。

「フンッ!!」

俺は片手剣を逆手に持ち替えて、体勢をかがめた。ブウウという高速で刃が振動する音がする。狙うはあの主軸となっている太いツタ。あれを切り落とせば、多分エリーを縛り付けているツタは力を失う。チャンスは一発。ミスったらタイムラグを食らって俺にデカイダメージが食らわされることは間違いない。それが、今のエリーのようにされる。

俺の体は秒速六十メートルの世界に入って、一気にツタとの距離を詰めた。

——ソニックブレイド

俺は思いつきりそのツタの刃をぶつけた。

（クソツ・・・なんて硬さだ）

思いのほかの硬さだった。俺の腕力はアステス並みじゃない。こんな物を切るのにも一苦労を欠けそうだ。刃とツタの接触面から火花が飛び散り、ガガガガギギギツツ！！というチエーンソーで気を切っているような音がした。

「グダアアア！！」

俺の後ろに太いツタがゆっくりと生えているのを感じた。

（ヤベエ！）

俺は後ろに気配を散らせた。もし、あれが襲ってきたら・・・。
そう思い、俺はそのツタの接触面に集中した。

（もつとだ！もつとパワーを！）

一刻の猶予もない。だから、もつとパワーを！

「うおおおおおおおおおッ！！」

俺は叫んだ。その場に響き渡るぐらい、叫んだ。誰も死なせない！誰も、俺の目の前から一人も欠けさせるか！

俺がそう心の中で念じたときだった。俺の掴む剣がギキイイッ！と鳴くような音を鳴らした。すると、その剣が発する波動が強く輝いた。

すると、ミシッ！と言う何かがヒビがいくような音がした。接触面視点到、ツタに亀裂が入り、放射状に広がっていた。

「やれ！アルスタアア！」

それが、俺が咄嗟につけた俺の武器の銘だ。俺はそのヒビを力づくで押し込み、広げていった。バシンツバシンツと言う音が聞こえ、ツタが大分傾いてきた。

「これで、折れる！」

メキヤッ！と言うあっさりとした音が聞こえたと思ったら。その太いツタがバキバキの切断面を作り、まるで大木みたいに倒れた。だが、それで終わってはいけない。エリーの体は拘束から解かれ、力なく崩れるように落ちた。まっ逆さまだから、あんまま行けば頭から地面に激突だ。お陀仏決定打だ。

「エリー！」

俺はタイムロスを食らっている体を痛めつけて無理やりエリーのほうへ跳び向かった。俺はアルスタを投げ捨て、エリーに両手を差し出した。

エリーの頭が俺の手に触れる。

「届け！」

俺の体はエリーと地面の間をすり抜け、エリーの体は、俺の体の背中の上に落ちてきた。漫画でよくあるギャグシーンみたいな描写だが、本当はただ事ではないということが身に染みて分かった。背中に人の全体重のパワーと落下速度分加算されたパワーが一気に俺の背中を襲った。想像を絶する激痛だ。

俺はエリーを体からどかせ、エリーの前にかがんだ。

「エリー！」

一回彼女の名前を呼んで、さすっただけだった。出来たのは。その瞬間、俺の頭上から太いツタが振り下ろされた。

「ヤバイ！」

俺はエリーを抱きしめ、地面を転がって、そのツタの攻撃を回避した。ドガンツ！と言うデカイ音共に、地面に太いツタが振り下ろされ、それがめり込み、落下の衝撃波が俺とエリーを襲った。だが、ノーガードのエリーにぶつけるわけには行かない。だから俺はエリーの体に覆いかぶさり、その衝撃波を俺の背中全体で受け止めた。

「ゲッ・・・ガッ！」

呼吸の規則正しさが一瞬失われた。それだけでもかなりのダメージが俺の体に襲い掛かる。だが、くたばる訳にはいかない。

切れそうな意識の中で、エリーのまだ生きているというぬくもりを感じながら俺の意識をつなぎとめて行った。

俺は衝撃波が止んだと同時にエリーから離れ、エリーの前にかがむようにして座り、彼女のみをさすった。

「エリー・・・エリー！」

「う・・・」

エリーの瞼が一瞬歪んだ瞬間、エリーはほんの少し目を開け、俺の顔を視認した後、「ゴホツゴホツ」と大きく咳き込んだ。さつきまで首を絞められ窒息寸前だったからな。エリーはそれをしてから、俺の顔をもう一度見て、座り込むような姿勢になった。

「一真……？あれ？何で……何してたんだろう。私」

「さつきまで死に掛つてた状態だった」

「そう……」

エリーは沈み込んだような表情を浮かべ、顔を俯かせた。そして、何かに気付いたようにハツと顔を上げ、俺の顔を見てきた。

「ねえ、あの零れ物^{ジャンク}は！？」

「まだ生きてるよ」

「へ？」

そう言つてエリーは俺の体越しに凶暴と化したラフレシアを見た。ラフレシアの鎧の周りに何本もの太いツタを振り回されている。

「いっちょ暴れるか？一緒に」

そういつて俺は立ち上がり、エリーに手を差し伸べた。エリーは一瞬伏目がちになり、頬を赤くしたが、俺が差し伸べた手を掴み、俺に引つ張られるように立ち上がり、落としたバスターソードを拾い上げた。そして、その刀身を見つめ、目を閉じた。

—— CODE CRIMSON

エリーの体内から「火」の性質の性質^{カクストロフ}が漏れ出し、エリーの体全体から火の粉が飛び散っていた。タイプが変わったのか、エリーの手^{カクストロフ}に握られていたバスターソードが激しい炎に包まれ、その中から、美しい反りを描き、柄から銀色の装飾が刀身の背に伝うようになって、いる太刀があらわれ、エリーの手^{カクストロフ}に握られた。その太刀からも、エリーの「火」の性質が漏れ出すように残り火如く刀身が火を纏つ

ていた。

このとき、本気でこいつのことをかつこいいと思った。火を纏ったエリーの姿は何よりも美しく、何よりも底なしにかっこよかった。そこに落ちているアルスタを拾いながら、俺はそんなエリーの姿を見て、口元で笑った。そんな視線にエリーは気付いたかのように俺の方へ向いて、口を尖らせて、頬を赤くしてツンとした表情で俺の顔を見やった。

「何よ・・・何かついてんの？」

「いや・・・。今のお前は底なしにカッコいいと思ったただけだ」
「ツツ!!」

エリーは息が詰まったような表情を浮かべて、俺から完全に目をそらせた。俺側から見えるほんの少し見える表情は何か緊張しているような表情だった。

何か緊張するような事言ったか？俺。

俺がそんなことを思いながら首を傾けていると、エリーはハッとしたような表情を浮かべ、喧騒な顔で俺を睨みつけてきた。

「もう！戦闘中に何言ってるのよ！一真のバカ！馬鹿バカばかりかあ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

いつもと違う使い方に一瞬と惑った。いつもその言葉を使う時はこいつの都合が悪かったり、誰かにいじられすぎたときにむかついたときに、その話を強制的に打ち切りするという時に使うはずの言葉だ。そのどちらも当てはまらないというこのときに使ったということは、こいつ、相当テンパッテいると見る。

「エリー・・・」

「なに？」

「どうやったらあいつ倒せる？」

違った。俺が本当にいいなかったのは・・・。いや、必要ない。

こいつは強い。俺なんかよりも一〇〇%強い。俺はその本当の言葉を脳裏からも打ち消すように鼻で自嘲気味に笑った。

エリーは俺のその問いに対して、顔を少しゆがめて考え込んだ。
「まず、あいつの本体を引きずり出さないと話にならない。でも・
・」

エリーはその鎧を見上げた。俺たちの身長なんて優に超えてしまっている大きなガタイをした岩の鎧。ラフレシアがいるのはこの中のほんの一点。そこをデカイ一撃でさらし者にして、もう一人がラフレシアに止めを刺す。現時点で考えられる得策はそれぐらいだろうか。俺はそんな事を伝えるかのようにエリーにアイコンタクトを配った。

エリーはその視線に気づいたのか俺のほうを向いて、俺の目をむいた。伝わったら、最強だ。警部以来の逸材だ。

「何？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ま、そんな事期待しないほうがいいと分かってたけど・・・・俺は大きく溜め息を吐いてエリーをじと目で睨んだ。

「何よ！」

「やっぱりお前は、警部以下だ」

「くう・・・・。フンッ！」

エリーはうちに湧き出る怒りを押さえ込んでラフレシアの方へ向き直った。

「一真」

「何だ？」

「私があいつにでかい一撃を加える。そのときにあいつの姿が見えたら、ソニックブレイドでぶった切って」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

同じ事を考えてたのか。これはこれは失敬。前言撤回だ。やっぱりお前はすごいよ。口にはしないけど。

俺はエリーの提示した、（っていうより俺も考えてた）作戦に大賛成だ。それを示すがごとく、口元でうっすらと笑いを浮かべ、アルスタを構え、ラフレシアに向き直った。

「了解。エリー隊長？」

「それ以上言うとぶった切ってミンチにするわよ」

エリーがとんでもなくやばい事を御発言なさった。いけなしいけなし。これ以上刺激しないでおこう。しかも声調もいらいら満開でほんの少しドスが効いていた。こわあ……。

「短期決戦でいくわよ。私も性質がほぼ尽き掛けてるしね」

「そうかい。俺の責任重大だな。で？」

「ん？」

エリーは目をほんの少し大きく開け、俺のほうへ目配せをした。

「その短期決戦だといってるが？それだったら、どうやってこいつの鎧をひっぺがえして、丸裸にするんだ？」

「決まってるでしょ。技を使う」

「なるほどな」

案外単純なことだった。ってか、まだあるのかよ。しかも、その技でさえもコピーしてしまうのが俺の性質である。カクストロフ

「でも、たとえコピーしても絶対に使っちゃだめ。ここぞって時にしか使わないし、これが使えるには性質のコントロールも少し必要になる。だから、使っちゃだめ」カクストロフ

「分かったよ」

でも、最初の一発は俺の意思に反して発動するがな。

「もう構えてて」

「ああ！」

俺は逆手にアルスタを持ち、体勢を低くした。ビィィィー！という高振動を刃が起こす御恒例行事。もう慣れてる。

エリーは……。

「何だよ……あれ」

焰が……龍になっている。エリーの体に巻きつくように、焰が龍を具現して、天に昇ろうとしていた。

グガアアアアッ！！！！

竜が天にほえる。エリーの体が、龍の体から見えた。エリーは目

を睨ってひだすらその性質をコントロールすることに気を集めていた。

そうだ、これがエリーなんだな。エリーの、「全六」の力だったんだな。

エリーは目を開け、敵の鎧を見上げ、太刀を天に上げた。

ゴゲガアアアアアアアアッツッ！！！！

炎龍は天に昇り、咆哮を上げた。おいおい・・・まさか。俺は耳の中で響く咆哮を聞きながら、ひたすらタイミングを待っていた。早く何とかしてほしいというのも言っまでも無い。

その瞬間だった。

——プロミネンス・ロード

エリーの声で、しかし、エリーが言ったものではないその技名が、俺の頭の中で響いた。

ギャガガギャアアアア！！！！

炎龍が天から降ってきた。天から垂直にラフレシアの鎧に向かって落ちてきた。

落下の瞬間、口や言葉や文字では言い表せないほどの爆音、（文で表すとすれば、バガドガンッツッ！！！！かな？）身を焼かれるような熱風が、俺を襲った。だが、このチャンスを見逃してはいけない。目が焼かれたっていいという気持ちでラフレシアが居た場所を凝視した。そこにはガラガラッ！と盛大な音を立てて鎧が剥がれ落ち、解けていく様と、そして、鎧が無くなり、自らを守る盾をなくしたラフレシアが、立っている影を見つけた。

（あれか！）

俺はラフレシアがいる場所を凝視し、俺の照準サイトから逃さないようにした。

しばらくすると、バシユウツ！と言う音を立てて、炎龍が落下した時に発生した炎柱が消滅した。そこに、ラフレシアが全く動かないような状態で、よろめき、ようやく立っているという様子が伺えた。

（行くぞ！）

俺は足に力を集めた。

——ソニック……………

——ヘブンズレイド

「!？」

俺の脳裏に、何かの技名が俺の頭の中で響いた。聞いたことが無い。だが、俺の意識は確実に体から離れた。

俺の体は、急に逆手に持ち替えるのをやめて、順手でアルスタを握った。その瞬間、ギキイイツツ！と言う、さっき聞いた、アルスタの泣き声、だが、さっきよりも激しく、大きな音が俺の耳を刺していた。俺のアルスタの帯びる波動が大きく、激しく燃え上がるようになり、そして、それを横に一振りした。

すると、メタリックシルバーの衝撃波が、飛んでいった行程を見せないまま、ラフレシアの体を引き裂くように、描かれた。

「ゲア……ガ……アアアアアツツ!!」

ラフレシアは断末魔の大きな叫び声をあげながら、横に真っ二つになった。上半身はすぐに消滅。下半身はちよつとずつヒビを入れながら、最後はバキリンツ！と言う、盛大なガラスが割れるような音を上げ、バラバラになって青い粒子となって消滅した。いや、消滅はしない。

何故なら、その青い粒子は消滅する前に、俺のPLDの方へと集まってきたからだ。バラバラになって青い粒子となった上半身も、俺のPLDに吸い寄せられるように集まり、全て吸収された。

だが、そんな光景など、今の俺の目には入らない。ただ、俺の頭の中にはさっき俺が発動した技のことしか、頭に無かった。

（見た事も無いあの技。一体なんだったんだ？）

俺はそれを聞き出すかのように、手に持っているワンハンドロングソードの片手剣、「アルスタ」に目を落とした。

しかし、それは何も答えず、ただいつものようにかすかな白い光と黒い光を刀身から放っているだけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5464y/>

アリアドネの銀弾?【発端】

2012年1月15日01時48分発行